

石門山志序

石門山志序

石門山志序

此乃吾所經海子圖

此乃吾所經海子圖

此乃吾所經海子圖

此乃吾所經海子圖

此乃吾所經海子圖

此乃吾所經海子圖

白



山

香
怪
画

子

五
美

夏水

明治三十四年

書白

白石海



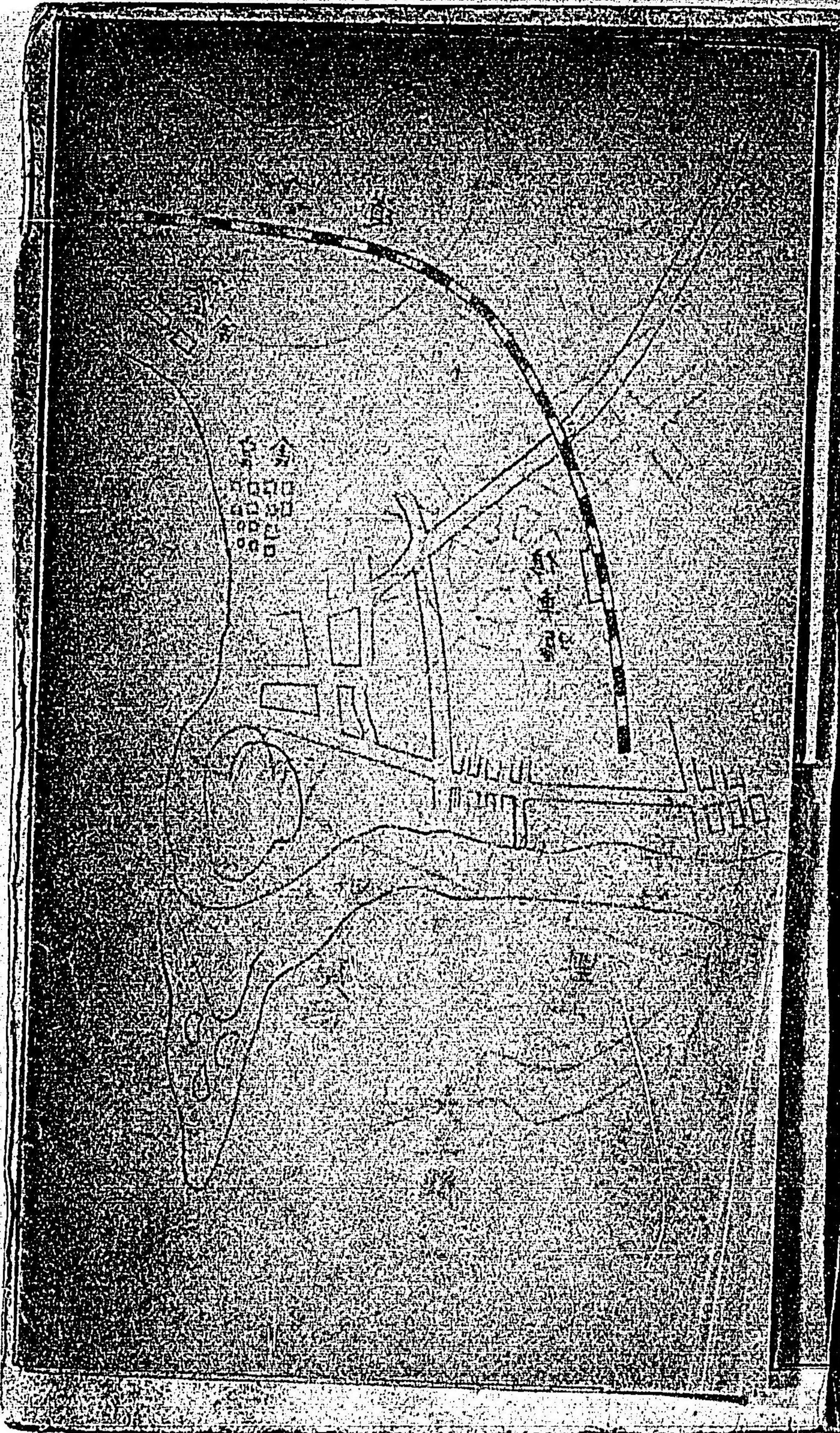
序

小越君支那を漫遊し客歲九月歸朝す復將に再遊を志し發せんとするに臨み此書を著し諸友に頒たんとす夫れ支那國土の廣大人口の夥多河川流域の縱横山嶽田野の豊沃穀物産せざるの地多く礦物藏せざるの所なし實に天府の土なり唯現時の弊政其極端に達し歐人をして垂死の老漢藥石の效なきを公言せしむるに至るは豈に慨嘆せざるへけんや吾人遠く歴史の關する所を視近く馬關條約の係る所を察し善隣

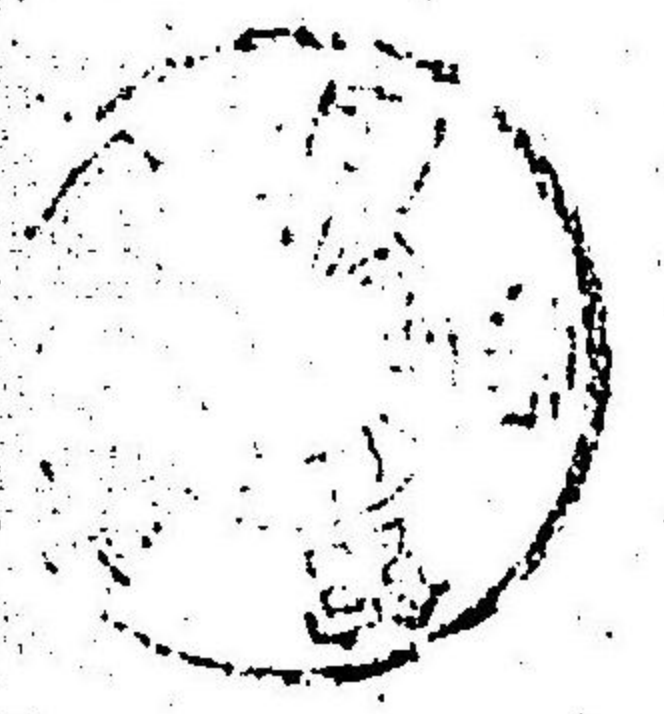
の交誼豈に歐人の説に雷同附和することを得んや小越君爰に志す所あり單身復支那に入り其初心を貫徹せんと期す余は更に君が他日其病に適する所の藥石を齎し歸朝あらんことを切望す茲に其行を壯とし錢に代ゆるに一言を以てす

明治三十四年四月

富田鐵之助識



露名タルニ湾即ち大連の西湾
大都會の見取圖二百方露里



市街地

市街地

公園

市街地

公園地即市場

道 鉄

南三十里に至り旅順線小舎を

市街地

官舎

官舎

石炭揚場

停車場

北
↑
南

市街地

船渠地

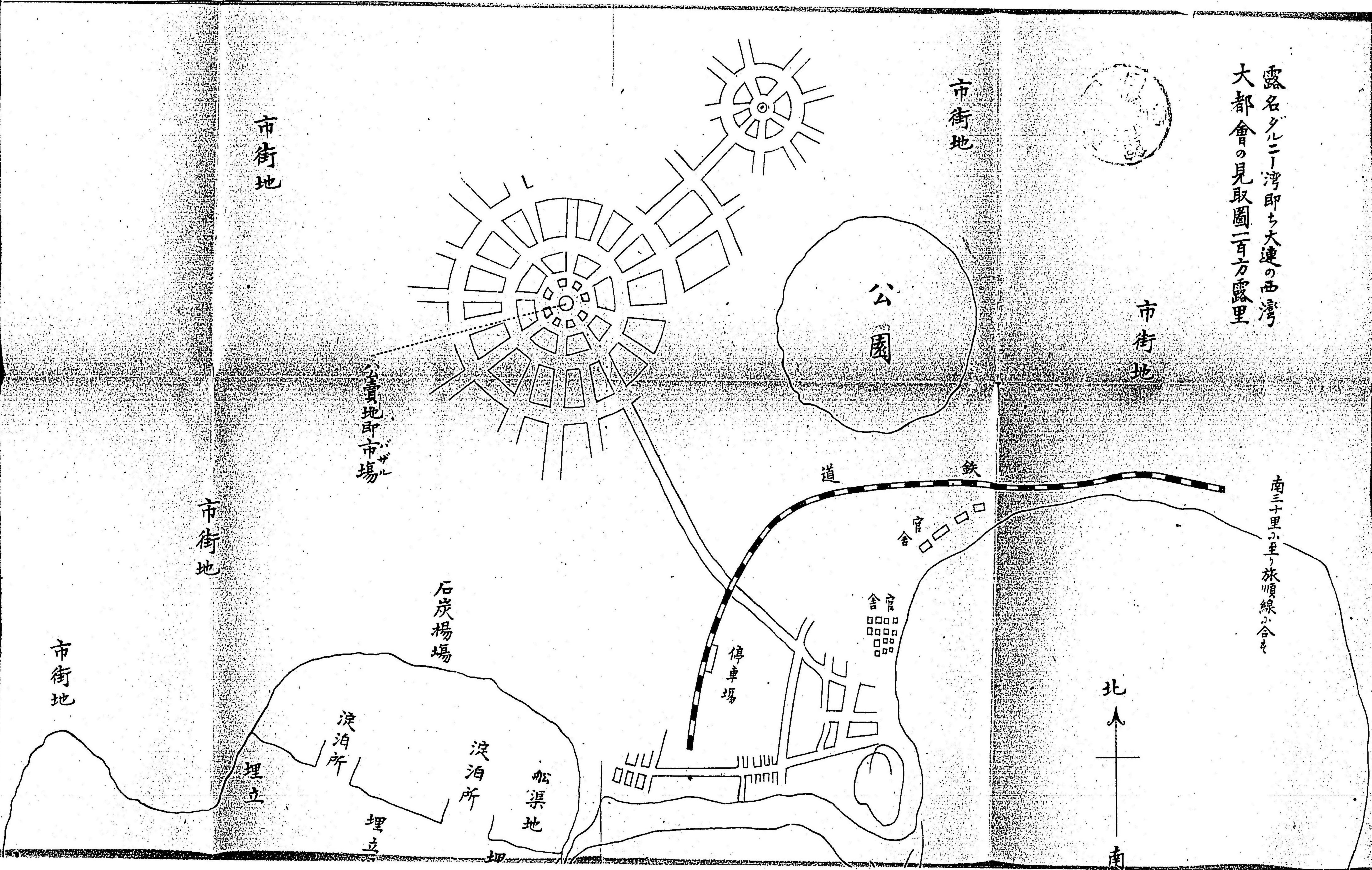
浚泊所

浚泊所

埋立

埋立

切



露名タルニ湾即ち大連の西湾
大都會の見取圖二百方露里



市街地

市街地

公園

公園地即市場

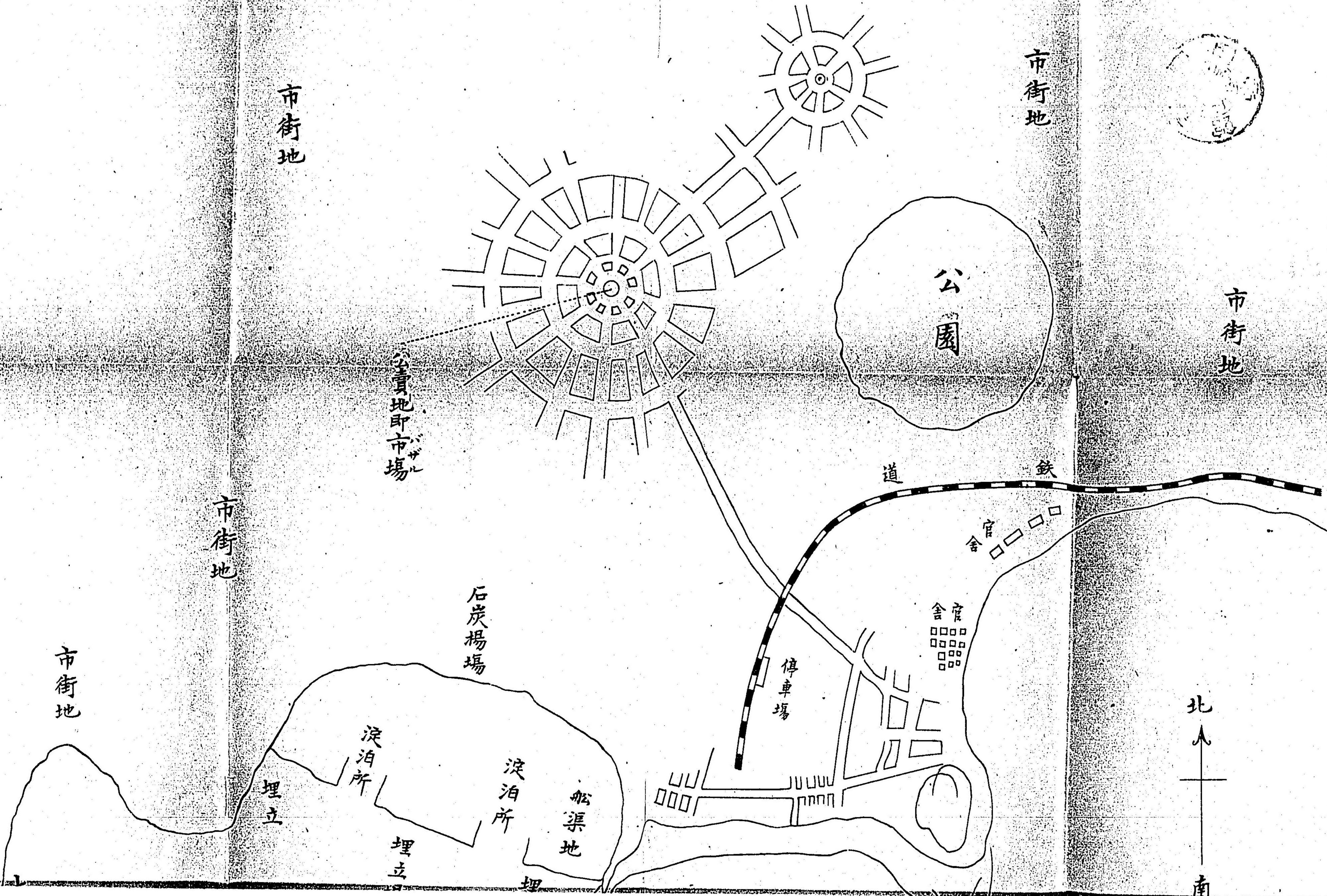
市街地

市街地

市街地

南三十里小至、旅順線小合を

北
↑
南



入連の西灣
百方露里

市街地

公園

公園地即市場

道 鉄

南三十里に至り旅順線小舎を

北
↑
南

市街地

市街地

石炭揚場

停車場

官舎

官舎

浪泊所

浪泊所

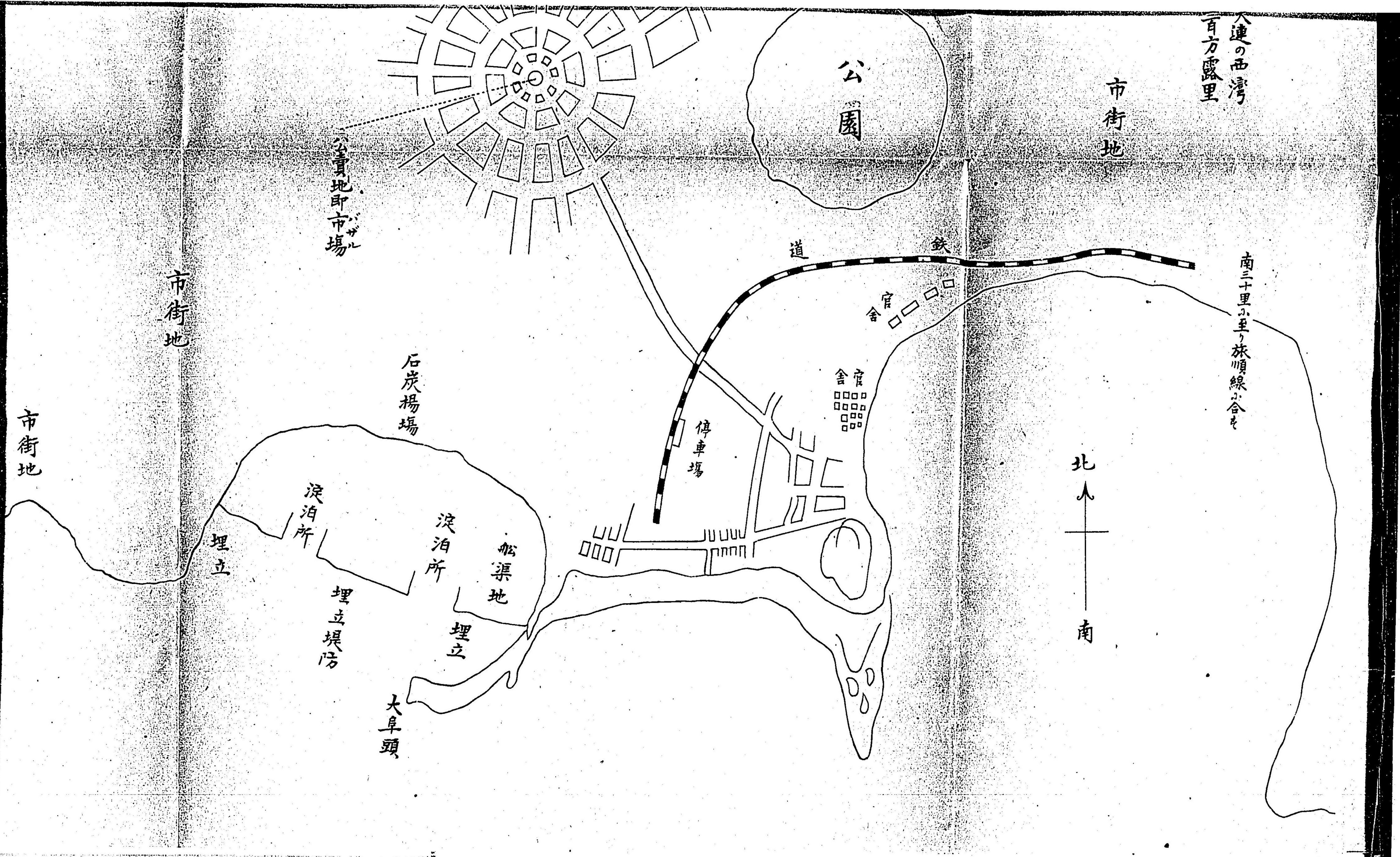
船渠地

埋立

埋立堤防

埋立

大阜頭



大連の西灣
百方露里

市街地

南三十里に至り旅順線小谷を

公園

道 鉄

公園地即市場

市街地

北
↑
南

官舎

停車場

石炭揚場

市街地

船渠地

浚泊所

浚泊所

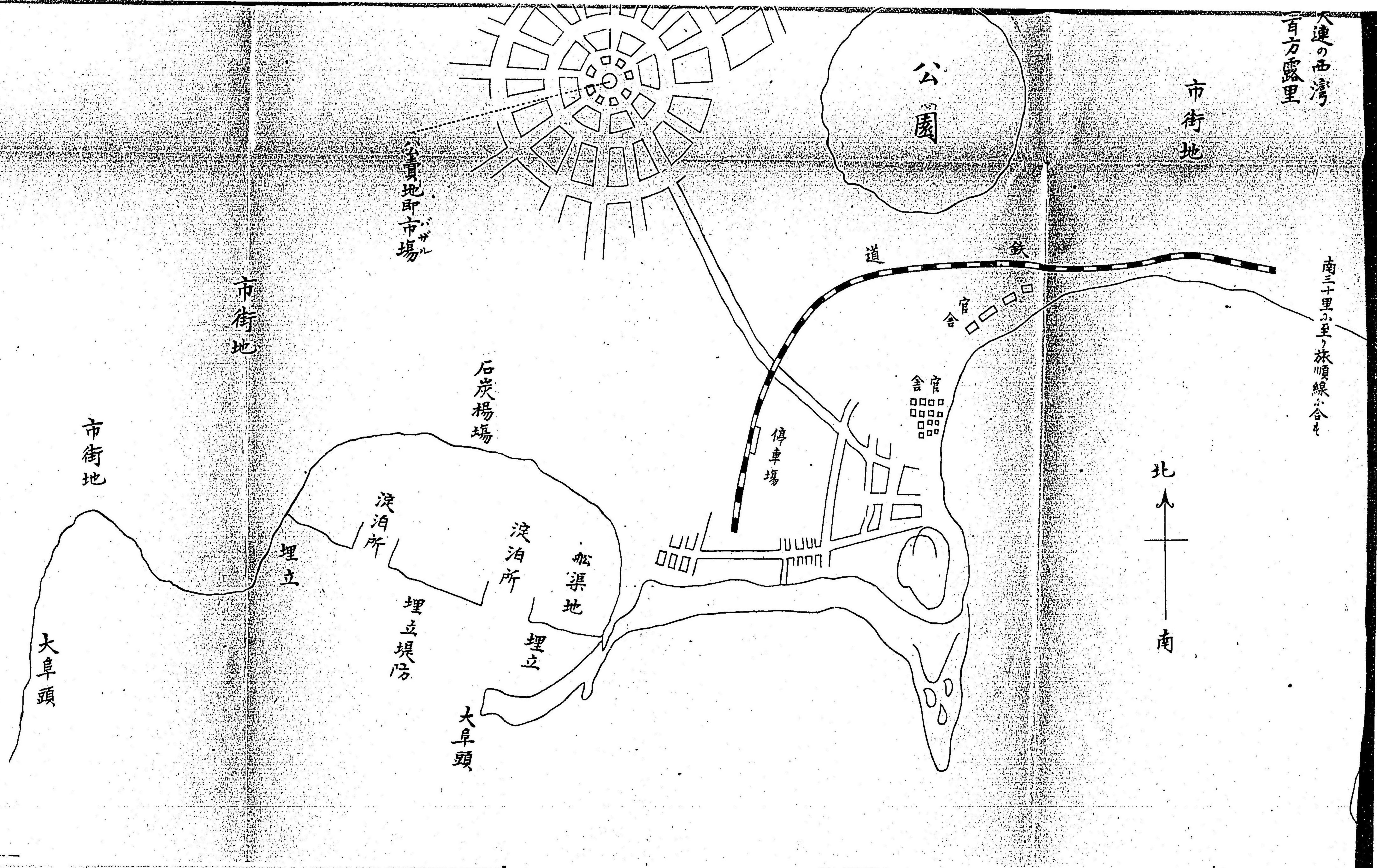
埋立

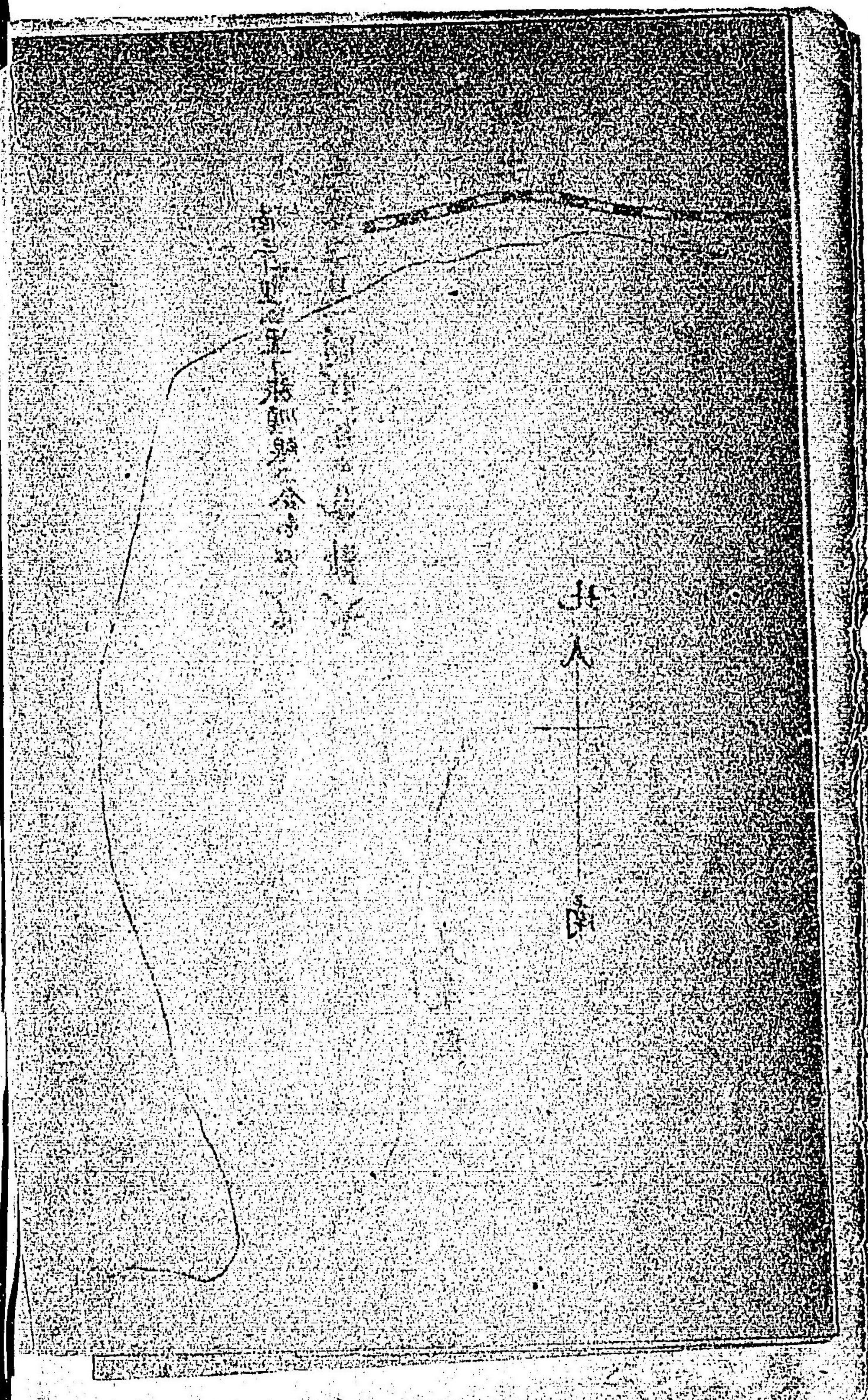
埋立堤防

埋立

大阜頭

大阜頭





凡例

一 本書は明治三十一年四月より五月に至る満洲旅行紀事及び同三十二年四月より七月に至る満洲旅行紀事を集めたるもの然も三十二年中紀事の一般は同三十二年九月頃より大阪朝日新聞并に東京朝日新聞に續載せるもの

一 東清鐵道の情況は滿二今年を經過したる今日工事の進捗に大變動あり故に最近の通信

及ひ其地を經歷したる人に付て聽取し其足らざる所を補ふ
一本書著述の際田邊工學博士の調査及ひ辻曠氏實見并に露書遠山景直氏及ひ某氏に聞きたるもの多し諸氏に多謝す
一著述の際遼史、金史、元史、聖武記、朔方備乘、水道提綱及ひ滿洲地誌等を引用せり

白山黑水錄

目次

序論及び漫遊の旅程	一
東清鐵道の確定線路	六
滿洲鐵道の確定線路	一〇
露西亞人の新都會(滿洲鐵道の中央停車場)	一四
露人の滿洲經營と松花江の水運	二〇
鐵道通過地と都邑の消長變遷	二六
露人と滿洲	三一
滿洲の平原	四七
滿洲の水運	五六
滿洲の陸運	五九

滿洲の道路.....	六二
吉林府より琿春.....	七〇
高麗觀及び圖們江邊の韓民.....	七五
琿春より寧古塔.....	八〇
寧古塔より三姓.....	八四
三姓より阿勒楚喀及び呼蘭.....	九一
呼蘭より齊々哈爾.....	九八
齊々哈爾より伯都訥.....	一〇一
伯都訥より長春.....	一〇六
長春より通子江及び法庫門.....	一一一
法庫門より新民屯及び遼陽.....	一一七
山海關より奉天.....	一二九
奉天より吉林.....	一三二

奉天より興京及び吉林.....	一二七
奉天より營口.....	一三二
營口貿易.....	一三四
都府の人口及び經緯度.....	一四一
人情風俗一般.....	一四七
農耕.....	一六一
漁獵.....	一六五
牧畜.....	一六八
製造業.....	一七一
氣候.....	一七四
通貨.....	一七六
物産.....	一八〇
山嶽及び江河.....	一八四

窩集(大森林).....一九九

鏡山.....二〇五

滿洲に於ける山東移民の状況.....二〇九

内蒙古の東四盟旗.....二二二

歴史.....二二四

露國の滿洲に於ける最近の歴史.....二四六

明の年號.....二五〇

清の年號.....二五一

目次終

白山黒水録

序論及び漫遊の旅程

滿洲東三省の地は古の營州の東境、肅慎、夫餘、挹婁、勿吉、靺鞨、黒水靺鞨、使鹿、打牲、打魚、賈紹、等の部なり其廣袤を以てすれば六萬三千餘方里にして我日本に一倍半し其の田野を以てすれば土壤肥沃五穀豐熟營口の互市貿易は之を世上に證明して餘あり其の山嶽を以てすれば長白山の嶮巖安嶺の大其南北に磅礴し其江河を以てすれば黒龍、松花、嫩、烏蘇里、遼、鴨綠、圖們の諸江其の大原野に縱横し其大窩集(森)は長白山、小白山、東興安嶺、西興安嶺を覆ふ砂金の豊富にして且つ純良なる殆ど世界に冠たりと石炭も亦各地に産せり

遼は嘗て其北邊より起り宋を苦め女眞は其の東を用て殆ど宋を覆し南宋をして偏安せしむ愛親覺羅氏之を用て遂に明を滅し禹域を奄有せり後其の地を分て東三省となす則盛京、吉林、黒龍江の三省是れなり

盛京省は奉天を以て首府となし盛京將軍茲に駐札し盛京、金州、興京、錦州の四副都統を置き奉天、錦州、昌圖の三府、復、遼陽、寧遠、義、岫巖の五州、承德、海城、蓋平、開原、鐵嶺、錦、廣寧、懷德、奉化、康平、安東、寬甸、通化、懷仁の十四縣新民、海龍、營口、金州、鳳凰の五廳を置き旅人及人民を管せり

吉林省は吉林府を以て首府となし吉林將軍茲に駐札し吉林、寧古塔、伯都訥、三姓、阿勤楚喀、琿春の六副都統を置き吉林、長春の二府、伊通の一州、農安、敦化の二縣、双城、伯都訥、賓州、五常の四廳を置く

黒龍江省は齊々哈爾城を以て首府となし黒龍江將軍茲に駐札し黒龍江(愛)墨爾根、齊々哈爾、呼蘭、呼倫貝爾、布特哈、通肯の七副都統を置き呼蘭、綏化の二廳を置く

其地勢は南に長白山あり朝鮮と境を接し北に大興安嶺あり東に小興安嶺あり松花江は長白山に發源して北流し嫩江は大興安嶺に發源して南流す二江相會して東流す東遼河は長白山の西北支脈に發源し北流し折れて西流す西遼河は上都に發源し東流す二河相

會して南流海に入る烏蘇里江は長白山の東支脈に發源し東流し黒龍江に入る黒龍江は外蒙古の肯特山(成吉思汗
崛起の地)に發源し北流し折れて東流す再び折れて南流し松花、烏蘇里と會して海に入る鴨綠、圖們の二江は共に長白山に發源し一は西流し一は東流し共に海に入る山海關外遼東の地は渤海及び黃海に面し烏蘇里一帯は日本海に面せり松花、嫩二江の會する處遼河の奔流する處黒龍、烏蘇里の滙する處皆大平原を有し優に數千萬の民を容るに足る是れ此の山嶽江海原野は實に滿洲三省の筋骨となり血脈となり膏腴となり梁圃となる嗚呼此の三省は優に以て一國を形成するに足る況んや既に一國を形成すれば朝鮮は殆ど掌上に在るか如し

露の慧眼なる數百年來業に已に之を知る故に西比利亞の經略より進て黒龍江の遠征となる然も尼布楚(康熙廿八年子ル
テンスク條約)條約の時彼に利あらず一頓挫を來すも彼の不屈不撓なる愛璉(咸豐
八年)條約となり天津(咸豐八年愛璉
定約後半月)條約となり北京(咸豐十年イカナチエフ
翁親王好意的密約)密約となり遂に今日を馴致せり邦人たる者豈夫滿洲を知らずして可ならんや是れ生が二回の滿洲旅行となり白山黒水録ある所以なり

余嘗て長江を溯り湖北宜昌より陸路三峡の險を超へ四川の野を徧遊し打箭鎮に到り西藏の一端を窺ひ劍閣棧道の嶮を超へ咸陽、洛陽の古城を吊し漢口に歸來すれば朔風漸く將に穩なら去んとす即去て山東に遊ひ又海に航して遼東の一角に登り營口に至り海城遼陽より奉天に遊ひ天柱山下の福陵を過り渾河を溯り薩爾濟城(太祖明の大軍を破る)の古戰場を吊し清太祖の英風を歎し啓運山に永陵を望み興京に於て太祖の微時を思ひ旺清門を過き吉林哈達(哈達滿語山)に於て始めて滿洲森林の一端を見海龍城、朝陽鎮に其沃饒なる原野に一驚し磨盤山、烟筒山等の新移民地を見吉林に到りて其繁盛なるに驚き長春、懷徳、奉化、八面城、金家屯、通江子一帶沃野の廣漠なるを見遼河を下り鐵嶺奉天を経て營口に歸來し又海に航して山東に歸り再び孤舟に掉し燕京に在ると一年思へらく未だ充分其邊疆を窺めず且つ露國が滿洲に於ける經營は僅々一年間に非常の進歩變化をなしたるを思ひ遺般の實況を視察せんが爲滿洲遊歴の途に上れり其北京を發せしは四月三日神武天皇祭の佳節にして直隸海邊を汽車便によりて通過し山海關外中後所より全く徒步して錦州、新民廳を見一たび遼河を西より東に渡りて奉天に出で更に鐵嶺、開源、

伊通州を経て吉林に達し一たび松花江を西より東に渡り鄂摩和索羅(土人は鄂摩和索羅云ふ)を經過して五月十日を以て清韓露三國の境なる琿春に出でたり北京を發して此處に至る三十八日を費せり

琿春に達せる後數日の間足を朝鮮の境に容れて北韓の狀況を察し更に方向を正北に轉じて甯古塔に至り多くは瑚爾哈(土人は敦丹江云ふ)の右岸に沿ひて三姓に達し二たび松花江を南より北に渡り白楊木に至りて三たび北より南に松花江を越え賓州、阿勒楚哈(土人は阿什河云ふ)を過きて哈拉賓に出でたり哈拉賓は露國が東清鐵道の中央停車場として露國的大都會の創建を經營しつゝある所にして此の地方の選定は隨つて其鐵道の線路に變更を來たせり故に余は其變更したる新線路の如何をも視察せんとし直ちに又哈拉賓を發して四たび松花江を南より北に渡りて呼蘭城に至り遂に進んで黒龍江の省城たる齊々哈爾に達せり實に六月十八日にして琿春より此處に至る迄大凡を三十八日を費せり

齊々哈爾は余が今回旅行の最北端にして此處よりは歸路に屬し小舟に駕して嫩江を下

り更に松花江を溯り伯都訥に至りて又陸路を取り本街道を避けて蒙古部に入り農安、
 長春(土人は寛城 子云ふ)を通過し伊通門を出入し朝陽堡を経て奉化(土人は賈賈 街云ふ)昌圖(土人は榆城 子云ふ)
 金家屯を通過し二たび遼河を北より南に渡りて法庫門に入り再び新民廳を過ぎて三た
 び遼河を西より東に渡り海城、遼陽を経て七月二十二日を以て營口に出でたり其日を
 費す一百二十一日水陸行程八千二百清里(日本里に換算して 大凡一千百餘里)其旅程の六七分は滿洲鐵道經
 過の地にして北齊々哈爾より東琿春に至り南營口に至る滿洲の狀況及び露人の經營と
 は少く觀察し得たるものなきに非らず今先づ露人の滿洲經營の方面よりして徐に之を
 略記すべし其調査の淺薄にして觀察の深からず文章の蕪陋にして言はんと欲する所を
 盡さざるは深く讀者の諒察を冀ふ所なり

東清鐵道の確定線路

滿洲三省を旅行して何物か最も滿洲に於ける最大の動機たり最大の顯象たるかを思考
 するに滿洲鐵道の敷設に過ぐる者あらじ滿洲鐵道の敷設は滿洲旅行者の目に映する最
 大の顯象にして此の最大顯象は現今に於ても各事物の動機となり將來に於て更に最も
 大なる動機たらんとす之を譬ふれば露國は滿洲なる一大貨車を自家の倉庫に運び去ら
 んが爲に目下敢々とし東清鐵道てふ一大機關車に點火しつゝあるものと云ふべし今先
 づ其線路經過の地より説き起さんに滿洲鐵道が西伯利亞鐵道後貝加爾線の中央即ち尼
 布楚市とチタ市との中間なるカイドロワ驛より折れ海拉爾を経て滿洲を横斷し三岔口
 より尼古里斯克市に出で烏拉西保斯德より起れる烏蘇里鐵道に接続するは我明治二十
 九年の初に確定して其後變更あることなしと雖も其の線路ハ滿洲の中央を通過する線
 路は幾たびか變更せられ昨年頃漸く確定せられたる者の如く世界は未だ眞に其線路の
 通過地を知らざるに似たり(現に去る六月出版せるペレンスフ、ド卿の支那分割論中に挿入せる地圖に
 は齊々哈爾より伯都訥を通過するが如く記しあり又我外交時報に掲げたる
 南洋交通論にも同様伯都訥を通過する様記せり蓋しタイムス通信員モリス
 ン氏の滿洲紀行を準據として其後線路の變更せるを知らざるもの、如し)蓋し露國が當初豫定したる
 線路は齊々哈爾より呼蘭を経て寧古塔、三分口に至る線路なりしが露國が可成丈け廣
 く滿洲を自家の繩張内に圍み込まんとする希望と滿洲の中心點として知られたる伯都
 訥に露國的大都會を創建せんとせる野心とは一旦同線路をして齊々哈爾より嫩江の右
 岸に沿ひて伯都訥に達し以て寧古塔を経て浦潮に向ふの線路を取らしめんとせるも實

測の結果は同線路を捨て、最初の豫定線に依らざるべからざるに至らしめたり即ち今日露國が確定線路として各處に起工しある線路は左の如し

西伯利亞鐵道カイドロフ驛より分岐して清露兩國境なる舊托羅海を経て呼倫貝爾(土名海羅兒)に至り海拉爾河水域を溯り興安嶺を越へ雅兒河水域を下り嫩江を齊々哈爾の南西六十清里なる胡拉爾溪に於て渡りて一直線に蒙古部を通過し呼蘭城の西六十清里の處に於て松花江を渡り以て同鐵道の中央停車場と豫定せられたる哈拉賓に達し此處にて二線に分岐し其幹線は阿勒楚喀(土名阿什河)に於て阿什河を渡り伊爾門(土名伊爾門)を経て寧古塔の東北六十清里の邊に於て瑚爾哈河(土名丹江)を渡りて掖河に達し三分出口より尼古里斯克驛に至り以て烏港に達するものとす(尙ほ其枝線は哈拉賓より奉天、營口、旅順口に達するものなるが此は別に詳説すべし)即ち西伯利亞イルクツクの方面より烏拉西保斯徳に達するの幹線は嫩江右岸の地域を通過する線路(假りに之を伯都訥線と云ふ)を廢して其左岸地域を通過する線路(假りに之を哈拉賓線と云ふ)を取るに至れるものにして隨つて其中央停車場と豫定せられたる伯都訥は殆んど無關係の外に置かれて哈拉賓之に代るに至れり蓋し此の如く線路を變更するに至りたる理由は種々ありて之を列擧すれば先づ左の如し

一 距離を短縮する事 伯都訥通過線によれば一千四百四十哩なるもの哈拉賓通過線によれば一千二百四五十哩にして凡そ二百哩許を短縮するなり

一 工事の容易なる事 伯都訥通過線は長官材嶺及び老爺嶺の險を越へ三たび松花江を渡過せざるべからざるも哈拉賓通過線は他の老爺嶺を越ゆるのみにて東北方に至るに従ひ小白山脈漸次底下し且つ二たび松花江を渡過すれば可なるものにして素人目にも工事は餘程容易なるべしと想像せらるゝ也

一 水害の虞少き事 伯都訥通過線にありては伯都訥より興安嶺に至るの間沮洳沼澤多く伯都訥より齊々哈爾に至るの道路は降雨期二箇月間は例年交通全く斷絶する程水害多きも哈拉賓通過線にありては呼蘭より齊々哈爾間は蒙古部の平原にして嫩江岸を距ること遠く呼蘭河あるも殆んど相關することなく且つ東方興安嶺の山脈に近く地勢隆起して沮洳の地少なきが故に黑人にあらざる吾人も斷じて其水害の少かるべきを信す

此の外中央停車場と西伯利亞黑龍江州とに於ける水運の連絡等も線路の變更を促したる重なる理由なりとす(尙ほ此事は中央停車場の事を叙する時詳記すべし)

滿洲鐵道の確定線路

又滿洲鐵道の南下線として大連、旅順に達するの線路は余が所謂滿洲鐵道の中央停車場たる哈拉賓より分岐し蒙古站の附近なる鎮山口邊に於て松花江を横斷して長春に走り開原の西北に於て一小山脈を越え鐵嶺、遼陽、海城、蓋平、復州、金州、大連を経て旅順に至り又海城、蓋平間の大石橋より一小枝線を出して以て營口に達するものにして此の線路は當初伯都納より分岐して長春に至るの豫定を變更して哈拉賓より分岐することになせし迄にて其他には格別變更を見ざるが如し以上の二線に就て其工事進捗の模様を目撃若くは聞知せる所によりて略記せん

旅順線(哈拉賓より旅順線に達する線)にありては路を便宜上旅順線と名づく

一營口より海城を経て鞍山堡に至る百六十清里間は鐵軌の敷設既に了りて機關車を運轉し材料を運搬し居たり

一鞍山堡より遼陽に至る六十清里間も土工略成り鐵軌の敷設も遠からざるべき模様なり

一大石橋より蓋平を経て復州に向ふの線路も工事餘程進歩し又大連灣の方より起工し非常に此の間の接續竣工を急げりとの事なりき但し此は同地を通過し來れるもの、説にして余の目撃せるものにはあらず

一長春方面に於ても既に起工して五六十清里の間既に工夫の土工に従事し居たるを目標せり

一營口より海城、遼陽、奉天、鐵嶺、開原、長春を経て哈拉賓に至る線路には既に電信線を架設し居れり

又浦鹽線(西伯利亞より滿洲橫斯浦鹽に達する線路を便宜上浦鹽線と名づく)にありては

一哈拉賓より阿勒楚喀を経て老爺嶺に至る二百餘清里の間は工事成りて列車を運轉し哈拉賓より老爺嶺に向ふ時は鐵軌を輸送し其歸りには石材、石灰、木材及び薪料を積載し來たるを例とせり此の薪は即ち汽關車に用ふるものにして其未だ石炭を用ひ

ざるは他の西伯利亞線と異なることなし

一老爺嶺より伊滿堡に至る三百清里許りは又既に工事に着手せりと云ひ工夫の其の地に向ひて赴くもの或は二百人或は三百人隊を成せりき此等の工夫は皆直隸及び山東にて招募せしものなりと云ふ

一寧古塔の北六十清里なる掖河は同方面に於ける測量隊の本部にして未だ工事には着手せざるも既に電信を三分口、寧古塔、伊滿堡の三方に向ひて架設し露西亞風の馬車三四臺を備へて交通に便せり

一尼古里斯克驛より三分口に至る工事は略竣工し目下は三分口より掖河に向ひて工事を進捗し居れりと聞けり

一哈拉賓より江を渡りて齊々哈爾方面に向ふの線路は百清里の間既に汽關車を運轉し更に二百清里許り工事に着手せり此處には既に汽關車二輛貨車十四五輛を備へあり又鐵軌の山の如く積みあるを見たりき蓋し黒龍江より松花江を溯り來る露國の川蒸汽船は日々此等の材料を輸送し來り而て此處より更に他の方便により各地へ分送する者なり

一齊々哈爾の南六十清里なる胡拉爾溪にては東方へ向へて一百清里許りを起工し又西方に向ひて約三百清里を起工せり胡拉爾溪には既に二棟の露西亞風の家屋建築せられ又一千五百人の支那工夫を入るべき家屋も建築せられ煉瓦の堆積上あるを見たるも既に嫩江舟上の人となり居る事情ありて上陸する能はさりければ只一瞥を與へしのみ

一三姓は線路通過の地に非ざるも松花江水運の仲繼所となり居れるを以て工事關係の露人も多く一萬有餘本の鐵軌の河岸に堆積しあるを見たりき

一枕木の缺乏は工事敷設に一大苦痛を與ふるもの、如し目下木材の吉林より筏となりて哈拉賓に下る者若干なるを知らず皆長白山より伐り出せるものにして割合に手敷と費用とを要するなるべし

余か踏査せる鐵道線路及び工事敷設の狀況は先づ右の如し露人が種々の困難に辟易せず銳意熱心以て急速に滿洲鐵道を落成竣功せんとするは感すべしと雖とも既に三年前

より幾百幾千の人を使役して従事せるの結果は未だ右の如きに過ぎるを見れば同鐵道の敷設も豫想外に困難の事あり露の當局者は吾人局外者の思ひ至らざる苦痛をなしつゝあるやも知るへからず然りと雖も露人豈に此の苦痛に辟易するものならんや嗚呼豈に之に辟易するものならんや吾人の畏るゝ所は正に茲にあり

露西亞人の新都會 (滿洲鐵道の中央停車場)

既に遼東を取り既に鐵路を築く露人が滿洲に對する雄略は天下萬衆業に既に之を洞見せり而も余は哈拉賓に赴きて親く露人が同地に在りて露西亞的大都會創建の計畫あるを見深く其の規模の大且偉なるに驚かざる能はざらん
露人が滿洲鐵道敷設の事を企つると同時に滿洲の中央に露西亞的大都會を創建し以て滿洲經營の根據地となさん事を規畫せるは既に何人も知る所なるべし(株實生曰く余が此明治三十年四月島港に滞在せし時にして此の事實は余の島港通信によりて朝日新聞に掲げられ始めて我邦に傳はりたりき信す)而して當初計畫の豫定地は伯都訥なりき伯都訥は實に滿洲の中心點にして鐵道の中央停車場たるに適し又松花江によりて西伯利亞水運の聯絡を取るにも便宜なりとせられたるものゝ如し然るに實測の結果

同地は卑濕の地にして水害多く鐵路を通するに便ならず又都會建設の地に適せず且つ松花江の水路も同地迄遶るには水淺くして大船を用ゆるに便ならざる等の理由あり遂に線路を變更すると共に都會の創建地も變更せられ哈拉賓は乃ち伯都訥に代るに至れり

●●●●● 哈拉賓は北緯四十五度五十八分東經百二十七度(參謀本部出版の地圖に依る) 松花江の南岸に位置し南阿勒楚喀を距ること七十清里北呼蘭を距ること六十清里東南賓州を距ること九十清里に在りて松花江南岸廿餘清里間を總稱するものなり此の地本と金人の崛起せる所にして古史に據るに阿勒楚喀の西方に金の古城跡ありと云ふ又た對岸の呼蘭城は宋の徽宗二帝の幽囚せられたる五國城口ならんと思はる其の地勢南の方小白山脈を雲烟縹渺の間に望み東西は茫々たる大平原にして地味肥沃五穀繁生し北は松花江を隔て、蒙古と相對す部の東は則ち黑龍江省中唯一の沃土たる呼蘭白彥蘇にして其西方一百五十清里を隔て、雙城廳あり伯都訥應に通じ南方一百六十清里を距て、拉林あり以て吉林に通ず蓋し吉林省中第一の平野沃土なり。英國の陸軍大佐ブローン氏の調査によるに吉林

省の北部に於ける大平原は其面積約一萬方哩ありと云ふ而して哈拉賓は此大平原の中心に當れるなり露人が此地に注目せる偶然にあらざるべし、此の地從來稱呼一ならず阿什河を距る七十清里江岸を距る二十清里の地は舊時新房燒鍋と稱せし地にして後稍東に轉じ今は轉地燒鍋と稱せり(補圖參看)是れ其の地は一大燒鍋ある故なり(滿洲の酒は燒る處酒屋を稱し)從來は其周邊に二百戸許の村落を成せしが露人は此の地をトして其大會創建の地域となし同村落を其東方に移轉せしめて自ら其地を占め燒鍋を以て大清東省鐵路公司總局、郵便局、電信局、露清銀行、鐵道保護兵司令部等の官衙に轉用し其西方に大市街地を區劃し官舎めきたる大家屋を建築せること五十餘棟、寺院、學校、病院、俱樂部の類皆此の中に設備せられ都市の大形既に成れり其の南方大街を隔て、公園の設あり其西方鐵道線に近き處兵營七棟あり建築宏大にして少くも三千の兵を入れ得べしと見えたり又未だ家屋の建築せられざる地も一々地區を劃して誰某々々の木標を立て既に所有者の定まれるを表せり其街市に區劃せる地域東西は我十町内外に過ぎざるも南北は一里半を越たり支那人は此地を稱して上房と云ふ哈拉賓の上遊にある房屋

の義なりと云ふ露人は其兵卒僕隸の如きものに至る迄皆此の地の將來一大都會となるべきを言はざるものなし蓋し鐵路愈々全通し旅順線、浦鹽線皆此の地に會して接續連絡するに至らば滿洲北部の中心市場滿洲鐵道の中央停車場として異常の發達を來たすべきは疑を容れざる所なり。

上記する如く上房なる露國の新建都は滿洲北部の中央市場として適當の位置を占たるも唯一の不便は其位置の江岸に濱せざるに在り蓋し此邊の地勢は江岸に近づくに隨ひて漸次低下するを以て江岸は都會創建の地に適せざりしに依るなり然れども水運利用の上よりして江岸には是非共一種の港埠を設けざるへからず故に又江岸の一小村落即ち土人か哈爾賓と稱する地に就て小市邑創建の經營をなせり

小市邑創建の地は松花江の右岸に臨み都會創建の地を距ること約二十清里の處に在り東西約我一里半南北約一里の地域を劃して街衢を造り六七棟の機械工場は余が遊歴の當時建築最中なしか其内の鋸工場は既に落成し盛に大木材を挽き居りたり官舎めきたる露國的家屋三十餘棟も建築既に落成し露人其内に居住し尙其東部にも各種の住宅

建築最中なりき茲に最も奇怪なるは支那人をして此區劃内に雜居せしめず別に一種の居留地を劃して其内に住居せしめし事にして約三百戸許の支那家屋は既に居留地内に建築せられ支那の小賣商人は露人を得意客として穀類布帛類陶磁器類及自餘の雜貨を賣買せり又其居留地の西北隅に接して市場より露西亞風に從ひ「バザル」と呼ひ此處に日用の諸品を販賣す野菜牛肉豚肉魚鳥の類皆店頭に列す又飲食店あり喫茶館あり雜貨舗あり講談師は此の處に聽者を求め理髮師も此處に客を待ち百般のこと概ね辨せざるなし又此の「バザル」の西に方りて土工夫のみを宿泊せしむる旅宿屋町あり此地にありて使役せらるゝ土工夫は皆此の一街内に居住す土工夫居留地とも稱すべきものなり此外支那人居留地の北に當て一街衢を開くの計畫あり當時區劃最中にして六七棟の家屋略落成し居たりき

此地鐵道は既に敷設せられ居り其線路は江岸より左右に走りて遠く此の新市街の地域を廻り以て上房即ち大都會創建地の方に走れり江岸には棧橋既に落成し貨物搭却の便も稍備り長白山より伐木し松花江を流下し來れる木材も西比利亞より汽船にて輸送し來れる鐵軌も皆此處にて陸揚す此地の經營割合に迅速なるは實に此水運の賜あるか爲なり

此地目下「コサック」兵其他の兵員五千餘駐在し此外土工夫及び商人勞役者を合して七八千もあるべく合計一萬二三千の人員は儘に此處に居住し皆滿洲鐵道なる大工事によりて衣食し居れり故に此地にありては貨幣も露貨を使用する者多く支那小賣商人も露語を習ふに急なり蓋し露人は固より此顯象を以て僅に其經營の第一歩を着たるに過ぎずと思意せんも局外より之を觀れば露國的大都會建設の基礎は業に已に確定せし者にして露人か此の地に在りて支那人に對する態度と其政令を實行する舉動とは之を其占領地たる旅順大連に比するも將た之を其本領たる浦蘆斯德に比するも格別の相違なきを見るなり一露人曰く我邦は此新建都を以て新哈美と命名すへし又一露人は曰く此地名は新哈美に非ずして新尼喀來斯克となすなるへしと余は其命名の如何に決すべきやを知すと雖とも兎に角滿洲の中央松花江の大平原に一個の聖彼得堡たり一個の莫斯科たる新都會の發生する一顯象は識者の宜く注目を怠るべからざる所なり

露人の滿洲經營と松花江の水運

二十

松花江が滿洲の發達に對して如何の關係を有するやは少しく滿洲の地理を研究したるもの、既に知悉する所なるべし又露人が從來如何に松花江の水運を利用して西伯利亞の開發に資するに熱心なるやは少しく西伯利亞の經營史を講究したる者の業に已に知悉する所なるべし故に余は古めかしく此等の事情を記述するを避け刻下松花江が滿洲鐵道の敷設に對して如何の關係を有するかを略叙すべし架橋工事は滿洲鐵道敷設工事中の大事なり架橋工事は如何に各處の線路は迅速に落成するとも直ちに之れを接續連絡せしむる能はざる也若し滿洲鐵道の敷設をして露人が聲言する如く千九百三年迄に竣工する能はざらしむるのありとせば架橋工事は儘に其の一なるべし而して松花江は此の困難なる架橋工事を要する河川中の最一なるものにして滿洲鐵道は松花江の不規則に滿洲を横流するが爲に其浦鹽線に於て二箇其旅順線に於て一箇凡て三箇の大架橋工事を要するなり若し假りに松花江なる大河及其支流を滿洲地圖より塗抹し見よ滿洲鐵道は胡拉爾溪に於ける大鐵橋を要せざる也哈拉賓に於ける大鐵橋を要せ

ざる也鎮山口に於ける大鐵橋を要せざる也即ち其工事の夫れ丈け容易なるも亦推知すべしなり

此の如く不利の點より觀察し來れば松花江は滿洲鐵道の敷設に多少の困難を與ふる點なきに非らずと雖ども然れども其利便は儘に其不利不便を償ふて餘りあり前回到叙述したる如く哈拉賓に於ける新建都、新開港の經營は昨年春初より着手し僅に一年有餘の歳月中に異常の進歩をなし世界の人が未だ其地名さへ知らざる間に嚴然たる一個の露西亞都會を滿洲の中央荒僻の地區に創建せしものは一に松花江の恩恵に依れるものと云はざるべからず如何に露人が哈拉賓の地勢を以て滿洲鐵道の中央停車場となさんと欲するも若し松花江の水運なく黒龍江の水運と接續して材料を輸送すること能はずんば恐らくは滿洲鐵道浦鹽線の落成して同地を通過するに至る迄は毫も着手すること能はざりしならん彼の露人が初め其建都の地を伯都訥と豫定せしも其松花江岸嫩江の會合點に位置し最も水運の便あることを豫期せんが爲にして而て之を哈拉賓に變せしも亦伯都訥迄松花江を溯るは寧ろ哈拉賓に於てするの便利(西伯利亞との連絡に於て)なるを實見

二十一

したるが爲なり(鐵路を變更せしは北大理由なりきは云へ)請ふ試に哈拉賓に於ける露人經營の跡を見よ新都會
 創建に就て第一に必要なるは家屋建築の事なり而して家屋の建築は一に木材の供給に
 由らざるべからず而して木材の供給は一に松花江の水運に由る余昨年奉天より興京を
 經過して吉林に至る道に朝陽鎮を經たり同鎮は海龍城、輝發城(普通の地圖には記載なきもの多し)の中間
 吉林、土們(河名)の北岸に位置し吉林を距ること三百餘清里此處より小舟を吉林に通ず余
 が通過の際は現に江岸に泊する小舟二十餘隻ありき露人は此江の上流即ち長白山脈の
 大森林に入りて木材を伐採し筏に組みて江を流下し吉林に至りて更に其數箇を組み合
 せて大筏となし哈拉賓に流下し以て家屋の建築用及び鐵道枕木用に充て居れり故に本
 年開河以來筏の江を下るもの實に夥多にして各要地々々に於ては必らず其大筏の集合
 し居るを見ざるはなし余は吉林に於て之を見伯都訥に於て之を見哈拉賓に於て之を見
 たり其大筏は縱六七十間横四五間許に組立たる者にして哈拉賓に於て鋸工場の第一に
 創設せられしものは即ち此材木を木挽して建築其他に使用すべき急需あるが爲なり
 故に若し此の大木材と松花江の水利とあらざりしならば哈拉賓及び上房に於ける新市

街に宏大なる官舎、民屋の建築彼れが如く迅速なるを得ざりしや必せり否此等の家屋
 は煉瓦にて建築するとするも枕木に至りては是非此の材木に由らざるを得ず即ち其
 使用せる枕木は多く唐松の類にして其質決して堅緻なりと云ふべからざるも此の枕木
 を得たるは全く松花江の水運に由るものにして若し其水運なからんか露人は何の處に
 枕木の供給を仰ぐを得べきか即ち遼東方面の鐵道の如く海運に由りて日本若くは米國
 の枕木を仰ぐは地勢上到底出來ることなれば結局黑龍江岸若くは烏蘇里江岸より木
 材を伐り出し之を汽船にて輸送し來るの方便に由るの外なかるべし其之を上流より伐
 り出し筏となして自由に江を流下し來るに比し其便不便如何ぞや更に之を約言すれば
 滿洲鐵道が其枕木を長白山脈の大森林に仰ぐは隨分手數と費用とを要すれども然れど
 も若し此の供給を得る能はずして更に他より供給を仰がざるを得ざりしならば其手數
 と費用とは前者に比して五倍十倍せしならん則ち知る松花江が木材を供給する一利便
 は露人が滿洲經營に資する異常の恩惠なることを然かれども此の恩惠や言ふに足ら
 るなり露人は松花江によりて此等の恩惠よりも數倍せる恩惠を私しつゝあるなり

露人が滿洲經營の爲に松花江の下流に汽船を通じて西伯利亞黑龍江地方との聯絡を通ずるの利便は其上流より材木を伐り出すの利便に比して更に大なり數十年來松花江の水路が滿洲官吏の排露的感情によりて封鎖せられ露人が玻璃障子を隔て、美人と眠るの感をなし居たる苦悶の状態は三國干涉の一事よりして過去の夢と消ゆ去り我明治二十八年の夏期一商船を松花江に入らしめ遠く吉林附近に溯らしめしを嚆矢とし翌二十九年も又數隻の商船を同江に溯らしめ三十年に至りては公然東省鐵路公司の名を藉りて官用船を溯らしめ以て滿洲鐵道の測量隊及び其材料を輸送するに至れり即ち露人が滿洲鐵道烏拉斯保斯德線の東西兩端より起工するの外其中央より起工するを得たるものは實に此の水路の便に頼れるものにして此水路の便あるが故に哈拉賓に於ける新建都も左迄の困難なくして經營するを得たりと云ふべし

目下露人が松花江の水路を利用するの状況を見るに露人は亞米利加に注文せる機關車鐵軌、橋梁其他の材料をば烏拉斯保斯德に輸送し同港より烏蘇里鐵道によりて哈巴羅布喀府に輸送し同府より荷船に積み代へ汽船にて之を曳きて黑龍江を遡り松花江に入りて三姓に達せしめ更に同所にて少しく小なる荷船に積み代へ小汽船にて之を曳き以て哈拉賓に達するなり故に三姓は松花江水運の仲繼所にして江の北岸數百間の地は貨物の搭卸所に使用し又其旁に東省鐵路公司總局を置き住宅倉庫等を建築し別に火藥庫一棟あり又麵包燒場を設く一日六七百人の食用を供給し得るが如く其材料は多く滿洲に産せる麥粉を用ひ居れり此地と哈巴羅布喀府間を往復し居る汽船は八隻許ありて船體も亦稍や大にして一船去れば一船來るの有様にして汽船の發着幾多虚日なし三姓より哈拉賓に溯る小汽船は四十噸以上百噸以下吃水四尺以下のもの約十餘隻、又之に副へる荷船は幅四間、長十七八間、底扁平なるものにして(吃水は此船と積量約百噸内外同じく四尺許なりと推定せり)約二十隻あり以て日に江上を往復せり即ち此の一大水路によりて滿洲鐵道に要する技師も兵士も工夫も材料も日用雜貨も滿洲の中央大平原の地方に輸入せらるゝ也左れば哈拉賓が鐵道及び水運の聯哈によりて偉大なる未來を有するは勿論現今にても吉林邊の商人は露西亞貨物を買入るゝが爲に哈拉賓に買出しに赴く状況と云ひ吉林附近に駐在する露兵等が多くは營口太連灣の方面より來れるものにあらずして松花江の水路によりて來れるものなりと云へるを見ても如何に同

水路が露人の滿洲經營に深く關係を有するやを見るべし

又哈拉賓より松花江を溯りて嫩江に入り以て齊々哈爾に達するの水路は同地一の工事未だ進行せざると水量少くして嫩江の不便なるが爲めか未だ鐵道材料を輸送する露國汽船を見ざりき尤も同航路とて必らずしも水運を通じ得べからざるにわらず現に余が嫩江を下るの際一小汽船は一隻の支那船を曳き二十人許の工事關係者を載せ行くを見たりき即ち今後齊々哈爾附近の工事愈進捗して材料を要すること急なるときは或は多少同航路に露國汽船を見るに至らんも知るべからず然りと雖も將來鐵道落成の後も利用せらるべき水路は先づ哈拉賓迄にして同水路は鐵路と相待つて西伯利亞及び滿洲の經營に偉大の功勳を奏すべく而して之を利用するは一に露人にして露國の外は何國の何人も同水路に手を打掛くる能はざる也露人の松花江の恩恵に浴する亦大ならずや

鐵道通過地と都邑の消長變遷

滿洲鐵道の敷設が將來の滿洲に如何なる變動影響を與ふべきかは其問題餘りに重大にして容易に斷言を下し難し只余は茲に滿洲鐵道が如何に現在の都會市邑を盛衰消長せ

しむべきかの問題に對し少しく之を記述せんと欲す

試に余が前回に於て記述したる滿洲鐵道の確定線路をば滿洲地圖に就て看一看せよ其烏港線にありては齊々哈爾城南六十清里の胡拉爾溪を通過するも齊々哈爾城を通過せざる也呼蘭城南六十清里なる哈拉賓を通過するも呼蘭城を通過せざる也寧古塔城北六十清里なる掖河を通過するも寧古塔城を通過せざる也又其旅順線にありては長春を通過するも吉林を通過せず奉天遼陽は共に其附近を通過するも遼東方面の大停車場は却て之を兩市の中間烟臺に設置せんとす蓋し露人が滿洲鐵道の線路を選択するに方りて一に其地勢の便否を標準とし毫も從來の都邑なるものを眼中に置かず即ち成べき丈け舊來の都邑と都邑との間を聯絡接合し以て貨物旅客の拾收に便する考慮少なかりしは論を待たざる所なるが此標準以外彼等は更に一個の標準を有して其線路を決定せるものゝ如し即ち鐵道の便によりて舊來の支那都邑を賑はさんより寧る鐵道の勢力利便を利用して新奇の露西亞都邑を開基すること是れなり。何となれば舊來の支那都邑に於て其土地を占有し其商權を掌握せんことは露人にありても困難の事にして寧る無主人

同様な曠野を占領し此處に街衢を作り此處に露商を招き地方の旅客を此地に聚集し地方の貨物を此地に集散せしむるの便且つ利なるに若かざればなり既に屢次記述せる哈拉賓の如きは即ち其著しき例證にして同地の附近には阿勒楚喀城あり舊來より副都統駐劄の地にして松花江右岸の平原中に位置し其地方の中心都市たるに適當なる地なり故に露人にして舊來の都邑に藉るを便とせば此地を擇ぶも不可なりしならん然るに露人は此等の都市を眼中に置かずして哈拉賓を擇べり既に哈拉賓を擇べり其發達隆盛と興に吉林三姓間通路の衝に當り同地方に於る政治上商業上の小中心都會たる阿勒楚喀は勢ひ其繁盛を奪はれ中心都市の位置を失はざるを得ず又黒龍江省城たる齊々哈爾の如きも現時にありては將軍の駐劄地たるが故に又隨つて其地方の中心市場となり今日の繁盛を保つと雖も若し鐵道一たび胡拉爾溪に通せば其影響を被ること少々にあらざるべし蓋し齊々哈爾は胡拉爾溪の上流六十清里にあり共に嫩江の水利に頼れるも兩地の水路中に一淺處あり胡拉爾溪に達する舟楫も齊々哈爾迄は達する能はざるものあり現在にても胡拉爾溪は僅に水運の便に於て齊々哈爾に優り居れるに將來又加ふる

に鐵路の便を以てす其兩地の位置變動せざらんとするも能はざるなり寧古塔城は其四邊人烟未だ稠密ならず而して今日の盛を有するは副都統の駐在地たるが爲め也而も鐵道は其北方掖河を通過し而して露人も亦掖河を以て同地方面の小中心市場たらしめん模様あり即ち同地の未來も亦推察し難きにあらざる也

鐵道のため最も利便も受け其發達を助長せらるゝ舊都市を擧げば長春に若くものながら長春は東遼河の大平原中に位置し伊通河の上流に濱し其四邊の原野開發するに隨つて自然に發達したる都會にして之を現在の儘に放棄し置くも自然に發達繁昌すべき未來を有せり加ふるに鐵道は其西邊を通過し露人も其地を以て同地方の中心停車場となすの意あり即ち同市が鐵道に頼りて受くる影響は齊々哈爾若くは寧古塔とは全く反對にして非常に幸福なる位地に立てりと云ふべし尤も長春現在の市街は伊通河邊の地勢低卑せる箇所にあるを以て露人は其地を避け長春の市街より凡そ十清里を西に距りたる十里舖に停車場を下し其附近の地所を買ひ取れり其目的は例によりて新市街を開くに外ならず故に長春は將來鐵道の利便を受くるは勿論なるも其市街の地位は稍西方

に移轉するに至らん尙は將來吉林へ枝線を敷設するに至らば其分岐點は即ち長春なるべく豫定せられあるを以て長春は鐵道に頼りて非常に要緊なる重地となれりと云ふべし

長春以南昌圖、開原、鐵嶺、奉天、遼陽、海城の都市は鐵道線路と相距る遠かず皆其便に藉ることを得然れども露人は此等舊來の都邑に對しては格段の經營をなすことなく却て奉天の南遼陽の北なる中間の地に烟臺と名づくる一小村落の地域をトして大停車場を建設せんとし既に廣濶なる土地を購ひ之に土塼を築き漸次經營の歩を進めり蓋し此地は南に太子河あり北に渾河あり以て遼河に通じ同地方の中心市場となすには適當の地なるを以て辭柄を鐵道の建設に藉りて以て新市街を創建せんとする者にあらざるか若し其經營果して成り一箇の新市邑屋氣樓の如く生出せば奉天遼陽の繁華は皆に其半を奪ひ去らるべし露人の滿洲經營何ぞ其れ遠謀深慮に富めるや
以上記する所によりて將來露人の經營と鐵道の利便とに依り露西亞的市邑として發達すべく思意せらるゝ地名を列擧すれば左の如し

- 齊々哈爾の附近に於て
- 胡拉爾溪
- 松花江の平原に於て
- 哈拉賓
- 寧古塔の附近に於て
- 掖河
- 東遼河の平原に於て
- 長春 (舊來の都邑)
- 奉天の南方に於て
- 烟臺

此外蓋平より旅順に至る線路中又或は新市街經營の地あるべし余は此旅行に於て同地を通過せざりしを以て能く之を記すに由なきのみ

露人と滿洲

吉林府一に船廠と稱す是れ清朝の世祖順治帝が順治十八年吉林烏拉をトして船廠を設け舟師を作りて露人の南下を制せんと欲せるに因る後康熙の朝に至り遂に大軍を黒龍江外に出し露人を尼布楚以西興安嶺以北に追へり爾來二百有餘年盛衰地を代へ船廠の名空しく存して康熙帝の遺謨又見るへからす哥薩克の鐵騎軍裝殿めしく滿洲の野を蹂躪す余歴史を讀みて露人南下の一日の故にあらざるを知れりと雖も其地を過ぎ其狀勢

を見て轉世變の大なるに感せずむばあらず。

旅順の海角より貔子窩以北に至る露人の占領地は論外として其以北に於ける滿洲三省の地域は未だ毫も露人に割與せしことあらざる也即ち割與せしことあらずと雖も殆んど割與せしと同じく露人は滿洲鐵道なる一題目の下に自由勝手の行動をなし而して滿洲の人民滿洲の官吏滿洲の兵隊皆其威壓に畏服し唯々諾々其命を奉せるもの、如し蓋し其多數の滿洲人中には往々氣概ありて露人の跋扈を憤るものもなきにあらずと雖も一步は一步より深く切り込み來る露人の勢威は江河の瀉ぎ來るが如く赤手を以て之を支ふる能はざるの情あり彼の盛京將軍として威望信用を雙肩に擔ひたる依克唐阿さへ憤死の外策なかりしと云ふを見ても其一斑を推知すべし試に露人が滿洲に於ける行動を見よ彼は滿洲鐵道をば清國の爲に清國に代りて敷設するものなることを揚言し滿洲官吏をして皆其揚言する所によりて人民を曉諭せしむ余漫遊の際到る處地方官吏が人民に曉諭する告示の瓦壁等に貼布しあるを見る其曉諭の主旨は大同小異にして要は露人は我に代りて鐵路を作るもの也故に我も亦之を厚遇優待せざるへからず即ち露人の

土地を要するは我邦の爲なれば之を賣るべし土工夫を招募するは我邦の爲なれば之に應ずべし露人が婦女を姦せりと云ふは虚説なり信する勿れ露人が良民を毆打せりと云ふは流言なり聽くこと勿れと云ふの筆法にて一に露人を辯護し人民を鎮撫して露人と葛藤を生せしめざらんとするものにあらざるはなし蓋し露人が滿洲に自由自在の行動をなさんとするに於て或は威を以て或は恩を以て滿洲官吏を我味方となすの手段を施せるは勿論なりと雖も多數の滿洲官吏必らずしも悉く露人の賄賂に眩するものにあらず而して其云ふ所始んど一様に出づるが如きは其配下の人民と露人と何等かの葛藤を生ずるときは地方官たるものは人民よりは露人に對して強硬の處分をなすべしと迫られ露人よりは人民に對して嚴重なる處刑をなすべしと脅かされ上官よりは何故に斯る葛藤を生せしむる如き不行届きなるやと詰られ内外上下板挟みの地位に陥りて遂に免職の責を免るゝ能はざればなり即ち地方官たるものは可成丈け其人民と露人との衝突なからんことを欲し而して其衝突なからしめんが爲に露人の横暴を禁止せんとするは到底行はれ難きを以て一意人民を鎮撫し人民をして露人の暴虐を忍ばしめ以て其無

事を保たんことを期せるが如し其意氣地なさは言を待たすと雖も積威の歴する所又之を奈何ともする能はず其衷情却て憐むべきものある也

露人は滿洲人民を威壓せんが爲に其弊勢を大にするを一種の手段となせる者、如し鐵道の敷設に對し各要地には何れも分局出張所を設けり然れども其名目は分局若くは出張所と云はずして「大清東省鐵路公司總局」と稱し同字を題したる旗章を其門頭に揚掲せり其旗は方形の布帛に黃龍(支那の旗章)を畫き又一角に白青赤の三色(露の旗章)を畫けり恰も老大帝國を北方滿洲の一角より蠶食すと云ふ寓意あるかの如く思はる又其門前にも「大清東省鐵路公司總局」と云ふ標札を掲げ支那の官衙に用ゆる極り文句の「鐵路重地」閑人免進「喧嘩禁止」「故犯懲治」てふ四箇の牌を掲げ尙は其下に二本の棍棒を備ふ是れ禁を犯する者は此棍棒にて懲治すとの義なり故に旅客一度滿洲に至れば到る處「滿洲鐵道總局」の在るあるを見て何地の總局が果て眞個の總局なるやを知るに苦しむべし。借て又所謂「東省鐵路公司總局」の所在地には軍隊並ね駐劄し保護よりも威壓の態度を示せり余が通過せる市驛にて「鐵路總局」を置き軍隊を駐在せしめ居れる所は左の如し

駐在兵概數		駐在兵概數	
營口	三〇〇	海城	二〇〇
遼陽	三〇〇	烟臺	五〇
長春	一〇〇	吉林	二〇〇
胡拉爾溪	五〇	呼蘭	二〇
哈拉爾賓	一三、〇〇〇	阿勒楚哈	一〇〇
伊滿堡	一〇〇	披河	五〇
寧古塔	二〇〇	三姓	一〇〇
合計	一四、三二〇		

即ち概數一萬四千餘人にして此の外往來の中にあるもの三四百人はあるべく尙ほ寧古塔と三分口間齊々哈爾と海拉爾間即ち余が經過せざりし場所にも相當の軍隊は配置せられ居るなるべく結局一萬六七千の軍隊は遼東の露西亞占領地域外なる滿洲三省の中に配置せられ居るものと推定するも大過なかるべし若し此兵數及び遼東の占領地内に

屯駐する兵數を見て更に支那の兵備如何を考一考すれば滿洲三省の地既に露人の掌握に歸せりと云ふも左まで大言にあらざるを信する也。

露人は既に此の如く兵力を擁し聲勢を大にし以て滿洲人民に臨めり而も其一たび人民と葛藤衝突の事起るや自ら手を下すことを爲さず先づ其官吏を威壓し官吏をして又人民を威壓せしむ而して彼等官吏の多數も到底露人に抗抵するの無益なるを知り唯々として露人に代りて人民を威壓するのみならず其だしきは露人の威力を藉りて自己の利を謀るものあり余が奉天滞在の際同宿せる一紳商は余に戯れて曰く滿洲の官吏は支那政府の祿を食みて支那人民を鎮壓する露國の雇人なりと、余答へて曰く然り然れども或は恐る支那政府其自身も又是れ露國の雇人あらざるなきかと、彼れ苦笑して又「然り」と答へたりき

官吏既に露人の雇人たる觀わり人民の暴虐に遭ひ不法を被り訴ふるに所なく抗するに力なく空く怨を呑み憤を含みて溝壑に轉すもの何ぞ限らん彼の一錢一文を得んが爲には如何なる辛苦をも厭はざる支那の勞働者が露人に苦役に堪へずとて土工場より逃れ去り其路費なきが爲に自己の携帶品を賣りて之を辨するの悲惨なる場合を屢次實見せる余は如何に露人の彼等を虐待酷遇せるを想像するを禁ずる能はざりき。目下工夫として露人の招募に應し來るものは直隸山東等遠隔の地方に於てせるものなり。滿洲内地にありては工夫を招募せんこと甚だ困難なり則ち滿洲内地到る處勞働者の宿泊せる客店には露人に使役せられ居る支那人來りて土工夫を招募勧誘すること屢次なりと雖も之に應するものは甚だ少く招募者の手を空うして出て去るや勞働者の一群は悪口罵詈雑言を與へざりしと云へば他は否余は食物さへ給せられずして酷使せられたりと云ひ可成丈相戒めて鐵道工事に關係せざらんとする狀あり故に鐵道敷設の初期には滿洲内の勞働者は夥多の賃錢を得るべく想像して工夫の招募に應じたるもの甚だ夥多なりしも後其苦役に堪へずして離散せるが爲め本年は直隸、山東地方にて招募せるもの、如く余は旅行中屢三百、五百と隊をなして工區に一團をなせる勞働者の群と出合せしが多くは山東及び直隸地方のものにして滿洲内地の勞働者が多數集團して工事に従

事するは殆んど之を見ることなかりき

又余は旅行中、到る處種々の苦情を聞けり曰く露人が鐵道用として買収する土地及び家屋の代價は殆んど命令的にして市價よりも放外に安價なり曰く露人は物品を買取りながら容易に代價を給せず曰く露人の支那人を見るや奴隸の如く侮蔑至らざるなし、曰く露人は往々婦女を辱かしむることありと蓋し斯る苦情は必しも露人のみ惡しきにあらず支那人が利を好み飽くことを知らざる特性あるが故に依れるが如しと雖も人民と露人との中間に立てる通辯等露人に使役せらるる支那人の不都合にも起因するが如し露人必ずしも惡鬼のみにあらず而して滿洲に於ける彼等の暴動の横暴にして住民を虐遇するの狀ある者は露人に使役せらるる通辯等が露人の威を假り以て土人に驕るの事實あるに原因すること少しとなさず蓋し支那人にして露語を解するものは必要上非常に露人に重寶視せられ多額の給金を與へて之を雇使するが爲に彼等は之を榮譽とし其衣服を美にし其飲食に驕り肩で風切る有様あり而して若し何等かの出來事ありて露人と土人との間に事端を生ずるときは露人の意なりと稱して種々苛虐の要求脅迫をなし

以て自ら私す故に露人の意は左迄苛酷の處置ををなす積りにあらざるも彼等通辯の中間にありて取次ぐが爲に非常に苛酷なる處置をなせるの結果となるなり即ち彼の土工夫を虐使して而も規定の賃金を給せざるが如きは是れ必らずしも鐵路公司總局の意にわらず鐵路公司總局は土工事の受負人に對して相當の工賃を下げ渡すも其受負人等が勝手氣儘の事をなして土工夫を虐待し賃金を給與せざる場合も多々あるべしと信す只露國の放漫なる大概の事は成行の儘に放任し其在留の露人は勿論其僱使する支那人等の取締行届かざる結果は外人をして異常の暴虐を土人に加へ居れるが如く感せしむるは如何にも露國の爲に惜むべき也

右の如く滿洲に於ける露人の言動は其本心に出ると否とに關せず兎に角横暴の處置多くして住民多數の恨を買ひ居れるは事實なるも一部の住民は又之を歓迎する者なきにあらず即ち露人の滿洲に來るが爲に利益する商人等にして彼等は露人の爲に食品其他諸般の材料供給者となり利を獲ること多きを以て遂に露人を以て福神の來降と視做し可成丈け多數の露人の入り込み來らんことを望めるが如し蓋し如何に露人が放任にし

て横暴なりとするも其鐵道工事の爲めに費消する金額は莫大にして滿洲の市場を潤はすこと大なるが故に左なきだに射利に巧なる支那人が蟻の甘きに就くが如く之を歓迎し依て以て大利を博せんとするは論を待たざる所にして此傾向は鐵道工事愈進み露人の來往愈多きに随つて増進すべし而して露人が滿洲を制御せんとするに於て此等の商人を利用せんことは又疑ふべからざる也

余は此項を終るに臨みて哈拉賓中俄交涉局の章程を容記すべし交涉局とは故吉林將軍廷茂が鐵道工事起り交渉の事件頻繁を加ふるより其管理の下に設けたる新局にして内閣候補中書致善等を聘用して其事務を處理せしめ同局の部下に屢する兵勇を置き重もなず露人旅行等には必らず此交涉局兵勇をして護衛せしむる事となせり後哈拉賓の僻地東清鐵道の中央停車場となり兵隊も此處に幅濶し工夫も此處に蝟集するに至りしより鐵路公司總局は將軍衙門と交渉の上更に同地に一箇の中俄交涉總局なるものを設けたるが其章程に依れば吉林省内に於て或は鐵路公司与關係し或は鐵路公司に雇役する工夫若くは材料を供給する商人等にして亂暴狼藉の事をなし又は竊盜姦惡の犯情あり

るものは中國官員中國の律例に照して查辨すべきも重大なる事件に關しては關係の官員一面交渉總局に報知し一面地方官に照會し哈拉賓交涉總局の評議に従ひて處辨すべき旨を定め又其交渉總局が之を評議するに就ては同局官吏鐵路公司總監督若くは其全權代理人と會同して之を審査すべく若し其意見合はざる時は將軍に具稟し其裁決を仰ぐの規程にして結局露人は鐵路關係の支那人に對しては既に裁判權の一部を得たるに均しく各居留地に於ける會審裁判的の裁判法支那國內の一部に施行せらるるものにして實に奇怪の至りなるが殊に同局の經費六萬金は鐵路公司總監督より支給して之を支辨し其家屋器具の如きも同様相當の金額を支給する筈なれば鐵路公司總監督は此が爲單に支那人裁判に會審の權を得たるに止まらず宛然是れ鐵路公司の官吏の下一箇の裁判所を設け支那の官員を雇ひ入れて其判事となし以て遠慮會釋なく支那人を裁判するものなりとす豈に又驚くべき事實に非らずや蓋し露人が滿洲に於て如何に其自由の行動をなしつゝあるか而して支那一部の官吏が如何に露人の威力と金力とに服従しつゝあるかば此交涉局の一事を以て之を證據立るとを得へさか吁々

三十四年の現狀

東清鐵道會社所有線

一 舊托羅海より三分山口まで(「ヌタロツルハイ」は黑龍江省と西比利亞の國境三分口は吉林省と烏蘇里の國境則ち「ホルタフカ」改名ゴルテコフ)

一四三四露里

是を小別すれば

一 舊托羅海より哈爾濱まで

九五四露里

此間に大興安嶺八千四百尺の隧道あり明治三十八年竣功の見込なり

一 哈爾濱より三分山口まで

四八〇露里

以上東清鐵道會社線

一 後貝爾州の「カイドロフ」より國境舊托羅海に至る(官設線路)

三八〇露里

一 國境三分山口より「ニコリスク」に至る(官線)

一〇六露里

一 「カイドロフ」より「ニコリスク」に至る(東清鐵道線路に以上の二を
加へたるもの則ち滿洲線)

一九二〇露里

一 「カイドロフ」より黑龍江を迂回し「ハッロフカ」を歴て「ニコリスク」に至る

二四三五露里

一 黑龍江迂回線と滿洲哈爾濱線との比較差

五一五露里

一 「ストレンチンスク」より「ハッロフカ」に至る未設線路

一六六七露里

一 「カイドロフ」より「ストレンチンスク」に至る

一五三露里

一 「ハッロフカ」「ニコリスク」間

六一五露里

一 「ニコリスク」烏港間

一〇二露里

旅順線

一 旅順より奉天に至る

八五〇清里

一 奉天より長春に至る

五八〇清里

一 長春より哈爾濱に至る

五五〇清里

大約我二百八十三里に當る

哈爾濱線の現況及東清鐵道會社

後貝爾州の「カイドロフ」より「ニコリスク」に至る線路中滿洲の内地にかゝる部分

を東清鐵道會社の所有線となす是實に露國か巧妙なる政略のある處にして萬國公法は或る一國と一國と如何なる關係を生ずるに關せず個人若くは公共の所有權を侵害することを得ざるなり東清鐵道會社なる者は其内容の如何其經營の如何に關せず一共立の會社なり

然も其内容の如何を世上に紹介するは無益の業に非ざるへし

一東清鐵道會社株主は露清兩國人に限ること

一東清鐵道會社役員は露人に限ること

一東清鐵道會社役員は露政府の官撰たるべき事

一東清鐵道會社の經濟は露清銀行之を管理する事

而て實際は清人をして東清鐵道會社の株主たらしめず而て各停車場長より局長に至るまで盡く軍人を以て之に充つ兵士は皆其勞役に服せり會社なる者は固是れ營利を目的とせる者彼會社は斯の如く多數の軍人兵士を使役し如何にして其得を以て其失を償ふとを得るか世に營利を目的とせざる會社あらは東清鐵道會社は確に其第一位に居らん

滿洲鐵道線路工事中に於て世界をして一驚を喫せしめたる者は松花江上の氷上架橋是なり氷上架橋なる者は戰鬪地に非されは之を實行せすと聞く露人の大膽なる是を平時に實行す誰か一驚を喫せざらんや然も彼等は祖先彼得大帝の遺訓に由り平時も戰時に異ならざるなり

露人が滿洲鐵道の工事に於て尤も利便を得るも松花江なり又尤も苦痛を感ずるも松花江なり哈爾濱に於て鎮山口に於て胡拉爾溪に於て其工事の如何に進捗するに關せず架橋工事竣功せずんば彼我の線路を連絡する能ざるなり連絡ならずんば工事の進捗も望むべからざるなり是れ露人が其冒險をも願みず氷上架橋を實行する所以なり

滿洲鐵道中哈爾濱線に在りては一千九百二十露里間隧道は唯三處あるのみ其大平野なる知るへし坦々たる大平野中ニケ處の大架橋に遭遇す彼等の苦心も亦推すべきなり其旅順線に在りては一千百二十二露里中唯一の松花江の架橋あるのみ其他は一山あるなし一隧道あるを彼れ露人が如何に一架橋に苦心せるか知るべきなり宛も美人を對岸に見るの想あらん

- 一「ニコリスク」より「ゴルデコフ」に至る一日一回の定期汽車發着す
- 一三分口の十四停車場と十三停車場との間二個處の隧道未だ竣功せず
- 一十三停車場より十一の掖河停車場に至る機關車を運轉し材料輸送に従事せり
- 一十一の掖河より伊滿堡に至る道路略竣切せり
- 一伊滿堡より哈爾濱に至る一日一回の定期汽車あり
- 一哈爾濱より胡拉爾溪に至る機關車運轉材料の輸送に従事す
- 一興安嶺は東西より八千人の工夫を役使し工事に従事せり此嶺の大隧道は八千四百尺を有し滿洲鐵道中最困難の工事なり明治三十八年竣功の見込みなりと云ふ
- 一舊托羅海より「カイドロフ」に至るまで機關車を運轉し材料輸送に従事す

旅順線の現状

- 一旅順より營口に(牛家)に至る一日一回定期發車す
- 一營口より烟臺に至る一日一回定期發車す
- 一烟臺より鐵嶺に至る一日一回定期發車す

一鐵嶺以東の道路も略竣工せり

一哈爾濱より松花江岸の鎮山口に至る機關車運轉材料を輸送す

更に我邦人をして氣死せしむべき一大顯象は大連灣の大都會創建則ち是れなり哈爾濱の中央大都會や胡拉爾溪、掖河、長春、烟臺の都會や未だ以て世人の注目を引くに足らず大連灣に至りては皆な世人の腦裏に印する者今則ち百方露里(我方里に換算すれば六方里四分の一餘)の大都會人口一百有餘萬を容るゝ東京に比するも更に遜色なき露西亞風の大都會眼前に顯出するに至りては誰か又氣死せざる者ぞ嗚呼我が眼前に「フデッサ」は顯出せり否なり「フデッサ」に非ず「莫斯科」なり否な莫斯科の舊都に非ずして聖彼得堡の大新都會なり嗚呼我隣邦スラヴヲニツク人種は何ぞ夫れ規模の偉大なる我之に對して惟惘たらざるを得ざるなり吁

露人と滿洲以上の各項は明治三十二年及三十二年實見及調査せる者現今工事の進捗に伴ひ多少の相違あり茲に之を補遺す

滿洲の平原

滿洲に於ける露人の經營は前數節に於て叙述したる所の如し而して露人が此の如く經營する滿洲の現狀は如何將た將來の發達は如何、余は以下數節に於て此の問題を解釋すべし。

滿洲の地理誌を讀める者の既に知悉せる如く滿洲は長白山脈によりて其東南を限られ外興安嶺によりて其西北を限られ西方開けて東蒙古の大平原に接し而して此二大山脈の支派其中央に蜿蜒起伏せる高原地なり其面積は三十六萬二千三百十平方哩にして我邦の面積(十四萬七千六百五十五哩)に比して二倍半弱に當る程の廣濶なる地域なるを以て(地理學上より大平原を有せずと雖も)諸山脈の中間に位置し諸山脈の溪水によりて灌溉せらるる地域は皆優に一箇の平原をなし沃野茫茫として天に連り吾人島國人をして廣濶なる哉此平原と叫ばしむる箇所多し即ち滿洲の地勢を概論すれば廣濶なる面積を畫するに高大なる山岳を以てし而して其區畫せられたる各部又皆比較的に廣濶なる平野を爲せるものと云ふべく。之を譬ふれば滿洲の山脈は滿洲なる身體を組立つる骨にして平野は即ち其肉たり河川は其血管たるが如し而して今日滿洲中にありて最も能く發達したる部分

は即ち其肉たる平野にして血管たる河川も最も發達せる平野の部分に於て最も能く其血液を循環せしむるを見るなり

滿洲に在て土地肥沃開墾最も行届き而して其面積も亦廣大なるを假に名づけて東遼河の平野とす(北緯四十二度四十一分の通江子より四十四度四十五分の哈哩濱城に至り東經百二十三度四十分の通江子より百二十六度三十分の松花江の西岸に至る但し長春農安懷德は伊通河の灌溉を受け松花江の水域に屬するも便宜上東遼河と名く)即ち遼河の上流たる東遼河の灌溉する所にして吉林省の西部に方り蒙古の平原に連る一帯の平野なり此の平野は所謂柳城邊牆に畫せられ其地域は全く蒙古部に屬し地圖上にありては恰も茫茫たる塞外の荒地に屬するが如しと雖も實際は全く之に反し其地方の饒肥なる招かずして移民來り勤めずして原野拓け幾多の中心都市は其間に發生し以て優に滿洲中の富饒地となれり即ち同平野に在て都市を爲せる者を擧ぐれば長春を第一とし昌圖を第二とし奉化、農安、懷德、康平又之に次ぎ金家屯、八面城、慈鸞樹、又皆一箇の都市と稱するを得又此の平野の南口とも云ふべき通江子は遼河水路の最北端に位せる新開の埠頭に於て此の平野より輸出する穀類と此の地方に輸入する布帛雜貨の類は皆遼河の水路に藉り若くは藉らんが爲通江子に幅濶し從來

遼河貿易の吞吐口として知られたる鐵嶺を凌駕せん狀況あり殊に此の平野の首都とすべし長春は自然的に發達したる新開の都會を以て吉林全省の首府たる吉林と其繁盛を競ひ尙は駭々發達の望あり而して東清鐵道旅順線は實に此の平原を通過するを以て其發達の望更に大なりとす此の地の産物は大小豆を大宗とし粟、高粱、蜀黍、藍、阿片麻、青麻、(此麻は葉梧桐に似て線維強からずと云ふ)大小麥、蕎麥、煙草、豆、菜蘇、葱類、瓜類等なり是れ西人が東三省の寶庫と稱する所以にして西方通江子より東長春に到る殆んど一の丘陵を見ず所々に僅に波狀を爲せる所あるのみにして其南方五六十清里の間往々千山山脈を望むも甚だ低し故に此平野に在りて不便を感ずるものは薪炭を第一とす住民の皆高粱稗を以て薪に代ふるを以て之を知るべし

東遼河平原に次ぐ者を假りに名づけて松花江平原となす。北緯四十四度五十分の五常廳より四十六度四十五分の北團林子に至り東經百廿五度十分の伯都訥より百廿七度四十八分賓州廳の東に至るの間に延廣する平原にして松花江を中間にして吉林、黒龍江の兩省に跨り地味豊沃にして大小麥を大宗とし阿片を以て其特有の産物とす奉天以南

山海關附近にて支那人の需要する阿片は一半此の地方の産出に係り年々同地方へ向け輸送する者甚だ多しと云ふ此の外米を除くの外穀菜の類概ね産せざるものなく薪炭も小白山に近きの故を以て稍乏しからざるが如く江岸の地柳の能く繁茂せるも土人薪料の一たるべし此の平原に在りて繁盛の市場を阿勒楚喀とて呼蘭、伯都訥、賓州廳之に次ぎ察巴爾、小廟子も亦一小都市を爲せり余は拉林、雙城廳、五常廳、白彥蘇疏、北團林子、山河屯等の市邑は通路の都合にて通過するを得ざりしを以て之を實見せざりしも聞知する所によれば亦皆繁盛の市邑なりと云ふ蓋し此の平原や其位置の東遼河平原よりも北部にありて其水運の利も南方吉林、奉天兩府の方面に對して充分ならざるを以て其住民の割合も東遼河平原に及ばずと雖も哈拉賓既に露國の新都會となり鐵道東西南の三方に開通する曉に至らば其生産上の發達は殆んど今より豫測すべからざるものあるべし、露人曰く松花江の水域は滿洲の穀倉なりと蓋し空言にあらざる也

第三は遼河水域に屬し鐵嶺開原方面より牛莊、新民廳の方面に廣延する平原にして余は假りに之を名づけて遼河平原と云ふ此の平原は松花江平原の廣闊なるに及ばずと雖

其滿洲の南部に位し古代より王化に潤ひし丈け一般に發達し滿洲中最も住民多く農業盛なる地方にして其産物は高粱を大宗とし之に次ぐは大小豆、大小麥、粟、玉蜀黍、麻、青麻、煙草、棉花及び菜蔬の類なり阿片は一も之を見ず奉天は滿洲政治上の中心點たる位地と與に此の地方に於ける商業上の中心點を爲し遼河及び其支流は此地方の水路として營口に運輸の便を與へ其開發の度は之を支那本部の北部諸省に比するも敢て遜色なかるべし此地方も又東清鐵道旅順線の貫通する所にして露國が遼陽、奉天の中間なる烟臺に新都會創建の地を爲せりと云ふもの又實に同地を以て此遼河平原の中心市場と爲さんと欲するが爲なり然れども此平野は拓殖の度既に十分なりと云ふも差支へなければ其鐵道によりて影響を受けること松花江平原等の從來特に不便偏僻なりし地方の如くならざるべし、唯牛莊鐵道の終點として知られ居る新民廳は遼河平原中の西邊に於ける中心市場たるの觀ありて直隸省の北部に接する地方の開くるに隨つて其繁盛を加へ來れる有様なれば將來は東清、牛莊兩鐵道の刺戟を受けて倍有望の地たらんこと疑を容れざる也

吉林省の南邊、長白山脈の蜿蜒する中央、朝陽鎮を中心として一箇の小平原あり鷄林土門の水域に屬するを以て余は假りに之を鷄林平原と呼ぶ又是れ肥沃の土地にして稍拓殖の緒に就けり此の鷄林土門の上流柳河鎮の附近一帶に石油鑛あり將來或は偉大の富源たるべし

吉林省の東部牡丹江(一名胡爾哈河)灌溉する平原は鄂摩和索羅以東茫々として際涯を見ず而も人口稀薄、未墾の地多きに居る此の河の上流に瀕せる寧古塔一帶の平野も亦然り、三姓より松花江岸を溯り白楊木に至るの間は青草繁茂溪流甚だ清く到る處の平野實に牧畜の好適地なるが如し

黒龍江省に在りては小笠子より西北齋々哈爾に至るの五百餘清里の間は所謂「千里不止楊柳影、日出荒草沒荒草」てふ朔漠の廣原にして到る處青草靡々盡く大牧馬場にあらざるはなし唯水の少き或は缺點たらんか、此の廣原の一半は蒙古部にして余が通過せし道路は黒龍江省と蒙古部とを分つの界線に當れり、齋々哈爾以北も亦太平洋あり而も人民倍稀少に土地も亦膏腴ならずと云ふ、

之を要するに滿洲の平原は盛京省に於て盡く開拓せられ吉林省に在ては松花江平原稍開拓の緒に就きたりと云ふべし、吉林府より老爺嶺、長官材嶺の二嶺を越ゆれば鄂摩和索羅等なきにあらざるも先づ無人荒蕪の地と云ふべし琿春附近は朝鮮人によりて能く開墾せらるゝも北方一百清里を距る凉水泉子以北は又殆んど無人の境なり舊古塔城附近の原野は稍開拓せられたるも同城を距る南四五十清里に至れば又茫茫たる荒蕪の野に化し牡丹江の兩岸肥沃の土は今尙は虎狼罷熊の巢窟に委せり三姓附近の如きも松花江岸を離るゝ一步にして盡く荒蕪の地たらざるなし是れ三姓が松花江と牡丹江との會合點に位置しながら未だ繁盛なるを得ざる所以にして其れより以北吉林の邊疆が今尙荒蕪無人の原野たるは想像するに難からざる也、若し夫れ黑龍江省に至りては呼蘭の一區を除くの外人烟寥々見に足るものなし、英國陸軍大佐ブラオン氏は滿洲中既墾地の面積を調査して一萬六千零五十方哩にして凡そ全面積二十四分の二に過ぎずと云へり、其内譯左の如し

遼河及び其支川の水域

三五〇〇方哩

吉林北部の大平野

一〇〇〇〇

鷄林土門の水域

七五〇

嫩江の水域

二〇〇

マソフ河の水域(此河名不詳)

五〇

牡丹江の水域

二五〇

琿春の附近

一〇〇

鴨綠江の水域及び遼東半島

一、二〇〇

合計

一六、〇五〇

此の表は余の平原區分と相符せざるも今之を變更せず又調査者は鴨綠江の水域及び遼東半島の分は調査精確ならず爲に可成少く之を見積りたりと云へり、想ふに滿洲の地たる其墾して以て美田と爲すべき平野の面積幾何方哩なるや未だ能く之を調査する能はずと雖、其既墾地の面積は僅に全面積の二十四分の二に過ぎずとせば將來之を開墾し之を拓殖し以て宏大なる農産地となすの餘地は洵に意料の外にある

を見るべし而して東清鐵道の敷設は實に此拓殖に向つて新局面を開くもの也、吁、

滿洲の水運

滿洲の肉たる平原の情形は既に之を説けり請ふ其血管たる河川の狀勢如何を説かん。滿洲の血管と稱すべき河川は松花江及び遼河の二川となす即ち松花江は滿洲中部以北の溪水を集めて北流以て黒龍江に注ぐものにして滿洲よりして西伯利亞に通ずるの血管たり遼河は滿洲中部以南の溪水を集めて遼東灣に注ぐものにして營口の門戸に達する血管たり松花江は遼河に比すれば其水路も長く且其灌溉する所も廣しと雖而かも其水域は未墾の土地多く且直接に海口を有せざるを以て其利用未だ充分ならず從來は僅に其水域に生産する大小麥及び毛皮を積載して露國ハバロフ府に輸送する支那船の時に上下するものあるの外は内地間に多少の貨物を運輸する小舟あるのみ余が旅行の季節は同江の水運最も繁盛を呈すべき時なりしにも拘らず河舟の航行衰きこと豫想外にして吉林に在りて僅に五十隻許を見伯都訥に於て百隻齊々哈爾に於て三十隻、三艇に於て四十隻、哈拉賓に於て二十隻、呼蘭に於て五六隻許を見しのみ其他河中を航行せる

を見たるも其數算ふるに足らず唯東清鐵道敷設の工事興りて以來早くも露人の利用する所となり漸く血管たる効用を全ふるに至らんとす之に反し遼河は松花江の大且つ長なるに及ばすと雖其水域は滿洲中最も開發進歩せる地方たり且自己自ら自己の海口を有し遼河の河口は世界何國の船舶をも浮ぶるに足るを以て水運の効用も最も多く夏時舟楫の河中を上下する者數千を以て算ふ遼河は東西の二源あり西源は內蒙古多倫諾爾の東北に發し東流して法庫門の東北に於て東遼河に會す東遼河一名を赫爾蘇河と云ふ赫爾蘇站の南に發し北流して赫爾蘇門を出て懷德縣の西に於て折れて西南流し奉化八面城等を経て西遼河に合す然れども此邊未だ舟楫を通せず此より下流通江子に於て始めて舟楫を見る下流營口に注ぐ迄延長八百清里の間舳舻相接し帆影全く河上を覆ふの觀あり一昨年英國のペレンスフォード卿が營口に漫遊せし時同地にありし支那ジャンクを算へて其の數二千を得たりと云ふ八百清里間に來往礙繫するジャンクの數夥多なること推知すべし此の遼河に會合する渾河(一名小遼河)太子河も遼河と均しく舟楫の利あり渾河は奉天府に至る迄太子河は遼陽州に至る迄小舟の上下するあり其遼河に會合する

河口最も帆檣の林立を見る聞く往時は遼河の水運も今日の如く盛大ならざりしも營口の開放以來年一年其繁盛を増し尙ほ倍進歩の状ありと蓋し營口の貿易は全く遼河貿易なれば營口の貿易發達する丈け遼河の舟楫増加するは論を待たざる所なり
現時遼河に於て使用するジャンクに大小二種あり大なる者は縦七間横二間許小なるは縦五間横一間半許りにして舳艫も腹部と大差なく底扁平なり大舟は其上を覆ふに板を以てし小舟は覆ふに蓬を以てし大舟は積載量十噸小舟は之に半し舟子は大舟には五人を要し小舟は三人にて足る上下共に風あるときは其順風たると逆風たるとに關せず巧に帆を張りて之を利用す是れ航路の屈曲多くして順風も忽ち逆風となり逆風も忽ち順風となるが故巧に布帆を使用するにあらざれば到底充分風力を利用する能はざるによりて自ら巧妙なる使用法を發明するに至りし者ならん其風なきか或は風あるも之を利用する能はざるときは則ち已むを得ずして櫂及び楫を用ゆれども其進行の遅緩なる半歩の如し唯滿洲に於ては無風の日稀少なるが故に櫂楫を用ゆるの場合鮮きは何よりの仕合なりと云へし

營口より通江子迄は陸路五百七十清里に過ぎざれども水路によれば八百清里あり是れ水路の屈曲甚たしければ也之を溯るに順風なれば七八日を要し逆風の時半月猶且達する能はず河流の鐵嶺の北に於て小山嶺を横断せるのみ他は悉く平原の間を貫流し土地傾斜の度も鮮きを以て其流甚だ緩なり聞く往時は鐵嶺を以て遼河水路の北端とし貨物は皆鐵嶺にて積み込み積み卸したりしが近時に至りて通江子迄の水路開け鐵嶺の舊埠頭は通江子の新埠頭に遼河貿易の關鍵を奪はるゝに至れりと
滿洲の血管たる河川の利用は先づ上陳の如し知らず鐵道開通の後其狀勢如何に變動すべき是れ又一箇の重要問題たる也

滿洲の陸運

既に滿洲の水運を叙せり請ふ進んで陸運の狀況如何を述べん
滿洲にありては冬期中は河水皆氷結して水運の便を得ざるも此の間は又野となく沼となく盡く凍合し道路一の障礙なく且降雨皆無なるを以て最も陸運の便あり而して春陽四月東風凍を解き道路漸く泥濘に炎陽七月梅雨瀧の如く道路水に塞がるの候は即ち又

河水注々として最も水運に便なるの時なり即ち滿洲の運輸は夏季は水運により冬期は陸運により以て其血の循環を滑にせるものなりと云ふを得べし

陸運の繁昌なるは實に冬季十一月より翌三月に至る迄にして夏季は皆無と云ふにあらざるも非常に僅少にして馬車宿の如きも十中の八九は閉店し居る有様なり陸運に使用する車輛は其製堅牢にして大軸は輪と共に廻轉せり之を牽かしむるに騾又は馬を以てし少きも七頭多きは十二頭に至る故に其道路も亦隨て大ならざるを得ずして狭きも六七間を下らず廣きは十五六間なる者三四十間なる者五六十間なる者あり沿道の馬車宿規模亦大にして小なるものも方四五十間大なるは方百餘間の邸地を有し宏大なる家屋を設けて馬車挽の合宿所に充て廣大なる中庭に牛馬騾驢を排列し車輛を置かしむ馬車宿の最も大なる者あるは通江子より長春に至るの間にして此の間は東遼河平原にして産物多きが上に遼河の水運に接続するを以て最も馬車の通行多きが故ならん營口附近の貨物は冬季此の馬車便によりて直ちに營口に輸送せられ解氷を待ちて更に他に輸出する都合なれども長春及び伯都訥方面の貨物は冬季通江子若くは鐵嶺迄輸送し置き更に

に開河の口を待ちて水運によりて營口に輸送する也而して夏秋の間遼河の水運に依りて營口より通江子若くは鐵嶺に輸送せられ居る貨物は又此等北來の馬車の歸荷として北方に輸送せらる但し營口輸入は殆んど相平均せりと雖も輸出は大小豆の如き天産物にして輸入は綿絲の如き精製品多きを以て輸入貨物の重量は甚だ少く隨つて總ての馬車が充分に歸荷を得る能はず爲に其貨錢も歸りは甚だ廉なりと云ふ

右陸運の状況は山海關より錦州を経て奉天に到るの間新民廳より分岐し金家屯に到るの間營口より海城遼陽を経て奉天に到るの間奉天より鐵嶺開原伊通州を経て吉林に到るの間奉天より法庫門に到るの間通江子より金家屯、八面城、奉化を経て長春に到るの間吉林より伯都訥を経て齊々哈爾に到るの間吉林より拉林、阿勒楚喀、白楊木を経て三姓に到るの間呼蘭より蒙古平原を経て齊々哈爾に到るの間殆んど同一律にして唯吉林より寧古塔に到るの間寧古塔より琿春に到るの間は稍趣きを異にせり是れ其の通路は小白山脈を横斷し行路峻峻なるを以て車輛を用ふるに便ならざるが故なり即ち車輛の代りに駄馬を用ひ鞍を馬背に密着せしめ之れに貨物を縛して輸送の用を便せり尤

も此間とて二三の馬車を見ざるにあらざるも、丹は遠路を行くものにあらずして、近村より近村に達する小距離の間に使用せるが如し、是れ滿洲に於ける陸運の状況にして、某英人の調査によれば、營口の開港場より輸出せらるる豆、豆粕及び豆油の類は、其重量九百萬ヘンドレツド、ウエイトを越ゆべく之を馬車に荷積みすれば、廿二萬五千噸を要する。勘定なるを以て、假りに一季中一輛の馬車にて十回往復するものとせば、車二萬二千輛、馬若くは騾十五萬頭を用ふる勘定となる。然れども、實際一車輛にて一季中に往復するは二回若くは三回に過ぎざるを以て、其實際の車輛及び馬匹數は、此の勘定三倍若くは五倍なるべしと即ち此の莫大の車輛と馬匹は皆營口の貿易あるが故に使用せらるるものにして、營口の一貿易場の滿洲に與ふる所も亦大ならずや。

滿洲の道路

滿洲の一旅行者は、滿洲の道路の不良にして、修繕の行き届かざるを論じて曰く、地方官吏は道路の改築修繕等に對して、毫も官金を支出することなし、而して人民も亦毫も之を望まず、何となれば、彼等は生來夏季中の道路を以て不良なるものと信じ、唯冬季中凍結せる

道路のみを以て、其往來に堪ふべき道路なりと爲せばなりと。

實に此言の如く、滿洲の道路は従前は政府にて修築開墾し、以て交通に便したるもの少からざるも、近數十年に至りては、政府にて修築改良することは殆んど皆無なるが如く、破壊すれば破壊の儘に任せ在が如し、然ども滿洲の住民年々増加し、其交通往來も頗繁なるに至れるの結果は、従來道路なかりし箇處にも自ら道路を開き、旅客をして斯かる所に此の如き道路ありしかと言はしむる者なきに非らず、試に余が通過せる道路に就て之を言はん、に滿洲の道路中最も大道と稱すべきは、山海關より奉天に達する道路なり、言ふ迄もななく、此の道路は首府なる北京より陪京たる奉天を連絡する道路にして、政治上より言へば、恰も我西京と東京とを連結する東海道の如きものなるを以て、清朝の盛時にありては、莫大の工費を擲ちて之を改築修理せしものと見、其の規模の大なる實に人目を驚かすものあり、其の道路の最も廣き處は六十間を過ぎ、遼河以東にありても三十間あり、左右に溝渠を穿ち、其の外側に堤を築き、植うるに柳を以てせり、其規模の宏大なるは今尙は見るを得べしと、雖も今や或る部分は隣地の所有者より蠶食せられて、耕田と化し、或る部分は

崩壊して小石磊々たる河床と化し唯處々往時の面影を存する所却て行人をして追懐の涙を揮はしむるのみ蓋し道光以來國用缺乏官吏貪慾にして北京城内の道路さへ破壊に任せて顧みざる清朝が此關外の道路を修繕することを爲さず破壊の儘に放棄し置けるは敢て怪しむに足らずと雖も而も其の原因は滿洲と北海の往來が汽船便に藉ることを得九日の旅行は一日の船上によるの便なるに若かざるに依れり殊に營口の市場と奉天とは江河、遼河によりて商業上日に密接の關係を増すに反して奉天と新民廳、錦州とは遼河及び巨流河の沼澤とに隔てられて一年に商業上の關係を疎遠ならしむるもの、如く爲に旅客貨物の來往も舊時に比して減せることあるも増せることなく以て倍々同道路の修理を怠るに至りしが如し同大路の沿道に就て言へば山海關より錦州に到るの間は松嶺山脈の盡くる處にして丘陵起伏礪礪の地多く錦州に到れば稍や平原の狀をなすも廣寧城の附近又丘陵あり小黑山以東全く平原となる新民廳以東は遼河平原の一部にして丘陵なき代りに大沼澤あり商客の往來甚だ稀なり牛莊鐵道は實に此大道に沿ひ小黑山より分岐して一は營口に達し一は新民廳に達するものにして現時の狀況を以て言へば商業上果して有望なるや否やは疑ふべしと雖も同鐵道の開通せる爲に現時に於ける營口と奉天若くは通江子等との商業上の關係を一變し遼河平原、東遼河平原生産物を以て之を山海關邊の秦王島に出でしむるに至らば其利益ある固より論を待ざるなり尙ほ此事に就ては端を改めて之を論ずる所あるべし關外の大路が右の如く其名ありて其實なきに反し其名なくして其實甚だ大なるを通江子より長春に達する商路とす此の道路は前各節に於ても既に述べし如く毫も政治上の關係を有せず全く商業上の必要より發達したるものにして沿道の府縣たる農安、康平、奉化、懷德等皆東遼河平原の開發に隨つて漸次に發達したる新市驛なりとす此道路の延長五百清里にして其間一の丘陵なく遙に長白山の支脈戈爾敏朱敏嶺の北支脈を東南に望むのみ河は僅に朝陽堡の西、新河口に赫爾蘇河あるのみ其他は小溪流に過ぎず而して此道路の最も必要なる時期は冬季なるが故に河流は毫も其障礙をなすことなし東清鐵道は此地方を通過する部分に於て或は現時の陸運を奪ふて之を汽車運となし以て此道路の行客貨物に一大變動を與ふるならんと雖も而かも鐵道の爲に刺戟せられて發達する東遼河平原の

況を以て言へば商業上果して有望なるや否やは疑ふべしと雖も同鐵道の開通せる爲に現時に於ける營口と奉天若くは通江子等との商業上の關係を一變し遼河平原、東遼河平原生産物を以て之を山海關邊の秦王島に出でしむるに至らば其利益ある固より論を待ざるなり尙ほ此事に就ては端を改めて之を論ずる所あるべし關外の大路が右の如く其名ありて其實なきに反し其名なくして其實甚だ大なるを通江子より長春に達する商路とす此の道路は前各節に於ても既に述べし如く毫も政治上の關係を有せず全く商業上の必要より發達したるものにして沿道の府縣たる農安、康平、奉化、懷德等皆東遼河平原の開發に隨つて漸次に發達したる新市驛なりとす此道路の延長五百清里にして其間一の丘陵なく遙に長白山の支脈戈爾敏朱敏嶺の北支脈を東南に望むのみ河は僅に朝陽堡の西、新河口に赫爾蘇河あるのみ其他は小溪流に過ぎず而して此道路の最も必要なる時期は冬季なるが故に河流は毫も其障礙をなすことなし東清鐵道は此地方を通過する部分に於て或は現時の陸運を奪ふて之を汽車運となし以て此道路の行客貨物に一大變動を與ふるならんと雖も而かも鐵道の爲に刺戟せられて發達する東遼河平原の

前途を豫想すれば此道路が現時よりも荒廢することなきは疑を容れざる也
 倭又奉天より吉林に通ずるの通路は盛京、吉林兩省の首府を連結する官道にして大は
 則ち大なれども通江子長春間の商路に比すれば狭少にして沿道村落の状況も前者に比
 すれば甚だ寂寥を極め延長七百清里の間大市邑と稱すべきは鐵嶺、開原、伊通州外二
 三に過ぎず頭道嶺の外には山岳なしと雖も丘陵は所々に起伏し地味亦遼河平原に比し
 て肥沃ならざるが如し殊に開原より以北は路溪谷の間を過ぐるを以て冬期の陸運路と
 しては通江子より朝陽堡に至り伊通門を経て吉林に達するの道順にして官道を経るも
 のは唯官吏其他の旅行者のみなるが如し又吉林より進んで齊々哈爾に至るの道路は延
 長一千二百清里と稱し伯都訥其中央に當る吉林伯都訥間には小白山脈を横斷する個所
 あるも左迄困難なる險路にあらず唯伯都訥より齊々哈爾間は沮洳沼澤多く降雨の期に
 在ては道路水に没して全く不通なる個所あるが上六七十清里毎に旅客の宿泊に供する
 宿屋あるの外一の村落なしと云へば其道路の困難なる想像に餘りあり
 余は此齊々哈爾、伯都訥間を嫩江の水路に藉りしを以て序に其状況を叙せんに水路は

陸路に比し約一倍半あり河流屈曲して或は南し或は東し時に西に走るが如くにして又
 東に走り殆んど蚯蚓の相縮めるが如く而して兩岸は茫々たる平原にして碧草天に連り
 帆舟其間を走る若し高所よりして此光景を見れば眞に白帆草野を縫ふの状あらん唯河流
 底淺くして幅廣く所々に沙洲あり小島あり河流分岐して數條となるかと思へば又濶し
 て湖澤の觀を爲す所あり故に雅爾河、綽爾河、洶爾河の諸水江に注ぐと雖ども其會合點
 を知ること容易ならず時としては其航路さへも分明ならずして多年此の江水を上下し
 て水路に熟する者にあらずんば航路を過ること多し此水路にありて江岸に村落を見る
 は二三に過ぎず即胡拉爾溪及び查拉諾爾等にして此の外多少の蒙古部落及喇嘛廟二箇
 所を望む此の沿岸は漁業地にして鯉、鯰、鮭の類を漁し鹽漬となし之を法庫門に輸送
 す直隸以北の乾魚は即ち是なり雁及び鴨の多きも豫想外にして土人獵獲の目的物なり
 嫩江と松花江との會合點は伯都訥の北七十清里の處にありて其處より數里の間は兩江
 の水色全く黄と青とに區別して混合せざるも一奇觀なりと云ふべし凡そ此間の水路延
 長九百清里にして江岸に二三の村落あるの外は僅に岸上に點々たる漁戸の内に炊煙の

揚るを認むるのみ悠悠たる別天地と云はん乎、家裏たる蠻境と云はん乎、开は唯觀る人の性情如何に存せんのみ

伯都訥は滿洲の地誌を讀める者の能く知悉するが如く北緯四十五度二十一分東經百二十五度十分松花江の右岸に位置し四方土壁を廻らし方五百歩許あり四面各一門を設け其南門江に面し中央に牌樓ありて大街四方に通ず而して其南門に通ずる者最も繁盛にして人口約二萬蓋し松花江平原の一中心市場なり同地と吉林との交通は松花江の水路に頼るか又は其江岸の陸路に頼るかなれども其奉天方面に出づるには吉林に出づるを要せず蒙古部を横ぎりて長春に出づるの間道あり此間道は伯都訥方面の貨物を營口に輸出する短距離の商路として馬車の來往するもの鮮少なからず唯外國の漫遊者杯は未だ此路を取りしものなきが如し余は歸路伯都訥にて嫩江の舟客たるを辭し此間道を取りて長春に出でたれば其狀況の一斑を叙せんに伯都訥より長春に至る延長三百五十清里松花江を渡過して道は殆んど正南を指し所々丘陵を越ゆる所あるも一箇の峻山大河なく馬車の往來に便なるも唯地卑濕にして沼澤ありて徒歩の客を苦ましむ其經過の地は

全く蒙古部の郭爾羅斯前旗の管理地にして沿道に蒙古人の小村落あり漢人其間に雜居し伯都訥より九十清里にして公營子と稱する一部落あり郭爾羅斯前旗の本部なり此處より又四十里にして張家店あり之を蒙古部と滿洲領の界となす此處迄は荒蕪の地多かりしも此處よりは盡く原野を開墾し且つ田畝の間植うるに楊を以てし劃然分界を爲せり哈哩海城は戸數四五十戸の小村落にして農安縣は古の龍安城たり北緯四十四度二十五分東經百二十五度三十分平野の中央に位置し南北五百步東西三百步廻らすに土壁を以てし四方各一門を設く西門外に一高塔あり隆王塔と云ふ金代の遺蹟ならんと云ふ此塔半は朽廢して今にも倒壊せんかと思はる此市の人口約二萬巨商大賈相櫛比し街市の規模甚だ大なり此處より以南沼澤多く雙榆樹に至れば伊通河其左に流れ道路は降雨の爲め一面沼澤をなし深さ腰を没する所あり村落皆澤國の觀あり農安より此澤地を過ぐること百四十清里にして長春府に達す蓋し此の道路は全くの間道なれば伯都訥吉林間の本道に比して旅客の數未だ及ばざること遠しと雖も將來松花江平原の產物營口に輸出するもの増加するに隨つて漸次に繁盛を増加し遂には長春、通江子間の道路が奉天、

吉林間の道路よりも繁盛なると同様の觀を呈するやも未だ知るべからざる也

七十

吉林府より琿春

長春府より吉林府に至るの道路は坦々たる大道にして旅客の來往も頻繁なれども吉林府は三面山を以て圍まれ南方僅に松花江に濱して門戸を開くが如し同府より東して旅春に向へば地質は全く山岳帶に屬し長官材嶺、老爺嶺、烟集崗、窟籠山、大盤嶺等の山岳道に横り松花江、牡丹江、圖們江皆其溪谷の間に發源す之を吉林以西に比すれば山又山にして道路險惡、住民稀少、商客寂寥たり、今其沿道の狀況を叙せんに吉林府を距る四十清里にして交密峯と名くる一小村落あり老爺嶺山脈の入口にして此處より道は溪谷の間を走り窺々たる山岳左右に峙ち喬木蔚々天を摩し溪幽に水清く眞に桃源の思あり老爺嶺は即ち那穆窩集にして窩集とは滿語にて大森林の義なり老爺嶺を超えて行くこと一百清里にして又色齊窩集あり五葉松及び樅、楊、榆の類盛々として老幹百尺枝葉天を覆ひて晝尙暗く朽木地に仆れて老蛇路に横はる狀をなす吳兆熊の寧古塔紀略に窩集の事を記せるものあり曰く

兆熊戍に赴き二十有三年(康熙)赦されて歸る行くこと二日石頭甸子を過ぐ其石岡瀾さ三十里長さ三百餘里、倏空玲瓏、下に流泉の潺湲たるあり第三日大烏稽に進む烏稽又は渥集窩集皆同音なり即ち老林なり松林千里際なく皆大古時の物、車馬横過六十里、天日を見ず微風震撼するときは濤聲瀾洑し啼鳥は號語して略人を畏れず初め林口に入る行人各々身傍の小物を取りて樹に懸け以て神を敬す、夕に嶺下に宿す、滿兵大樹皮二三片を取る瀾さ丈餘、舖くこと船篷の如くし以て座臥すべし獵する所の獐鹿を取り炙割して食す、夜半忽ち怪聲を聞く、山崩れ地裂けるが如し、即ち千年の枯樹摧折の聲也、第五日又復小烏稽を過ぐこと三十里、前狀の如し、

支那人の記事は毎に誇張多しと雖も此の記事は決して誇張にあらざる也否二百年後の今日其地を通過せる余をして尙ほ其記事の實際に符合するを首肯せしむるを以て見れば二百年前の記事としては今少しく形容を誇大にすること却て眞面目を得しやも知るべからず現今此の大小二窩集の間に拉法站、額勒赫站、退站の三站あり最後の退站稍大にして人家二十餘戸あり站外にも人家各處に散在し稍開墾の緒に就けりと雖も人煙尙

七十一

は察々たるを免れず道路の此の窩集を横断する所、大窩集に在りては六十清里小窩集にありては四十清里許りなるも其左右に延廣する所甚だ長く實に滿洲の大森林と言はざるを得ず且つ朔方備乘の記する所によれば窩集は滿洲に四十八の多きあり而して長白山一帯の大森林は此の數以外なりと以て滿洲に森林の多きを知るべし従前は山林を伐り出すの方充分ならざるの時に於てさへ吉林地方は木材を用ふること多く其街市に材木を敷き詰めたるものは實に此等大森林あるが爲めなり若し將來此等の森林より材木を伐り出すの便法を設け且つ其繁殖を怠らざれば滿洲三省は住民如何に繁殖すと雖も決して材木の缺乏に苦しむることなかるべし。現時東遼河平原の住民が薪材の缺乏に苦しむつゝある事實を目撃したる余は彼等が何故に運輸の便を設けて此等の森林を利用せざるかを怪しまざるを得ず

偕て長官材嶺を越えて鄂摩和索羅站に到れば山嶺漸く透して平野となり住民稍々多く四邊の土地稍々開墾に就き小平原中、別に一邦を拓けるが如き鄂摩和索羅站は人家七十、人口五百許りの小部落にして東は寧古塔に通じ東南は琿春に達し正南一百清里に

して敦化縣に到る敦化縣は吉林の東南部に於ける唯一の縣城にして清祖發祥の地、額多方の野と稱するは即ち此の地なり胡爾哈河實は此に發源す吉林以東にありては人口稠密の區なれども猶ほ寥々の感あるを免れず茫々たる平野十の六七は今尙ほ荒蕪に委せり此處より一百七十清里にして長白山の北支平頂山脈を越ゆ之れを哈爾巴嶺と云ふ是れ此の方面の分水嶺にして以東は圖們江の水域に屬し以西は胡爾哈河の水域に屬せり

哈爾巴嶺は低卑なる山岳なれども同嶺以東漸く溪谷をなし富爾哈圖河の水域となる此一帶人煙最も寂寥にして十戸以上の村落を見ず其五峯嶺は其名の如く五峯突兀として聳え其中央の一峯居然として雄大に左右の四峰を號令するが如く右方の一峯は突起して劍鋒を中空に摩せるが如く右端の一峯は一隅に湖據し獨り鋭を養ひて他と相關せざるものゝ如く左方の二峯は編將の大將の側に侍立して命を聽くに似たり富爾哈圖河は其左方を迂回し溪水石を嚼み流れて峡谷に入る其景甚だ佳なり五峯嶺の背後を楡樹川(或は魚樹川に作る)となす松林鬱々萬山之を圍み別に一乾坤を開く殆んど是仙境なり富爾哈圖河

其西南を回り再び峽中に入る峽を過ぎて老頭口に至れば又漸く小平原となる東西六七十里清里南北二十清里なり平原の東邊に局子街あり人家三百戸許一小部落なるも規模壯大街市の觀をなせり蓋し此の附近に砂金の産地あるによりて然るか煙集崗は其脈大にして恰も象の倒れたるが如く其路は峻峻ならざれども其頂に登れば萬山脚底に在を覺ゆ以東又溪谷を下り嘎呀河の富爾哈圖河との會合點に達し更に同河岸に沿うて圖們江の會合點に達す窟龍山は峻にして且急殆んを車行すべからず凉水泉水に到りて寧古塔より琿春に達する大路と會す此の地は圖們江の左岸に位置し江を隔て、朝鮮糧城を目標の間に見むべし是より下流田野甚だ美にして悉く開墾せられ其耕作者の六七分は朝鮮人なり尙ほ南する十里江濱に至れば圖們江は山脈を横斷して峽谷を出づれば則ち密江平野なり此の平野も凉水泉水の平野に傍坵し其南に峙てるものを大盤嶺となす官道は其溪谷を迂回し最低處を越ゆ之を越ゆれば全く平野にして一高山を見ず圖們江其中央を流れ左岸を琿春として右岸を朝鮮の慶源城とす

琿春城は世人の熟知する如く清露韓三國の境界を接する要地にして北緯四十二度五分東經百三十度三十五分圖們江の左岸琿春河の右岸に位置し西北一帶丘陵を負ひ西は圖們江を以て朝鮮と界し東南六十清里にして露領ホシエツト地方と界を交ゆ城は長方形にして東西三百餘歩南北一百餘歩回らずに土壁を以てし四面各一門を設く規模甚だ少なるも人口約一萬内外あり露領との陸路貿易によりて稻生氣を帶ぶ其輸出するものは牛豚及び麥粉馬糧等にして輸入する者は更紗及び綿布類と石油、マッチ、卷煙草、洗面盤、茶瓶、コップ等の雜貨類にして我邦の阿波縮及び綿布、傘、古新聞紙、ランブ、磁器等も多少の輸入ありと見え雜貨舖の店頭に并べられ居たりき此等の雜貨は皆烏港を経來りしものなり此の地方の産物は麥を大宗とし粟、豆、稷、高粱、玉蜀黍、葱、白菜、韭、蒜瓜類なり東南六十清里に三四道溝あり砂金を産し工夫約五百人餘其採掘に従事すと云へり

高麗觀及圖們江邊の韓民

嗚呼朝鮮なる哉高麗なるかな親ら標榜して小國「サラミ」となし小國となし他を稱して大國「サラミ」となし大國となす嗚呼此の言語や此の精神や實に他の隸屬を免れざ

るなり然と雖も朝鮮の今日あるも亦是れか爲なり小者之強大者之擒也とは鄭の子産か朝鮮に教ゆる所以徒に剛強にして他の強者大者の爲に挫折せられんよりは寧ろナマユの如く柳の如く強大國の間に處せしは實に朝鮮の今日ある所以なり

余嘗て釜山に遊ひ白衣の仙人身長の烟管を携へ或は砂濱に行吟し或は岩石に踞し丘上に踞蹠し樹陰に困臥す其敷三四百を下らす勞役に従ふ者殆ど見るべからず人生義務の何物たるを解せざる者の如し後又烏港に遊ひ該地の最賤民は則高麗にして實に見る影もなきなり行客の行李若くは貨物を運搬するを以て唯一の事業となす彼等は運搬夫以外何事をも解せざる也故に烏港に在りて高麗と云ば則運搬夫なり誰乎又朝鮮と云ふ一般なるを知らんや後又元山より鐵嶺の險を超へ京城を歴て仁川に至り高麗の野を横斷す其山河美ならざるに非ず其田野沃饒ならざるに非ず其米粟滋味ならざるに非ず其國土偏小なりとすべからざるなり其民人寡小なりとすべからざるなり然も其村落を見れば貧寒洗ふか如く茅屋僅に風雨を覆ふのみ其人民全く生氣なく殆ど枯骨に類す是れ彼等固有の天性なるか山河風土の然しむる所か抑又政治の然らしむる所か否決して然ら

ざるなり是れ全く數百年來屢四隣強大國の爲に威壓せられ力以て強大隣國に抗敵すべからざるを自覺せる者數千百年相襲て以て彼等の腦裏に深印し由て以て第二の天性を作爲せる者譬へば喬木の下草木の長せざるが如し之に加ふるに苛政を以てす餘生を保たば則ち足るとは彼等の胸中を暴露せる者彼等は日と清と露とに於て撰ぶ所に非ず唯其強者に追隨して餘生を保たんのみ

今這回偶滿洲に遊び足を琿春に留むるの日江を渡りて高麗の慶源城を訪ふ城は琿春の西三十清里にあり其正西は連山並峙し其北東は圖們江之れを畫し清國との界をなし南は茫茫たる大平野なり其城は方二百餘間にして四方に各一門を設けあるも其門や朽腐して殆んど傾頽せんとす東門より入れば一大道あり廣さ十五六間其西に官衙めきたる大厦あれども是又朽壞して屋蓋と柱石とを剩せるのみ門前に政徳表あり又鐵牌あり石牌あり皆な某々大人政徳牌と記せり之を過ぐれば西門とす南北の二門に通ずる道路と其他の巷とは皆路側狹隘なり其家屋は覆ふに瓦を以てせるが故に遠くより之を望めば相當なる街市の如きも近づきて之を見れば矮陋にして汚穢なる逆も支那屋の宏大なる

に比すべくも非らず市街の中央に牛頭及び死犬を委棄し群犬之を争ふの状は滿洲の僻
 陬にても見る能はざる所にして何人も一見嘔吐を催すべし城の内外を合すれば人家三
 四百戸もあらん而かも一の店舗なく唯城内に一軒少許の貨物を蓄へて客の需に應ずる
 の家あるを見たり勿論此とて店舗を開けるにあらざれば土地に住する者以外には知る
 に由なし余は一韓人に案内せしめて其家に至り見しに室の一隅に露西亞更紗及び絲紙
 の類少許を並べあるのみにして其價も甚だ貴し蓋し此の地の韓人は貧困なるもの多く
 随つて其需要する貨物も少く若し之を要するときには珲春に赴き支那人の店舗に就て購
 買するが故なりと云ふ慶源府既に然り他の村落も亦知るべきのみ

既に記せし如く清韓の國境たる珲春附近に於ては韓人の江を越えて清境に入り以て耕
 作に従事する者甚だ多し局子街以東圖們江邊の平野開墾の緒に就きたるは全く朝鮮人
 力作の効によるものゝ如し其初の開墾に着手せるは三十年前の事にして清國の地方官
 も當初は毫も之を知らず後光緒七年に至り吉林將軍銘安の命により知府李金鏞と云ふ
 者珲春招墾事宜を命せられ同地方に出張して開墾に適當なる平野を踏査するに當りて

初めて嘎呀河の北岸八箇所の開地には既に北韓の邊民入り込みて荒蕪を開けるもの二
 千餘响之に頼りて衣食し居るもの數千人に下らず而て其開墾の地は朝鮮咸鏡道の刺史
 より證卷を下付し簿冊に登録しあることを發見し李金鏞は穩城府兵官趙秉稷に面會し
 其事情を質したるに如何にも右は越界に相違なきも現在圖們江南岸の韓民は給を北岸
 に仰ぎて餘命を繋げる次第なれば特別の仁惠を請ふ旨を答へたりと云ふ此の事李金鏞
 より將軍銘安に復命し將軍銘安より北京政府に上申し今更ら之を驅逐するも無慈悲の
 至りなれば地籍を踏査して相當の租税を收めしめ其咸鏡道刺史下付する所の地卷は之
 を回收燒棄せんことを請ひ遂に其裁可を得爾來此の方針に随つて韓人に移住開墾を公
 許せり是れ圖們江を越てえ朝鮮人の耕耘に従事するもの多き所以にして現今は此耕作
 者に三様の別あり第一は圖們江を渡りて清境に來り一日の業を終へて夕に又江を渡り
 て歸家するものにして此の類最も多きが如し第二は支那人に雇はれて開墾耕作するも
 のにして此類も亦寡しとせず第三は家族を携へて全家開墾地に移住するものにして此
 類は前二者に比して最も寡少なり耕作の法は多く牛を使役し馬を使役するは少し耕器

は支那製に似たれども粗悪にして拙劣なること其上にあり日雇稼の朝鮮人が監督者の眼を掠めて草中に臥し行人の足音に驚かされて起立するの状は實に一種の滑稽なり又余は江岸處々にて彼等が魚を漁するを見たるが其漁網と云ひ其漁法と云ひ宛然太古の遺法を學べるもの、如し唯琿春附近制錢寡少にして碎銀(銀塊を最小に切斷せるもの)を以て日用の通貨に用ふるも不便なるを以て朝鮮の銅錢を使用するもの多く局子街以南韓錢の通用せざる處なし韓錢は大中小三四様あれども皆同一價を保ちて支那錢の二文と相當す亦一奇なり而して呼ぶに小國錢大國錢を以てす朝鮮人の心膽みるべきなり

余は未だ足跡雞林八道の野に徧からずと雖とも略其南北に涉り其村落の貧寒なる其人民の生氣なきを見て衰亡の偶然ならざるを感せり今又端なく滿洲に遊び北韓の邊境を見て倍此の感を深せり嗚呼朝鮮の山岳は森林伐り盡して岩骨兀立す朝鮮の國家も生氣全く盡きて枯骨に均しき人民の蠢々たるのみ誰か一掬の涙なからんや吁

琿春より寧古塔

琿春より寧古塔に出づるの道路は我邦人の足跡を印せしもの僅に一二に過ぎず余は露

領南烏蘇里地方と接近する邊疆の事情を知るには此道路に依るに若かざるを思ひ琿春よりして直に足を寧古塔に向けたり其距離は通例六百清里と稱するも實は五百三四十清里に過ぎず道は十の七八迄は圖們江の上流なる嘎呀河溪谷を溯り老松嶺以北は瑚爾哈河の水域を下り活渾山及び馬爾瑚里窩集の溪谷を迂回するものにして其間平原は絶無と云ふも不可なく人家の如きも溪山の崖に或は一戸或は三四戸散點するのみにて殆ど無人の境に似たり殊に琿春と寧古塔との間は商業上の關係絶無にして旅客の來往も殆ど跡を絶し實に寂寥たる往來なり然れども道路は高山峻坂の阻なく盡く車馬を通ず其琿春より凉水泉水に到るの間は吉林に通ずる道路と同一にして此間は山又山他に道路を設くる餘地あらざるが如し沿道の山上には樹木鬱々森林をなし山麓及び河岸には到る處野生の芍藥華(余が此處を通過せるは五月の中旬)歩々花園の中を行くが如し凉水泉水より始めて吉林への本街道と分れ寧古塔への街道に入り一箇の小山と二箇の溪流とを渡り五十清里にして高麗嶺に達す此嶺の山脈は穆克禮亨と稱し窟龍山と相連る朝鮮の界上を距ること六十清里に過ぎず古昔は朝鮮人此の山に占據せしこともありて斯くは名づけしな

らん又二箇の小山と一箇の溪流を過ぎりて王青に到る地稍廣く靖邊軍の一隊と鑿礦總局とあり靖邊軍は盜賊に備へ且つ邊界を警備するものにして鑿礦總局は傍近の開墾及び採礦の事務を掌理する所なり白草溝嘎呀河等に砂金場あり皆此の總局の管理する所なりと云ふ然れども住民は至て寡少にして肥沃なる土地は六七分今尙は荒蕪に委せり太平嶺わり嘎呀河は遠く其東方を迂回し道も亦之れに隨ふ駱駝拉子に至る南北三十清里東西十清里許の小平原にして此處にも亦靖邊軍及び開礦局あり以北を馬爾琿里窩集と稱し土人は之れを老松嶺と呼ぶ老松最も繁茂せるを以て也此窩集も其面積甚だ廣く數十里の間喬木鬱々たり聞く此森林は盜賊の巢窟なりと時は五月の十六日余は此地を過ぎり嶺を下りて林中の孤屋を見出し就て之に宿せんと欲せり主人歡待甚だ厚し時に一馬車の傍に息ふあり御者余が此處に宿するの意あるを見問ふて曰く汝は此處に宿するかと余答へて曰く然りと彼れ更に反問して曰く汝更に行くの意なきかと其意飄する所あるに似たり屋中を願れば一家盡く男子のみにして一人の婦女なし因て其意のある所を覺り對へて曰く更に行くべし請ふ汝が馬車の一隅を貸せよと遂に同行して去る

行くこと未だ幾くならず御者問ふて曰く汝彼の宿亭を知るかと直ちに其口邊を指す滿洲の俗盜賊を呼んで葫子と爲す葫子とは鬚髯ある人てふ義なり余是に於てか御者の厚意によりて盜賊の害を免れたるを知れり是より以北老松嶺の溪流道路に當り之を横ぎること幾回なるを知らず而して溪谷の間尙ほ堅氷を存し水の冷なること氷の如く一たび水中に入れば足指凍痛を覺えて歩すること能はず徐に摩擦して血液の、循環を常ならしめて始めて歩するを得五月の中旬にして猶ほ此の如し氣候の凜冽なる以て推知すべし將に寧古塔に達せんとする七十清里に新官地あり人家六七十戸理、寧兩城間唯一の大村落なり是より以北全く平原にして土又美なるも荒蕪に屬するもの多し寧古塔は北緯四十四度二十二分東經百二十九度四十四分に位し瑚爾哈河の左岸にあり河は西より來りて屈折して北に流る城西五六清里に一山あり江上に兀立し峻崖を爲し更に透して小山脈となり以て城の西北を圍み南は老松嶺の山脈遠く之を圍繞し恰も屏風を立てたるが如く其間江を挟みて大平野を爲す東は三岔口より露領のニコリヌク市に至るべし西は吉林に通じ西北は小白山脈を越えて阿勒楚喀に達すべく正北瑚爾哈河

に沿ふて下れば即ち三姓に到るべし實に女真族が雄を稱せし地にして渤海、上京の故城は寧古塔の西百里にあり遼の胡爾哈路も亦今其附近に當る殊に其三百清里を隔る覺羅村は清朝の始祖發祥の地にして寧古塔具勒の稱を冒せる蓋し之か爲なり此等の關係より清朝が鼎を北京に移せし後も寧古塔將軍を置きて吉林方面の鎮守となしたりしが後之を吉林に移して吉林將軍と稱せしめ寧古塔には副都統を置くこととなりて今日に至れり以て其滿洲東北に於ける一要地たるを知るに足るべし

寧古塔より二姓

滿洲各地の城廓を稱するものは盛京を除くの外多くは土壁を廻らせるものなるが寧古塔は廻らずに煉瓦壁を以てせり然れども規模は甚だ小にして方二百里餘歩東西南各一門あり城内に副都統衙門協領衙門街道廳及び兵營倉庫等を置き城外に電信局を設く東門外最も熱鬧にして巨商大賈櫛比し露商「シニコフ」なるもの此處に開店し居れり南門之に次ぎて熱鬧し西門又之に次ぐ人口約二萬と稱す南清よりする雜貨は營口より吉林を経て來り寧領よりするものは三岔口を経て來り其種類は琿春にある香と大同小異

なり此地の産物亦琿春と同じきも其價は琿春よりも貴し是れ露領との交易琿春の如く便ならざるによる吳兆騫の寧古塔紀略に曰く國初寧古塔は極寒にして三春は晝夜風霜天に彌り七月は既に白鷺の池に下りて飛起する能はざるわれば數日にして霜降る八月大雪あり九月河水り十月地裂け春に至り凍始めて解くるも草木尙は未だ芽を萌さず夏は則ち哈湯(溜瀆)の險あり泥濘數百里人は草叢によりて行く稍傾側すれば人馬俱に陥る故に商賈足を裏む近ごろ則ち漢人日に衆く氣漸く和暖草土は横に樹木を舖き歲時修理す商旅張舉し百貨駢填廻に嗜昔に異なり云々と兆騫の此紀を作れる時寧古塔は尙は將軍の駐劄地たりしを見れば同地は實に其當時に於て草莽を除かれ遊牧人種が跳梁せし天然の原野稍開墾拓殖の道に就かんとし後將軍の吉林に移駐するに至りしが故に其勢一頓して僅に現狀を維持するものか聞く國初は城内には旅人のみを住せしめ漢人は東門外西門外に住せしめ後漸く城内にも住することを許したり現時にありても東門外西門外最も熱鬧にして商賈の多く此處に住するも亦之れが爲なりと

余は寧古塔に留まる數日清祖發祥の地が將來東清鐵道の敷設によりて變遷すべきかを

觀察したる後更に足を三姓に向けたり城を出で、琿春行する三十里江を渡りて三分口へ向ふの道路と分岐し又北行する三十里掖河に至る此地は寧古塔城の分砦とも云ふべき地にして三分口を控扼する兵勇は實に此處に駐營し今は東清鐵道通過の地に當れり此邊は尙ほ平野なるが以北漸く峽中に入る七十清里にして頭站あり站とは一の兵勇屯所にして寧古塔に屬するものは此處より算して四站あり三姓よりするものも亦四站あり總て八站にして一站二十或は三十人許の兵勇を配置し沿道警邏の任に當らしむ此他に一の人家を見ず頭站より以北溪を涉り山を越え六十清里にして二站に至る實に完達山脈の小白山に連る中間の地を横斷する所にして固より宿舍等のあるべき筈なく兵營に就て一宿を請へば彼等は頂より足に至る迄熟視しつゝ住所姓名は勿論何用事にて何地に行やと事細に尋問し其疑なきを視るや快く之を許し食物は自己の食する者と同様なるものを與へ自由に之を飲食せしめ格別客人待遇を爲さざる代りに又毫も隔心する所なく親戚故舊にても遇するが如き風あり而して去るに臨みて宿錢を與へんと云へば之れを却けて曰く吃小粟飯要什麼錢(粟飯を食はせて何の錢がいらうかい)と更に受取る氣色も見えざるなり

獨り兵營然るのみならず如何に貧乏なる家とても決して食物の價を收めざるなり是れ實に滿洲中否支那中に在りて異數の事にして支那人の金錢の事に濃厚なるや如何なる僻遠の地に住するの人民と雖も食りて飽くことを知らざるは余が從來の旅行中に於て毎々經驗せし所なるが獨り此地の民のみは旅行者に食物を與へ宿泊を便するを以て唯一の義務と自信せる者の如し太古民族淳朴の風四百餘洲中唯此地に存すると云ふも不可なからんか

寧古塔三姓間沿道の住民他に比して質樸なるは一は全く旅客の僅小なるにもよる而して旅客の僅少なるは車馬の通せざるによる滿洲中の道路粗悪なりと雖も孰れも車馬を通ずるに差支へなきも獨り此間の道路のみは車馬を通せず是れ實に滿洲中に在りて異數の事となす聞く此の道路は光緒七年吳大澂が軍事的の要路として開鑿修理せし事あり一時は立派なる官道となりしも其後放棄して又修理せず今や破壊して尋ねべからず而て僅に當年の形を存する所と雖も殆んど草萊の爲に覆はれて僅に人の通行し得る丈を剩せるのみ其路程は六百清里と汎稱するも實は五百五十清里に過ぎず道は殆んど全

く胡爾哈河の右岸にありて五百清里の間は全く峽中にありと云ふべき也又此沿道の左
右時に開墾の緒に就きたる所にして目下荒蕪に委せるものあるを見る之を土人に問へ
ば數年前馬賊の巢窟となり勢ひ甚だ猖獗なりければ官軍は三姓寧古塔の兩地より挾撃
して僅に之を驅逐することを得たるも之が爲め一旦入込み居たる良民皆離散せるに依
れりと又旅行者の紀行中には胡爾哈河には舟楫の上下するあるが如く記載せるもの多
きも余は其の隻影をも認めざりき孤客澤畔に行吟し孤影相伴つて溪又溪を辿る蓬草に
路を没じ險路足を惱ます余の如き散漫の遊を好むものと雖も是に至りては覺えず行路
難を唱へざる能はざりき辿りて辿りて三姓領の二站に至る站は江の右岸烏斯胡河の會
流する所にあり土人は城子河と稱す此處に一の古城址あり方二百歩許土壁尙は存せり
進んで頭站に至れば地稍開濶にして又一の險路なく直ちに三姓城に達す

三姓城は北緯四十六度二十分東經百二十九度五十分にして松花江と胡爾哈河と合流す
る東南岸に在り方約三百歩廻らすに土壁を以てし四面各一門あれども規模甚だ少なり
内に副都統衙門協領衙門あり其他は八旗人の住宅とす市街は其西門外なる胡爾哈河の
河岸にあり大街の廣さ七八歩に過ぎず商店櫛比すれども寂寥の感あり街の東西には二
牌樓あるも今既に頽壞せり街道廳蓋金局亦此の間にあり兵營は其南方に位置す又一露
商あり大街の一角に於て家屋建築中なりき三姓の古城址は城の北門外に一土壁を存せ
り松花江を上下する船隻は皆此の三姓を發着所とし余が同地にあるの日は四十隻許の
帆船碇繫し居たるが皆麥粟等を裝載し居たり又一種の舟あり扁平にして太だ堅固なら
ず僅に材木を載するに足る是れ上流にて間に合せに仕立て材木を積み來り舟と共に販
賣し去りて又之を上流に溯らしめざるが爲なり此地附近には大平原なしと雖も江岸に
は肥沃の土に乏しからず能く之を開拓せば其富源決して鮮なきにあらざるべし然るに
住民稀薄にして四邊の草野は十中の八九今尙は天然の儘なり三姓の人口僅に一萬内外
に過ぎずして街市の繁盛寧古塔琿春に及ばざる故なきにあらざる也初め余の寧古塔よ
り胡爾哈河岸を下るや以爲らく三姓の地は松花江岸に濱し露領との交通も便なり其繁
榮吉林に及ばざるも寧古塔の上にあらんと思しに實際は全く豫想に反せり然れども露
人が哈拉賓に於ける經營其歩を進むると共に松花江の航運は愈發達すべきは疑なき事

實にして而して松花江の航運に於て其中繼所たるの地位に立つものは則ち三姓に外ならざれば將來に於ける三姓の地位は決して有望ならずと云ふべからざる也

此の一篇は吾友長黒生の滿洲漫遊記なり初め生の北京を發して滿洲に遊歴せんとするや余に謂て曰く見聞の事實は便宜之を報すべしと後三旬を閑して奉天より一書を寄せ且つ附記して曰く今後果して音信を通じ得べきや否やを知らざるなりと後數月果して音信絶し其消息杳として聞くべからず人をして其の或は意外の變に係れるにあらざるやと疑はしめしが數日前突然北京に歸來せり驚喜して之を迎へ徐に其行程を問へば則ち一文稿を懐に探りて曰く以て前日の約を果す所以なり文章の如きは尙ほ君の添削に任すと余即ち其草稿により更に滿洲に關する二三の書籍を参照し以て此の編を作る長黒生平日支那服を服し辮髪を垂れ粗食を厭はず勞苦を避けず一見すれば宛然たる支那勞働者なり故に我邦人の堪へ難しとする支那内地の旅行の如きも生は妥如として毫も之を痛苦せせず前年既に兩湖、四川、陝西、河南の地方を漫遊し昨年山東及び滿洲の一部に遊べり即ち本年の滿洲行は其第二回の遊歴にして單身徒步して我一千餘里の山河を踏破せり豈に又壯ならずや蓋し深く滿洲の事に慨する所あれば尙其長白山、黒龍江の義を取りて長黒生と號するもの豈は亦深意なしと云はんや

林 鶴 生 識

以上の序論及び滿洲漫遊の旅程の下半より第十五節寧古塔より三姓に至るまでは明治三十二年九月六日より大阪朝日新聞及び東京朝日新聞に續載する所に係る其中誤字脱字等は之を訂正せしめ其文章は則ち改訂せず唯大圖們江邊の韓民の一節に於て其前半を加ふ又三姓、阿勒楚喀、及び呼蘭以下歴史に至る三十六節を加ふ然も決して盡せるには非ざるなり博雅の士教を賜らば則幸甚

長 黒 生 識

三姓より阿勒楚喀及び呼蘭

嗚呼三姓阿勒楚喀實に是吉林省の中原にして即ち又東三省の中原なり地は松花江の平原に屬し汪洋たる江流は其中央を貫き幾多の溪流は或は小長白山脈よりし或は小興安嶺よりし皆松花江に注ぎ灌溉の利運輸の便實に東三省に冠たり小興安、小長白の兩山脈は江岸を距る或は二十清里或は三四十清里好適度にして迫らず遠からず森林の鬱蒼たる草野の菁々たる牧場と爲すに於て田畝となすに於て最好最良の土なり斯の如きの好土其一半則察哈爾站及白楊木以東の多くは未だ狐狸豺狼の窟たるを免かれざるは何ぞや清朝の政略たる漢人をして滿洲に移住せしめず中葉にし其禁地ひ有名無實に屬し最近年に至て其非なるを覺り其移住を獎勵するも已に晚く徒に高加索克馬蹄の塵に委するに至る誠に慨すべきなり

此の兩地點は六百清里と稱するも實は五百四十清里に過ず其道路二あり一は三姓より直に牧丹江を渡り松花江右岸の地より察哈爾站に達す一は松花江左岸より白楊木に至り松花江を渡り察哈爾站に至り右岸の路と會す

白楊木の東三站到局子街あり地廣く土肥たり漸く將に開墾の緒に付かんとす街衢の規模大に人家も亦百戸に垂なんとす後來をれ一大邑とならん其他は僅に六七戸或は十餘戸にして村落と名くべからず白楊木以西は則ち黑龍江省の穀倉とも稱すべき呼蘭の一區則ち是なり

察哈爾站以西は余の所謂松花江平原にして丘陵起伏土質甚肥沃にして且盡く開墾せられたり察哈爾站は僻遠の小邑なるも人家四百餘戸人口約二千四百將に農事煩劇の候なるを以て勞働者の幅濶尤も多く殆ど市を爲す是れ此地方は皆大農家にし一家の人口は以て盡く其土を耕す能はず其地方の都會に於て山東の勞働者を雇傭せり而て勞働者に兩様あり一農期を以て雇傭に應ずる者と日々幾許の價を定て雇傭に應ずる者とあり賓州廳は北緯四十五度四十七分東經百二十七度四十八分松花江の南岸に在江を隔て、白彥蘇々と相對し西南阿勒楚喀に到る百三十清里西北哈爾濱に到る九十清里不等邊の三角形を爲せり正南に小白山の支脈蜿蜒するも甚だ低く四五百尺を超す東西北の三面皆茫茫たる原野なり

其城は二三の丘陵に跨り土壁を以て之を圍む東西約四百步南北三百步四方各一門を設く賓州廳は其民治に管し靖邊右翼一營は以て(名) 奸究に備ふ中央大街巨商大賈相櫛比せり特に中央より南門に通ずる處は熱鬧を極む此地も亦山東勞働者の群市を爲せり日常の雜貨は是を南方よりするも「洋燈及玻璃器の類殆ど日本物品ならざるなし小許の卷烟草及寫真小兒繪等を見たり」人口約一萬内外ならん

支那廿二行省中に在て盜賊と無賴漢の尤も多きを廣東省となし次を滿洲となす其實例は到處に鼻首多きこと是なり賓州廳門外に一老翁あり二個の小鳥籠の如き者を負擔して立ち之を看んと欲する者群を爲す余も亦群中に入り之れを窺へば則ち鼻首なり是既に鼻首の時日を経過したるものを其親戚故舊に與ふるもの、如し賓州城を過ぎ丘陵上猶ほ三個の鼻首を看る又匪克圖(フイクトウ)を過ぎ一丘陵を越へ日將に漸く黄昏ならんとす一大客店を見出し門を入り房屋に進めば其外見の大なるに似ず荒寥寂寥窓あるも一枚の紙の以て外面を掩ふなく坑あれども一張の席以て膝を入るなし唯雜具の狼籍たるのみ心甚だ平ならざるも日暮て前途知るべからず止を得す一小室中に臥す客店主亦同室中に臥せ

んとし来るや一利鎌を携へ來り之を其枕頭に置く余益心平なる能はず少時にして一客の門を叩く者あり主人起き客を引く余其閑を窺ひ竊に利鎌を他處に轉し彼をして知らしめず彼歸來頻に之を求むるも得ず之を其隣室に臥たる妻に問ふ他も亦知らず次は則ち問ひ余に及ぶ余反問して曰く彼の鎌は夜中何の用ふる處ぞ主人未だ答へず隣室の妻其夫に告て曰く遠來の客未だ滿洲の俗を審にせず凶器を備ふるを怪む誠に其處なり滿洲の俗妻子を有するものは良民にして憂ふるに足らず若し夫家族なきの家は殆ど是賊窟なり利鎌を枕頭に具ふるは偶以て賊に備ふる所以なり客をして其他意なきを知らしめよと喃喃々囁々口を絶せず余も亦略ぼ之を聞くこと久し故に其情を知る笑て其所在を告く以上の二事は滿洲に賊の多きを證するに足る

阿勒楚喀城は土名を阿什河と云ひ同名河の左岸に在る滿洲中屈指の大都會にして北緯四十五度三十五分東經百廿七度五分なる松花江南岸を距る九十里清里の地に在り西南拉林を距る百三十清里西伯都訥に至る三百清里と稱す南北一千四百餘步東西四百餘步南北各一門あり東西又各三門を開く南北に通する大街巨商大賈相櫛比し尤も大なるを

質屋となし又金銀細工則ち婦女の頭飾具を製する者甚た多し其他酒樓の如きも樓上を有するものあり二層樓上を有する酒樓は三省中殆どなき所なり人口大約五萬と稱す副都統衙門八旗衙門は大街の東にあり東清鐵道交涉局は其西にあり此地は余の所謂松花江平原の中央に位置せる大都會にして道は水陸兩路より以て三姓に通すべく北は呼蘭より齊々哈爾に到るへし伯都訥より齊々哈爾に到るの陸路は夏期殆ど通せず故に多くは此地を迂回す西南は以て吉林に達すべし四邊の野は盡く肥沃豐饒にして業に已に開墾せられ滿洲中能く阿片を産するは則ち此地なり是れ此地の繁榮を致す一源因ならんか且聞く此地は實に女眞の上京黃龍府なりと嗚呼金の蹶起する所以の者豈夫れ偶然ならんや而して今日は前數項に於て叙述するか如く滿洲の中央に於て聖彼得堡を現出しつゝわり莫斯科を現出しつゝあり國を東亞に爲す者豈夫れ寒心せずして可ならんや北すること七十清里五六の小村落と小丘陵の波濤の狀をなせる地を経過すれば則ち房となす是前項に叙述する哈爾濱の一部にして支那固有の新房燒鍋の地なり更に北すること二十清里にして哈爾濱あり是則ち松花江岸にして支那人固有の哈爾濱は固是れ江岸の一

小漁村なりしなり哈爾濱より呼蘭に到る三路あり一を水路となし一は呼蘭河口を迂回する者にして大路なるも遠く一は直に江を渡り或は鐵道線路に添ひ或は沼澤を廻り則ち内蒙古四盟旗の郭爾羅斯部を通過し六十清里にして呼蘭河を渡れば則ち呼蘭城となす呼蘭城は北緯四十六度十分東經百二十六度五十分呼蘭河の左岸松花江の北岸六十清里に在り人口大約一萬五千此地は城と稱すも城牆あるなく土壁あるなし中央大街南北長さ一千二百步其繁榮は阿勒楚喀に及ばざるも巨商大賈甚多く家屋の構造甚大にして商家の看板なる鳥居の如き牌樓と稱する者或は單に柱を建るあり其大方一尺四五寸にして高さ六七間なる者あり其全株を漆し泥金もて自己の有する商品を書き連ね譬へは巴蜀の藥品杭蘇の綱綢の類是なりこは唯に呼蘭のみに限るに非ざるも呼蘭は特に規模の大なる者あり其東を駐防八旗の街衢となす副都統衙門協領衙門街道廳は此處に在り大街中の一大客店は大清東省鐵路公司に宛られたり其南端呼蘭河に面する處五六隻の小舟を見るのみ

本城の地勢たる茫々たる大平野の中に在りて西南六十清里を隔て、遙に尼瑪拉山を望

ひのみ西は呼蘭河を隔て、直ちに蒙古郭爾羅斯部となり北に小廟子あり東北に北園林子あり東に白彥蘇々あり此一區は實に黑龍江省中唯一の肥沃豐饒なる穀倉と稱すへき地にして齊々哈爾、黑爾根、愛理は皆糧を此地に仰くなり且歴史上に於て有名なる金の五國城は此地ならんと思ふ其故は余嘗て宋の徽欽二帝の漠北に囚にせらるゝ紀事を見たり(其昔名を忘れ其記事も唯恍惚として心にあるのみ其文章の如き明ならず)其中に謂あり大山を超へ(陰山山脈或は大行山山脈ならん)次に大漠を涉り大江を濟ると是尤も呼蘭に適合せり又其上京黃龍府を寧古塔となす者あり然れと進取勃興の國豈久しく山中に蟄居せんや黃龍府を阿勒楚喀とすれば呼蘭は實に恰當の位置なり且五國城を單に五國城と云すして五國城口と云ふ支那に於て口と稱する地は多く一河の大江に會するの地或は江河の海に朝宗するの地點を指す其例は漢口の如く鎮口の如く營口の如し且つ山東人の製したるものにして杜撰孟浪なれども呼蘭城を以て五國城と印せり(此一節は博雅の效を待つ)以上は實に蛇足の辯に似たれども呼蘭の一區と黃龍府の遺跡は女眞の興廢に關する者今や又東方露國の勃興に關する者甚大なり大觀者夫留意せよ

呼蘭より齊々哈爾

千里不止楊柳影日出荒草沒荒草とは余をして是此六百清里間の實景を喝破せしめしなり余の放浪散漫なる骨て千仞の叩嶽九折坂上に大雪山頂の水塊を望み又大渡河邊の溪谷に彷徨するも或は崇高壯大なるに或は激流奔泉に或は奇岩怪石に或は千仞の絶壁に其地を異にし其景を異にし稍以孤客の胸中を慰するに足る者ありしなり然るに是此の六百清里は余をして日々同一の地點に彷徨するに非ざるかと疑かはしむ是全く此六百清里間は山もなく河もなく森林もなく村落もなし殆ど大洋を航するか如く茫洋として際渥あるなく唯荒草の中を行くのみ七八町若くは十町許を隔て一客店あり後者を目送し終れば前者は眼に入て来る然も子細に之を見れば其規模と云ひ家屋の構造と云ひ略相似たり地勢已に同じく家屋の規模構造又相同し故に前者と後者の類別に苦む日々同一の地に彷徨するかの嘆止むを得ざるなり

呼蘭より小廟子に至る九十清里間は呼蘭河及通肯河の水域にして呼蘭北團林子白彦蘇々等と相并て黑龍江省穀倉となすの地なり故に村落相望み土地肥沃なり呼蘭河を渡り砂拉河哨の北一丘を超ゆる其西に一古城跡あり方四百歩許土壁猶ほ存す

小廟子は北緯四十六度二十分東經百二十六度三十五分呼蘭河の右岸に位置し小丘陵上に在り西蒙古の郭爾羅斯部と界を接し茫茫たる大原野の中にあり(余六月七日阿勒楚喀を發し七月七日長春に至る道程一千六百餘清里間則二百三十里山を見ず)人口約一千四百を有し呼蘭齊々哈爾間唯一の都會なり西北五十

清里に「布打城」と云へる蒙古の一小部落あり所謂穹廬なる者茲に於てか見るを得たり其形は恰も鐵道客車の側面より僅に一人を出せしむる口を有するのみ其構造は石を積み外部に土泥を塗たる者なり其大横一丈許にして長さ一丈二三尺高さ僅に七尺以下なり屋内の汚穢なる事物の比へきなし一小喇嘛廟あり稍大なり牧馬一千頭内外龍種驥駿長風に嘶くの景胡兒胡騎に跨り郊原を馳驅するの狀人をして覺えず快と呼はしむ是より西北全く郊原となり且一村落なく博魯渾子あるも一戸の客店あるのみ小廟子以北の地皆自ら行糧を携帶せざる可らず然も余は其情を審にせず一粒の粟をも携帶せず殆ど飢に類し食を得る能はざりし偶道に山東人の久しく此地に移住し齊々哈爾に行く者に邂逅す彼則其携帶する處の乾糧を(則食ばん粟と玉蜀黍を粉末となし餅となしする物)食せしめ又余の爲に知人に付

て粟を購ひ飢さらしむ茫漠の原野無人の地何事ぞ牡若花獨り咲を呈し聊さが以て客心を慰するに足る黄花菜なる者あり其形牡若花に類し其色の黄なるを差とす土人執り乾して以て菜食に宛つ齊々哈爾の東南二百餘清里に嘴辟城あり植林を試みつゝあり牧羊の群を見る甚多し又齊々哈爾の東一百清里許に瑚裕爾河あり濘して一大沼澤となる土人稱して濘大濘子と云ふ若し夫降雨の期は水深くして徒渉すへからず余は一山東人に導かれて徒渉するを得たり若し夫單獨ならしめは決して其深淺を知る能す然も猶腰を沒する所ありし

齊々哈爾城は土人之をト魁と稱す北緯四十七度二十八分東經百二十三度五十五分嫩江の左岸茫漠たる砂原中に在り嫩江其西北を廻り南流す東西興安嶺は茫々漠々望むへからず東北墨爾根城を歴て愛理に至る約八百五十餘清里西北呼倫貝爾(土名海拉爾)に至る一千二百清里と稱す南伯都訥に至る六百清里と稱するも實に五百三十餘里に過ぎず人口は約五萬許なり

本城は黒龍江將軍駐札の地にして城に内外あり内城は煉瓦を以て之を造り方四百歩許四方に各一門を設く將軍衙門副都統衙門協領衙門電信局は内城にあり廻らずに外郭を以てす南北一千二百歩許東西八百歩許内城南門より外郭南門に通する大街を尤も繁盛の區となす呉服店、茶店、穀類店、質店、雜貨店、錢店等の巨商大賈甚た多く馬鞍及江石と云ふ瑪瑙に似たる石を以て造りたる烟管の吸口はト魁の特産物となす又獸皮甚多し海拉爾の馬は此地を経て之を南方に輸たす米、粟、豆、高粱は伯都訥より水路を溯り此地に輸送す尤も一驚せしは京都村井兄弟商會の孔雀標を三處に於て各一箱つゝ購ひしに一は六錢にして一は五錢一は四錢なりし營口に在て猶且五錢を價せし者數百里外の齊々哈爾に在りて反て四錢なりとは

本城には滿漢人のみならず蒙古、回々、達瑚爾、鄂魯春、索倫、等雜居せり蒙古人は稍區別するを得るも其他の諸族に至りては殆ど別つ所なし唯彼等の言語に由て漢人に非ざるを知るのみ

齊々哈爾より伯都訥

齊々哈爾より伯都訥に至る陸路六百清里と稱し水路は約之に一倍半とす聞く陸路は近

しと雖とも沮洳沼澤甚た多く行歩尤も困難なり站と稱する宿驛の外殆ど村落人家なし水路の便なるに若かすと遂に水路に決す

城外に二埠頭あり一は城の西北端にして一は其西南端に在り相距る十清里許舟の來り泊する者各二十有隻皆伯都訥より穀類、木材等を運輸し來る者就て船價を問へは一圓二十五錢なりと其幾日を要するやと問へは風に順逆あり豫め知るへからすと

以上の兩地間は嫩江全く内蒙古の杜爾伯特、郭爾羅斯後旗、及郭爾羅斯前旗、大草野の地を奔る故に其水路も或は南し或は北し或は東し或は西し殆ど蚯蚓の如く白帆草野を奔るの奇觀あり或は砂洲あり小島あり分岐せる所瀦を爲すの處多年江流を往來し細心と注意と能く水理を暗する者に非ずんば其航路を知る能ざるなり故に雅爾、穆爾、洵爾等の諸河皆江に注ぐと雖も遂に知る能ざるなり又此六百清里間村落を見る二三に過す第一を胡拉爾溪となす此地は猶黑龍江省に屬し齊々哈爾を距る六十清里にして東清鐵道は興安嶺を超へ雅爾河の水域を下り此地に於て嫩江を渡り内蒙古の杜爾伯特旗、郭爾羅斯後旗の地を一直線に哈爾濱に達するなり此地は露國か滿洲鐵道を經營する上

に於て哈爾濱、海拉爾間唯一の重要點なるを以て特に經營に苦心慘憺たる者の如し何となれば東南の蒙古部固より無人の地西北の雅爾河水域及興安嶺も亦無人の地土工夫の募集容易ならず糧食を得る容易ならず之を運搬する又容易ならず偶々募集に應ずる者も其爲す所に嫌焉たらず逃るゝ者比々皆是なり道路を開鑿し家屋を構造しつゝある等大に觀るべきものあるか如し惜哉上陸して其詳を觀察する能ざることを煉瓦の堆積せる者甚多し第二を查拉諾爾となす全く蒙古部落にして人家七八戸所謂穹廬なり衣服に於て異なるなきも女子の頭髮稍異なり特に女子の河水を汲むは支那の風俗になき所其言語は一も通せざるなり他に一二の部落を望みしも接近せしに非ず船夫又地名を知らず五六百頭許の馬群を見る呼蘭、齊々哈爾間の牧馬場と異なるなし喇嘛廟を見る二一は齊々哈爾伯都訥の中間に在りて小一は伯都訥を距る百五六十清里にして大さ北京城外の黃寺に類す此邊は堆砂の丘陵各處に隆起す是嫩江の水流と松花江の水流と相激し加ふるに蒙古風を以てし遂に此丘陵を現出せしに非ざるか乞ふ地質學者の教を待たん以上の如く此の二地点間は茫々漠々たる大草野にして兩岸には蒞茹沼澤甚た多し而

して此沼澤の多くは漁場と化せり彎曲せる部分に柵を建運ね水の減するを待つ寛々たる漁獵法かな船夫も亦時に網を投す少時にして數百尾を得魚族の多き知るべきなり雁及び鴨の多き豫想外にして皆雛を孵化し雌雄之を圍み護し江上に浮游す眞に別天地の思あり何者の無情漢そ之を捕へんとは彼等始めは數百千群をなして遊ぶ船の近くに及て皆飛翔す唯其の父母の雌雄のみ之を護し逃る愈近くに及て砂上に登る是彼等の捕はるゝ所以其益々迫るに及て雄先逃れ雌之に次く嗚呼愛は夫れ母に厚きか

二隻の小汽船に遇ふ一は露の所有にして大さ約十四五噸内外一隻の小舟を挽けり内に二十有人の露人あり一は支那官船にして官文書の送達等に使用する者ならん露船に比すれば稍大なり又日々三四隻或は七八隻の船に遇ふのみ然も此兩地八九百清里間二三の蒙古部落と各處に散在する漁戸の外茫茫漠々たる草野のみ悠々たる別天地と云はゞ則云はんか荒寂寂たる蠻境と云はゞ則云はんか薄暮往々狼の食を江岸に求むる者を見る此間の旅情夫誰に向て語らん

三岔河口は嫩江と松花江との會合點なり其江流は甚だ廣く其水路は縱横故に何れか果

して松花江にして何れか嫩江なるか左すへきか右すへきか殆ど知るへからず此日幸にして松花江上流降雨の爲江水混濁明かに辨するを得たり此より伯都訥に至る七十清里となす

伯都訥城は北緯四十五度二十一分東經百二十五度十分松花江の右岸砂原の中に在り東南吉林に至る五百五十清里正南長春に至る三百六十清里東阿勒楚喀に至る三百清里と稱し水路は三岔河口より哈爾濱に至る四百清里と稱す若し夫西南法庫門に往かんか蒙古部草道を一直線に經過し八百清里にして至るへしと若し長春奉化等を迂回せば遠きと二百清里なりと

本城の地勢たる全く松花江の流砂より形成する者の如く四方盡く茫々漠々一山を見るなく唯各處に砂丘あるのみ然も松花江の江流あるに頼り樞要の區なるを以て副都統は茲に駐札せり城は南松花江に面し土壁を以て之を圍むも處々崩壊する所多し四方各一門を設け中央に牌樓あり其東に副都統衙門、協領衙門街道頗あり其北に電信局あり牌樓より南門に至るを尤も熱鬧繁盛の區となす南門外は則江岸にして吉林、齊々哈爾、

三姓、呼蘭、哈爾濱等に往來する船舶輻湊す其の泊する者約一百二十隻皆穀類及び南來の貨物、木材等を運搬する者其埠頭は熱鬧を極むるも其城内は阿勒楚喀、呼蘭、齊々哈爾等に比すれば繁盛の度巨商大賈の多からざる等は大に遜色ある所なり

伯都訥より長春

伯都訥より長春に至る四百清里と稱するも實に三百五六十清里に過す而して其名の如何に關せず松花江以西邊牆以北は皆内蒙古東四盟旗哲里木盟郭爾羅斯前旗の地なり而して其水域よりすれば則松花江の本流并に穆書河伊通河の三に屬せり此の間の地勢たる全く内蒙古の大草野に屬し東西北の三面は茫々漠々際涯なし唯長春の東南吉林との中間に小白山脈の餘波あるも四五百尺を超す

伯都訥城の南門外に於ける松花江は約八九百歩以上に涉り洪大なる廣袤を有するも其水深は深さも僅に八九尺に滿たす處々に流砂堆積せり故に此間に在て舟楫尤も困難を極るか如し以西の地は大略と稱すへからざるも又能く車馬を通ず處々に小村落ありて開墾に従事せり伯都訥を距る九十清里にして公營子と稱する一部落あり是則郭爾羅斯

前旗の所在地にして人家約三百五六十戸人口二千四百家屋の構造は全く北京八旗街と異なるなし此地は松花江の左岸にして約北緯四十五度東經百二十五度二十分許に位置し江を距る僅に十清里許帆影の相逐ふ者目睫の間に在り丘陵其西を掩ふ王侯の邸宅其中央に在り其他は周圍に散在せり伯都訥、長春の間農安縣を除けば此地を以て第一の大部落となす然も一の酒館なく一の店舗なし一客店ありしも汚穢にして宿泊すへからず一漢人に付て宿泊を得しのみ漢人皆云ふ蒙古人は商業を解せずと實に然るか其北に哈摩あり人家五十餘戸南に大理溝あり人家二十戸許あるも一の酒樓客店あるなし斯く蒙古部落なるに關せず戸々に蒙古人と同居する漢人あり或は單に奴隸となり田野を耕す者あり或は土地を租借して開墾に従事する者あり故に到る處に漢人の跡を絶つことなし公營子の南四十清里に張家店あり南哈哩海城を距る二十清里此地以南を漢人部落となし以北を蒙古部落となす聞く邊境外内蒙古の地は土地肥沃なるを以て康熙年間征露役後漢人漸く全地方に侵入し墾土に従事し人益多く遂に蒙古人と事端を生ず滿清政府則ち止を得ずして理民廳を各處に設けると同時に漢人の制限區域外に出るを禁す

此の張家店は則其境域か以北は草野茫茫際涯なく以南は田畝と田畝との間に廣袤約六七歩の榆楊を植ゆ其間に麥、粟、稗、黍の族を植ゆ其間劃然界を爲す特に以北の荒寥寂寥なるに反し以南は村落相臨む

哈哩海城は寂たる一寒村なるも伯都訥、農安間唯一の宿驛にして不充分なから二三の店舗を有し二の酒樓を有し又一大燒鍋を有し(酒屋)其規模殆ど一城郭の如し特に遼金の古城跡に非ざるかの觀あるも遂に明知するに由なかりき此地は約北緯四十四度四十五分東經百二十五度二十分許なり

農安城は北緯四十四度二十八分東經百二十五度二十一分伊通河の左岸平野の中に位置す城の大きさ方五百歩許圍むに土壁を以てす四方各一門を設く城内甚繁盛なりと云ふへからざるも北門より南門に通する巨商大賈多く其規模甚大なり人口約一萬五千内外ならん南門よりする道路は長春に通し百四十清里又西門より八家子(堡)に達する百六十清里以て法庫門に通すへし西門外に一高塔あり頂已に崩れ且傾く其建築煉瓦より成り七層を有す之れを土人に問へは隆王塔と云ふ當時思へらく必ず遼金の遺物ならんと後

に是を一支那人に聞けは唐の尉遲恭の造る所なりと且隆王塔に非ずして農安塔なり隆王農安土音相近し以南に沼澤多く特に降雨に際會せるを以て水深腰を没する處あり

長春府は土人之を寬城子と稱せり北緯四十三度五十三分東經百二十五度二十一分伊通河の左岸に位置し東は小山脉を隔て、吉林に通し東北農安を歴て阿勒楚喀に至るへく西奉化八面城を經過し通江子及び法庫門に到るへし

本城の地勢たる伊通河南門外より其東を廻り依爾木哈達、伐什蘭哈達、呼蘭哈達(哈達、附山也)等の諸山吉林との間に起伏す南伊通門より伊通州に至る丘陵の起伏するのみ西北は所謂内蒙古の大草野に連り茫漠として際涯あるなし本城の構造たる全く城壁と云ふを得ず南門は稍城門の跡を備へ左右又少許の城壁を備ふるも其他は殆ど戸々の家屋を壁となす所あり城門と云も名のみにして戸々の衙門にも若かさる者あり其西方には全く門戸の設けなし南門より北門に通する一街を尤も繁盛の衢となす其他街衢縱横に通し大賈巨商甚多く家屋櫛比し客商雲集す人口約十萬を數ふ商品の大宗を大豆、豆油、烟草、豆餅、粟、麥、高粱、玉蜀黍、酒類、阿片、織物、蘇油、藍靛、人參、毛皮類、石油、

洋火(マッチ)、雜貨等なり

百十

此地は固政治上の關係あるに非ず此邊一帶の豊沃なる爲人民非常に蕃殖し蒙古人と種々の事端を發生せし爲嘉慶五年遂に理事通判(郡長の少許の兵を有し司法權を有する者)一員を設け刑名錢穀の事を管理せしむ爾後人民益蕃殖し遂に今日の盛を致す而して今日の盛を致す所以のもの全く征露の師と關係なくんばわらず康熙二十二年三月命して船を造り糧を松花江に運す其上諭に曰く饋運烏拉軍糧自遼河溯流運至等色屯隨用蒙古之力陸路運至伊通門自伊屯門船載順流至松花江云々とあり思ふに等色屯とは鐵嶺の北二十五清里の英守屯ならん當時此土名は是を土人に聞くのみ故に余の聞誤たるか或は語音の訛轉する者か明ならず地理上より此地なるを推定す又伊通門は現今の伊通邊門なるか或は今の長春なりしか好し長春に非すとすも征露の役の爲に此地方の肥沃なるを漢人に知られ遂に開墾の緒を開きしは事實なり唯に長春の一區のみならず東三省の開発の緒に着きしは康熙征露の役是か媒介たらずんば非ざるなり天下の事は其原因其結果人意の表に出する者あり大觀せずして可ならんや

長春より通江子及法庫門

世人の少しく海外の貿易に注目する者營口(牛莊)の輸出入の益盛況に赴きつゝあるを知らん又足一たひ營口に遊ぶ者遼河口船舶の輻湊に驚かん而して必ず營口の貿易は遼河の貿易なるに思ひ至らん舳艫相合む以て形容するに足ざるなり帆影江を覆ふ以て實景を盡すに足ざるなり帆檣は林の如く江上別に一天地を開くと云はんか二三千隻以上四千隻に垂なんとする船舶は是唯營口に泊する者のみ更に營口より通江子に至る七八百清里遼河江上に上下する者を數ふれば又數千の上に出てん此一萬以上の船舶何れの地に往來するかと問は、其大數の通江子なるを知らん通江子は余の所謂東遼河平原の吞吐口にして遼河貿易の大半を吞吐する者なり東遼河平原の營口貿易に大關係ある以て知るべきなり

長春、昌圖、奉化、懷德、農安、康平、八面城等は余の所謂東遼河平原なり其面積を以てすれば約四千方里(長春農安は伊通水城なるし假に名く)東南吉林連山脈を負て西北は内蒙古の大草原に連る土地肥沃にして五穀豐熟大都會の外村落相連り其大道路は滿洲の大車輪を駢馳す

百十一

へし其大運送客店は四五百頭の牛馬を宿せしむるに足る田畝の長さは五六百歩に達し
兩極端竝立の人互に相辨せず新耘盡く牛馬を用ふるのみならず播種且馬を用ふ其農具
の利不利は固より同日の論に非ざるも米國の耕耘法と雖ども其規模の大に於て相讓ら
ざるへきを信するなり耕耘及交通機關の規模の大なる偶以て其土地の洪大にして沃壤
なるを察すへきなり

長春の正南六十清里に伊通邊門あり是則盛京の東部吉林の北部邊牆に設けある四門中
の一なり(滿洲の邊牆は宛も丁字形にして左に科昂、法庫、彰武臺、皇殿、清河、九喇臺、松子嶺、新奉邊、
梨樹溝、白石嘴、鴨水臺の十一門右に布爾圖庫、赫爾蘇、伊通、巴彥鄂博羅、の四門下方に威遠
堡、英額、永清、鐵廠、靈陽、) 昔者清朝勃興の際歴蒙古の營あるを以て邊門を設けし也特に
康熙年間征露の役等色屯より陸路に依り兵食を此地に運し更に伊通河を利用して松花
江に下りし也當時の盛なる思半に過ぎん果して當時の遺物なるか客店等の規模甚だ壯
大なりし後兵備漸く弛廢し墟趾に屬せり特に其所謂柳條邊牆なる者は四五步或は七八
歩を隔て、柳樹の繁茂せるを見る其外に壕あるも三四尺に過ぎず余屢所謂柳條邊門を
出入するも殆ど其片影たも見ると能さりし唯是ありしは伊通門より赫爾蘇邊門の附近

のみ

懷德縣は土人之を八家子と稱す北緯四十三度五十七分東經百二十四度五十分に位置し
東長春に至る百十清里東北農安に至る百六十清里西南奉化に至る百四十清里にして内
蒙古郭爾羅斯前旗の地なり木城の繁盛固より以て長春に比すへきに非ず奉化農安の下
に在り人口約一萬二三千か而して長春に通する道路に一沼澤あり廣袤約十清里に渉る
南北知るへからず而して昔者大道路を築造し其形影猶は存するも今や全く行くへから
す

奉化は土人之を買賣街と稱す北緯四十三度三十一分東經百二十四度三十分に位置し此
地も亦内蒙古科爾沁左翼中旗の地にして沃野千里殆ど際涯なし亦城壁なく三條の大街
巨商大賈甚多く人口約二萬四五千ならん此より西南昌圖開原を歴て鐵嶺に到るの路あ
り八面城金家屯を歴て通江子及法庫門に達する路あり而して昌圖との中間に四平街、
繁鶯樹あり共に一大邑なり

昌圖府府は土人の榆城子と稱し又是邊牆外蒙古の地にして北緯四十二度五十五分東經

百二十四度二分大平野の内に位置し南小丘を超へ開原に至るべく西四十清里にして通江子に達すへし奉天に往來するもの必經の路なり府衙門に標榜して曰く古榆城也と檢城とは何の時代の建置なるか或は唐朝に非ざるか博雅の教を俟つ此地も亦唯僅に衙門を存するのみにて城壁あるなし其の市街も丘陵に跨り規模甚大ならず巨商も多からず其の人口は二萬内外ならん奉化に通する中間に慈鷲樹四平街あり共に二百戸許一大邑なり

八面城は奉化より直ちに通江子に通する大路上北緯四十三度二十二分東經百二十四度十五分奉化の西南六十清里に位置し邊境外の一都會にして其の人口を以てすれば昌圖と兄たり難く弟たり難し而して其繁盛は反て其上にあり是其近傍の肥沃なると通江子長春間の大路上にあるか故なり其西南一百餘清里に金家屯あり又是繁盛の區其人口五千内外ならん

通江子は北緯四十二度四十一分東經百二十三度四十分遼河の左岸に位置し唯に東遼河の吞吐口のみならず實に滿洲三省の吞吐口と云ふべきなり古來遼河の水運は鐵嶺に至

りて止まり是より多く車馬を以て輸送せしなり然るに營口の益繁盛となるに従ひ遼河の水運は益擴張せられ通江子遂に鐵嶺に代るに至れり通江子の地たる固是河瀕の一漁村のみ特に其建置未た久しからず大都會を成すに至らざるも後來益有望の地たらんなり或人説を爲て曰く滿洲に於ける露人鐵道の經營は各地に散在する都會に大影響を及ぼさんと然り彼露人の經營は固姑息の經營に非ず東三省を盡く露化せんとは彼等の宿願なり故其影響は免ざる處ならんも漢人族亦利を以て卓然不屈不撓なる者通江子の廢すへからざる理由多々是あるなり遼河水運の捨へからざる車馬の廢すへからざる而して遼河水運の廢すへからざるは三尺の童子も皆之を知らん車馬の廢すへからざるに至ては世の怪む所ならんも滿洲の地到る處に盡く馬耕を用ゆ其大農家に至りては牛馬驛驢を牧用する多きは二三百頭に至る而も滿洲の氣候の寒冽なる冬期耕耘に由なし則不用の牛馬を用ひて其貯ふる處の穀粟、豆、麥を運す不要を用ひて有要となす運送費の輕減は必至の數なり是通江子の衰へざる所以なり通江子の街衢たる未だ以て整然たる市區と稱すへからずも大賈巨商の中庭累々として山の如きもの甚だ多し近て之を熟視す

れは即ち豆と鹽となり規模の大以て類推すへし河中に泊する船舶其數一千餘隻是皆豆及豆餅を運輸するもの其盛況實に驚くべきなり河を隔て、西岸に小塔子あり是れ則ち松山脈東に走り醫巫闾山となり法庫山となり漸く低下し遂に丘陵となり小塔子に至りて遼河江上に突出し遙かに吉林連山と相望む此れより四十清里全く山骨の地を行く回頭すれば五月廿四五日三姓の上流に於て完達山を横断せし以後五十餘日山地を駟馳すと云は、如何に其大平原なるかを推知すべきなり而かも法庫門は唯是山骨を露出せし丘陵のみ以南營口に歸來するも全く山嶺を上下せざるなり

法庫門は邊境中に設けある十一門中の一にして蒙古に對して尤も要衝の樞區なり北緯四十二度四十分東經百二十三度七分に位置し西北に法庫山あり以東斷續丘陵となり遼河江岸に達す皆山骨を露呈す其東北にある者特に奇峯怪石に富む此地は科爾沁、扎賚特、杜爾伯特、郭爾羅斯、の四部十旗の貢道に當り又錦州以西の伯都訥に往來する者又智道を此に執る故に峡谷瘠地の間に在るに關せず商業の盛なる所以なり特に冬期に奉天附近より狗且路を茲に取る是伯都訥に達する一直線路あればなり然も近數年は通

江子に商權を侵害さるゝものゝ如し毛皮、烟草等此地石名の産物なりと人口二萬内外ならん

法庫門より新民屯及遼陽

法庫門より新民屯に至るの道路は内蒙古四盟旗中の哲里木盟則ち科爾沁六旗、札賚特一旗杜爾伯特一旗郭爾羅斯二旗の貢道に當り且以上十旗の牛馬羊豚皮毛乾酪齊々哈爾よりする毛皮烟管砂金嫩江岸よりする乾魚皆法庫門を經過し新民屯に至る綿絲、石油、洋傘、玻璃器及雜貨は新民屯より法庫門を經過し蒙古及齊々哈爾の各地に散す是實に冬期此の道路の繁盛を致す所以なり然も是を東遼河の大路に比すれば數藝を輸せざるを得ざるなり

法庫門より新民屯に至る一百六十清里と稱す險路峻坂なしと雖も大半は丘陵なり又大部落なしと雖も村落相連り雞犬相聞て又荒蕪の地なし四臺子五臺子共に百餘戸の村落なり右方に一千尺内外の山を望む是法庫山と同脈なる者丁家房登什舖子を過ぎ石廟に至れば漸く平原となる一小沼澤あり東方十里許に遼濱塔を望む建築稍古きか如し

高さ七八十尺大公主屯人家僅に五六十戸なるも路中唯一の小市街をなす舊門平安堡等を過く漸く沼澤となる楊柳木河を渡る廣袤五百餘歩殆ど沼澤の如し是前日大降雨の爲溢れしなり水流の廣三四十歩に過ざるなり河を渡り十里にして則新民屯なり山海關より奉天に至る者は新民屯を西より東に縦貫し法庫門より遼陽に至る者は新民屯を北より南に横斷す

新民廳より遼陽に至る百八十清里と稱す政事上に商業上に殆ど些の關係あるなし故に其道路も一定の道路あるに非ず徒歩僅に達するを得るのみ車馬は全く迂回せざるを得ず然も遼河渾河の間沼澤甚多く行歩困難なり

新民屯より南し遼河河岸に至る二十清里後寬泡子と稱す則河岸の碼頭なり小舟の來り泊する者一千餘隻豆、豆餅、大小麥を積載して營口に下る者營口より鹽及綿絲、洋火石油、雜貨等を搭載し流を溯る者故に新民屯埠頭間を往來する車馬絡繹絶せず埠頭岸上も亦肩摩殺戮一大市場を現するも皆な假屋を構ひ未だ市街を開くに至らず更に眼を江上に轉すれば江を下る者江を溯る者殆ど江を抛ふの光景を呈す江を涉り十五清里を

大民屯となす

大民屯は北緯四十一度三十八分東經百二十二度四十九分遼河の東大半野の中に位置す市街の規模大ならざるも街衢繁盛なり人口約三千五六百内外ならん以南沼澤甚多し砂池窩棚、五家屯、砂河子等の小村落を過ぎ一小河を渡る又前砂河子車家堡、狼洞山高花舖三臺子、章義站、等を経過す沼澤堆砂多し渾河を渡る小舟の上下する者二三十隻を見る中安堡は路中の大邑なり狼洞勾を経過し新河口に至る一河ある甚た小然も小舟此地に溯る是則太子河の一小支流なり更に二十清里にして太子河を渡る小舟の上下するもの十餘隻を見る河の南北沿岸の土尤も沃壤なり河を渡り十五清里にして遼陽城の北門に入る

山海關より奉天

今を距る二千餘年前秦始皇萬里の長城を築く東臨榆より起るとは則今の山海關是なり形勝雄大天下の重關愛親覺羅氏の勇武を以てして明末の積弱に對するも遂に山海關を超る能さりしなり兵器の進歩時運の推移海に鐵艦あり陸に鐵路あり且怠夫守らす化し

て豺と狼となるの嘆あらしむる者は實に今日の山海關是なり

山海關より奉天に至る八百餘清里中七百餘清里に散在する前所、前屯衛、中後所、沙河所、後所、寧遠、松山、杏山、錦州、廣寧、巨流河城等明朝が極力を傾注して滿清を防禦せし苦心經營の蹟今猶見るに足る者あり特に寧遠錦州の一帶は松山脈海に迫り大凌河以て其衝に當るに足る以上の諸城は山海關と腹背相護し天下の重關たる所になり以上の如く松山脈海に迫り丘陵起伏し山骨露出し河川も亦甚小にして流砂の如きもの比々是なり中後所人家百戸内外にして小城あり當時山海關鐵道最東端の停車場なりし

寧遠は北緯四十四度三十五分東經百二十度四十五分松山脈の南に位置し西山海關に至る一百清里東百十清里にして錦州に達すへし松山は北二十清里に望むべく勃海は五六清里に下瞰すへし城内人家僅三四百戸に過す實に寂寥を極むり東は高橋連山塔山等あるも寒村のみ且丘陵起伏以西と異なるなし

錦州府は北緯四十一度〇五分東經百二十一度〇八分小凌河の東十五清里に位置し奉天

山海關間の第一の大都會なり大賈巨商甚多く百貨輻湊人口約七萬餘東四十清里に大凌河あり水量多からさるも其廣袤は甚大四百歩以上聞く降雨の期は道路通せずと以東又漸く小丘陵となる十三山閭陽等は路中の大邑共に人家二百戸以上廣寧は其南十五清里の地を經過し全く道路と相關せず中安堡小黒山亦小都會人家二百戸以上の大邑なり以東漸く遼河平原となる然も白旗堡の東西砂漠に類する所多し

新民廳は北緯四十一度四十分東經百二十二度四十五分遼河々岸の一大商業地なり西錦州に至る三百七十清里東奉天に達する一百二十清里北法庫門を距る百六十清里巨商大賈多く百貨輻湊其繁盛錦州に及ばすと雖も其規模の大反て錦州の上に在らん是此地の豊饒なるのみならず法庫門より北内蒙古の地に貨物の集散あるか爲なり南二十里遼河河岸に碼頭あり船舶の泊する者一千隻以上に及ぶ是皆營口の間を往來するもの其盛なる類推すへきなり人口約三萬以上ならん以東二十清里にして巨流河城に至る殆ど是沼澤なり昔者滿清の盛時に在て山海關より奉天に至る三十歩以上五六十以下の道路を造りしなり往々にして其遺形を存する者あり沼澤中又稍其形あるか如し然れども全く

行く能はず馬蹠く迂回す巨流河城は昔者明朝か滿清廷を防ぎし者遊子をして徒に滄海の嘆を深からしむ

遼河以東の道路は清廷盛時の遺物を止め其廣袤三十餘歩兩側に小溝を穿ち外側更に小堤を築き植るに柳樹を以てす整々亂れず其遺風を見るに足る

奉天府は土人之を潘陽と稱す實に明潘陽城なればなり北緯四十一度五十分東經百二十三度三十五分位置し西に遼河を帯ひ東北に天柱隆業の諸山あり又是形勝雄大の都會なり始め清の太祖は興京より遼陽の東に城き茲に遷る後又都を此地に遷す太宗を歴て世祖に至り都を燕京に遷せしなり故に其城規模甚大ならざるも九百四五十歩の方形にして四方各二門あり城内は井形を爲し宮殿其中央に在り五部衙門は其左右に在り將軍衙門は其前に在り更に外郭あり長さ各十清里許東門外に鑄銀局あり東三省中器械力を用ふる者吉林の器械局鑄銀局と此の局とを合せ唯々三所あるのみ此府の人口約三十萬なりとす

奉天より吉林

奉天吉林間七百清里は固是れ官道にして東は由て以て寧古塔に至るへく北は以て齊々哈爾を経て愛琿に達すへし其道路は殆ど皆長白山の西北支脈なる吉林連山山脈の腰を廻る故に高山峻坂なしと雖とも平原沃野あるなし道路の規模と云ひ商客往來の多寡と云ひ客店の大小と云ひ之を通江子及昌圖より長春に達する道路に比すれば殆ど同日に語るへからす一は沃野の開発人口の稠密貨物の運輸等自然の必要に應し現出せし者一は則兵略上政事上止を得ずして開鑿せし者衰へざるを得んや

奉天北郭門外十清里より漸く山麓或は丘陵となり七十清里にして鐵路驛あり此地は石炭を産し路傍に露出せり質の良否と量の多少とは知るへからざるも露出面積の多きを以て推せば其量多かるへし幾多の丘陵と小溪流とを經過し六十里にして鐵嶺城となす鐵嶺は北緯四十二度二十五分東經百二十三度五十五分遼河の左岸に位置し法庫山山脈小塔子より丘陵となり其西岸に迫り吉林連山城東に峙つ其相距る僅に五六清里のみ鐵嶺は實に奉天の咽喉なるかな而して古來遼河の水運は實に此地を以て其北端となす故に其商業は甚繁盛に大賈甚多く貨物の集散甚盛なりし也然るに近十有年來通江子の埠

頭開かれ貨物集散の大半は茲に於てし全く其繁榮を奪はる城の人口約二萬七八千か
鐵嶺の北二十五清里に英守屯あり是所謂等色屯ならん等色屯は康熙二十二年三月聖祖
の上諭に自巨流河溯流連至等色屯隨用蒙古之力陸路連至伊屯門云々等色屯英守屯
音相近し滿洲に在りて音相近き者は文字の如何は顧みる所に非ず伊屯門或は伊通門と
書す又窩集を窩几、烏稽、窩稽に作るは皆同音なればなり且つ其位置に於て必ず此地な
るを信するなり是より丘陵を超へ九十清里にして開原となす

開原は北緯四十二度四十分東經百二十四度八分哈達河の北に位置す此地は方三四十清
里の平野にして北丘陵を以て昌圖と境し南に德爾肯哈達高く峙つ城内に古塔あり唐朝
の建築なりと云ふ人口約三萬四五千か此地は奉天吉林の大路を隔つること十五清里
鐵嶺より昌圖に通する路上にあり東二十五清里に威遠堡門あり則所謂丁字形邊牆の下
方第一門吉林に通する要衝なり門を出東北行し開原河溪谷の左岸を溯る兩山の高さ三
四百尺若くは五六百尺のみ葉赫英額の二城は共に一部の酋長なりしも共に清の太祖
の滅す所となる英額站の東に一丘あり低して甚大是則分水嶺なり以西南の水は開原河

となり以東北の水は赫爾蘇河となる則東遼河の源なり東して赫爾蘇河を渡る河床甚廣
く水量甚小赫爾蘇站は人家五六十戸の小部落也土人は克爾蘇と云ふ東に小孤山あり高
さ七八十尺突兀たる一岩石頂に一廟あり遠望すへし又東に大孤山あり高三百五六十尺
内外又是突兀たる一山周圍十餘里頂に廟あり其東南麓を阿勒坦額墨勒站と云ふ(滿語
然も土人は此の官名
を知らず大孤山と云ふ)人家は九十戸開原伊通間の第一の部落なり二三の丘陵を超へて伊
通州に至る

伊通州は北緯四十三度十七分東經百二十五度三十七分伊通河上流の西岸に位置し人口
約七八千なるも北方の各都邑に比すれば大に遜色あり土人は云ふ北寬城子に至る一百
四十清里伊通門に至る九十清里西北赫爾蘇門に達する一百八十清里懷徳に至る又一百
九十清里なりと而して吉林に至る二百八十五清里開原を距る二百九十五清里殆ど其の
中央に在りと云ふへし東二十五清里に伊巴坦站あり土人は驛馬站と稱す人家五六十戸
一小驛なり六十五里にして蘇幹延站あり双陽と稱す人家六七十戸の一驛なり驛の東端
に双陽河あり橋を架す以東丘陵甚多し土人長嶺と稱す長嶺を下れば伊勒們河の平原と

なる伊勒們河は遼河以東に於て水量の尤も多きもの分兒河に同名の一部落あり河の東西に跨る人家二百戸内外伊通吉林間第一の大邑なり大水河は僅に三十戸内外の小部落なるも長春及伊通門に至るの分岐點なるを以て酒樓の設けあり稍客心を慰するに足る東に頭道嶺あり是實に上奉天吉林間唯一の山嶺とも稱すべきなり

吉林城は土人之を船廠と云ふ北緯四十三度四十八分東經百二十六度四十九分松花江の左岸に位置し南遙に長白山支峯を望み小白山其東に在り蜿蜒相連り府の東南を圍み西に馬烟嶺あり頭道嶺之に連り其北を擁し松花江は南よりし府の西南に於て一曲し府の南を擁し東流して又一曲北流す北松花江流を下れば伯都訥を経て齊々哈爾墨爾根に至るべく又伯都訥より哈爾賓呼蘭三姓に達すへし東して老爺嶺長官材嶺の險を超へ寧古塔琿春に到る城は南江に面し北に山を背ひ不等邊の三角形となし西門を迎恩と云ひ東を東萊朝陽となし北を北極と云ふ其他を巴爾虎、致和、德勝、福綏の四門となす江岸に壁を設けす其他は三面瓦磚の壁を有せり城内街衢縱橫巨商大賈甚多く其富奉天の上は在り實に滿洲の第一位を占む木材甚豊富是長白山より流下する者江岸の第一街は巨

材を駢列して道路を造る又家屋の構造も規模甚大是皆木材に豊富なるを證するに足る又西門外に所謂船廠あり兵船の建造と修理とに任せり陸上に現存せるもの二十隻許是實に順治十八年の建設にかゝる又江中に泊する船舶は其數五十餘隻東門外に鑄銀局あり江を隔て、南岸に器械局あり紙幣は永衡官帖局に依りて發行せられ婦人の頭飾に用ふる金銀の器具は各銀店皆な之に任し馬鞍等の具甚多く北部の官吏又は蒙古人の必ず携帯する小刀及大刀弓矢及び南來の雜貨等備はらさるなく洋傘、洋燈、卷烟草、玻璃器等は盡く是日本品なり木城は實に滿洲の大市場なり人口約二十萬なりとす

奉天より興京及吉林

興京は古の赫圖阿喇にして清の太祖勃興の地なり歴史上の遺跡の以て萬里遠征の孤客を慰むるに足るものあらんとは始より胸中に蟠りし所なり然も以東吉林に至る歴史に依るも地理に見るも邈として物の尋ねべきなし然も好奇心は物々として禁する能はず遂に征途に上り所謂赫圖阿喇の錯寔なるに驚き旺清門を出て吉林土們の上流に達し豺狼虎豹の巢窟ならんと思ひし地は反て新殖民地の新都會に再び一驚を喫せしなり

奉天の東二十清里に天柱山あり南渾河に臨み興京に至る要衝の地を扼す上に老松鬱々蒼々たり是則太宗の福陵なり其規模の壯大なるは親しく見る能はざるも四邊の形勝は自然に其雄大を推想せしむ以東に清朝の盛時築造せし大道路の遺形猶存し廣袤約三四十歩兩側植るに柳樹を以てす而し道路は今や全く沼澤と化し近づくへからず撫順城は明將が屢清太祖と争ひし地なり是より直ちに東すれば英額門より海龍城に至るへし東南すれば則興京に達すへし渾河を渉り六十清里にして薩爾濟城に至る是則清太祖が明の大軍と會戦せし古戰場にして明清の興廢は此の一戦に決まると云ふべきなり以南漸く峡谷となる蒼子普路に至り又渾河を渡れば古樓子と爲す是所謂古の古勒ならん古樓古勒音相近し後世の訛轉たる殆ど疑を納ざるなり且地理上の關係より古勒たる明なり古戰場なり東に馬爾墩あり是れ太祖か尼堪外蘭に克ちし處東に一嶺あり嶺上に一碑あり二滿字を刻するも讀む能はず木奇和穆は渾河河岸稍々大なる部落なり更に丘陵を超へ河岸に一宮殿を望む之れを土人に問て其永陵行宮なるを知る東に啓運山あり鬱々

る老松巨木天柱山と異なるなし之を永陵と爲す則ち清の太祖の陵寢なり陵前に東西陵街あり相距る二清里許東陵街は人家一百五六十戸奉天新兵堡間の大部落にして錢鋪布帛鋪雜貨鋪藥鋪器備はる特に木材を産し之を奉天に輸送す西陵街は其半に及はず興京は北緯四十一度四十三分東經百二十四度五十分渾河の上流張陰河東よりし蘇子河南よりし二河相會する東南岸に位置し古の赫圖阿喇の地にして土人は之れを老城と稱す則清の太祖の舊都にして北に啓運山あり南に呼蘭哈達あり四方皆峻嶺崇嶽相峙ち別に一乾坤を開くの感あり廣壯雄據の地と云ふ可からざるも又一方の鎮たるを失はず城は南方丘陵に依り西北河に臨み老樹鬱々遠く之を望めは古廟名勝の區と思はしむ城壁は東南丘陵に連るの處僅に溝濠を穿ち隄を築くのみ西北方は岸崖を爲す西奉天に通する二百五十清里東新兵堡に至る四十清里なりとす新兵堡は北緯四十一度四十二分東經百二十五度〇五分渾河の上流旺清邊門内山中の大市場なり東すれば通化に至るへく南懷仁に達すへし又東北すれば朝陽鎮を歴て吉林に到るべし此地木材を産する甚多く皆渾河を下り奉天に輸送す人口約五千内外ならん

以東漸く小峡谷の間に入る前城後城等の小村落を經過し龍家口に至る斷崖絶壁老松の
 其間に屹する溪流の潺々たる故山に彷彿たるの處孤客をして覺えず快と叫はしむ誠に
 故なきに非ざるなり一山を超れば則旺清なり嶺以西の水は渾河となり以東の水は旺清
 河となり佟佳江に會し遂に鴨綠江に注ぐ者なり前後荒蕪の地甚多し河石嘴等の小部落
 を過ぎ一山を超ゆ以東の水は則吉林土們の上流なり此地は所謂柳條邊境のあるべき處
 なるも其遺物殆ど尋ねへからず然も土人に問へば以東は邊外なりと云ふ以東漸く平原
 となる舞鳳樓の東二十清里に一千尺許の山あり喬木鬱々數十里に連る是則吉林哈達
 ならん想楊店、魚亮子、野猪溝、碗口溝、清溝子等の小部落を過ぎ途上往々石炭を使
 用するを見る之を問へは通化の北に産すと云ふ其質良好ならず殆ど粉炭に類す又路傍
 各處に石油の噴出に類する者を見る英國某牧師の調査する處に據れば此地實に石油を
 産すと柳河鎮は東西二堡に分ち人家一百二十三十戸各種の店舗裝備はり山間の大邑なり
 且靖邊右營一營茲に駐在せり米宣教師も布教に従事せり中水舖を經海龍城に至る此に
 至て益大平原となる

朝陽鎮は北緯四十二度四十五分東經百二十六度十分吉林土們の北岸に位置し東北吉林
 に達する三百六十餘清里西南興京に至る三百八十餘清里松花江上流の大市場なり且吉
 林に達する水路舟楫の便あり貨物の集散夏期に在りては皆水路に頼る冬期は則車馬を
 用ふると北部の大平原と一般なり小舟の河上に泊する者十二三隻市街は整然たる街衢
 に非ざるも延長殆んど七八清里に涉り城壁の設けなし巨商大賈甚多く穀類木材獸皮は
 其大宗なり人口約一萬内外此地は又馬賊の巢窟帽兒山に近く屢其厄に遇ふと云ふ當時
 靖邊軍二營駐在せり(明治三十一年五月)此より吉林に至る二路あり一は吉林土們河岸の地を行く
 者にして山路少きも沼澤多く且つ迂回せざるを得ず一は山路なるも近し則山路を執る
 以北漸く丘陵となり且つ部落甚少し七十清里にして磨盤山あり人口四五千を有し又山
 間の小都會なり且新に煉瓦を以て城壁を築く伊通の分州なり磨盤山分防州同なるもの
 茲に駐在し伊通知州の命を奉し民治を管せり此地方南北に未墾の土多く未墾の土は則
 多くは沼澤なるを以て行歩尤も困難なり北四十五里に老爺嶺あり平地上僅に三百尺内
 外なるも東西の山嶺甚高く二千尺内外なる峯巒ありて此一帶皆窩集なり地理誌及地圖

に由て案すれば老爺嶺は則庫勒嶺にして一帯の窩集は則庫勒納窩集なるへし且老爺嶺は分水界をなし以南の水は吉林土們に會するか如く以北の水は双陽河か或は依兒們河に注ぐ者の如し嶺を下り二十清里にして松嘴子あり伐木の税を徴する小衙門あり老爺嶺より西北行し六十清里にして烟筒山あり人口三千内外磨盤山に次ぐの大邑なり此地一河あり北流す依兒們の上流に非ざるか河を渡り折て東行す大小流石河、花比河子等の小部落を過ぎ一小山を超へ双河鎮四五十戸の大村落なり二三の小山嶺と五六の村落を經過し温得狼河を渡り吉林城に入る

奉天より營口

奉天より營口に通する二路あり一は遼陽海城を歴て直ちに營口に至る者三百五十清里と稱す一は遼陽の南砂河鎮より牛莊城を歴て營口に達する者三百四十清里と稱す行旅多く後者を撰ぶ者の如し然るに此二道路は時期に於て適不適あり特に冬期の車行は道路坦々にして且近なる者を執るは自然の數なり夏期に在りては路遠くして且丘陵あるも原野の泥濘路に比すれば猶可なる者あり故に夏期の前者を撰ぶ所以なり

奉天城南十清里に渾河あり古來稱して小遼河と稱する者則ち是なり夏期降雨の際は小舟此に溯る渾河堡、白塔堡、沙河堡、虎皮河子を過ぎ七十清里にして烟臺と稱する一部落あり太子河と渾河との中間に位し地勢稍高燥なり露國か撰て以て一都會建設の地となす南五十清里を遼陽州となす

遼陽は北緯四十一度二十分東經百二十三度十五分太子河の南岸に位置し東南に千山山脈あり西北は沃野茫茫且小舟は太子河を溯り北門外に至る其城は規模壯大と云ふに非ざるも海城蓋平に比すれば大周圍約十五六清里巨商大賈の門前鳥居の如き招牌及壯大なる標柱等は始めて滿洲内地に入る者をして一驚を喫せしむ人口約二萬五千内外ならん城南に一高塔あり唐宋の建築ならんか沙河堡八卦溝を経て六十五清里にして駁山堡に至る乙未日清役の古戰場にして城壁となく民家となく殆ど皆崩壊し今猶慘澹の光景止む遼陽以北の平原なるに似す以南は多く丘陵特に駁山堡以南は殆ど全く丘陵となる甘泉堡頭河堡を過ぎ五十五清里にして海城に至る

海城は北緯四十度五十二分東經百二十二度四十分海城河の東北に位置す千山山脈東南

に峙ち西北は田野沃壤茫々として山を見ず街衢縱横商業繁盛なり人口一萬四五千此より營口に至る一百十清里或は大石橋を經る者あり或は缸瓦寨或は高刊よりする者唯時期の如何と車馬と徒歩の差あるのみ

遼陽より牛莊に至るの道路は砂家鎮より分岐し蔣家屯耿庄子と城子を歴て一百三十清里にして牛莊城に至る

牛莊城は北緯四十一度三分東經百二十二度十二分遼河の東岸に位置し南營口に至る九十清里東海城に通する四十清里となす海城河其中央を貫き沃野茫々たる中央に在り人口八千内外なり現在の營口を呼て牛莊と稱する者は開港の當時遼河の水陸牛莊に溯ることを得しならん後遼河の下流淤塞し碼頭を營口に開くも牛莊の名は遂に外交文書上に印し今日其名を止むる所以ならん藍旗堡高刊等を歴て營口となす

營口は北緯四十度三十八分東經百二十二度十三分遼河の左岸に位置し世に所謂牛莊港なる者則ち是れなり

營口貿易

營口は滿洲東三省六萬三千餘方里二千萬の人口を有する唯一の開港場なりしなり今や大連灣の開港ありと雖とも營口の貿易か遼河貿易なるを知らは後來營口の貿易か決して大連灣に吸収さるゝ憂ひはなかるべきなり唯營口の不便とする處は冬季の結氷と河口の漸く淤塞するとに在るも浚濬工事を加ふれば決して船舶出入の不便を感せざるべきなり特に遼河の水運は決して廢する能ざるなり今遼河の上流通江子より營口に至る八百餘里の間に往來する大小船隻の數を聞くに七千五六百隻なりと言ふ余も又河岸に泊するものを數へ三千餘隻を得たり而して通江子に於て一千餘隻を見鐵嶺に於て七八百隻を見新民に於ては一千餘隻を見たり而し猶河上を往來するもの殆ど江を掩ふの有様なれば八百餘清里の間に上下するものを數ふれば優に七八千隻以上に上るべきを信するなり

今左に滿洲其物か吞吐し集散する貨物の量及船舶の數を示さん然も滿洲の民は猶未だ開墾の時代に在りて僅に日常衣食の外他に求むる所なく美術巧藝彼等の殆ど顧さる所なり

重要輸入品 明治三十一年中

被單布	六五〇、九〇二 <small>量</small>	二、二三四、三五三
雲齋	三七一、二六一	一、二八〇、二七二
砂糖	一二一、〇八一	五三三、〇七九
鐵道枕木及材料		五一五、二八五
金巾	一四四、七三八	四〇九、九五五
棉入吳呂	六二、八三五	二八九、四八一
石油	一、八二二、〇〇〇 <small>瓦</small>	二三九、一二〇
古鐵	一三八、二八〇 <small>擔</small>	二一四、一三九
鐵類	七五、六一一	一五五、七六一
棉絲	英 八七六 <small>量</small>	三、二二五、三九一 <small>兩</small>
印度	一三七、三七三	
日	一四、三四三	
棉絲	一九、五六九 <small>兩</small>	
二、八〇七、五七三		
六五〇、九〇二		

昆布	八六、三三四	一一三、七六七
生棉	八一、四七一	一、〇四四、九八四
南京布	一三、五五〇	六七七、四九七
綢緞	一、〇六六	五六五、三七六
綠茶	五、五二四	二七六、一八九
棉絲(上海)	一〇、四七六	二〇九、四二〇
烟草	八、〇八五	一七〇、四八〇

同輸出品

豆餅	三、六九五、八二一 <small>擔</small>	五、八二八、七一五
黃豆	二、三四三、七四二	四、六八七、八二七
青豆	一、二〇一、三七二	二、四〇二、七四七
豆油	一〇八、三三三	六四八、三三二
白小豆	二四八、三九三	五四八、二四三

黑豆	三〇九、九九一	百三十八
全 (無稅品)	三九、五四八	五二四、二八四
人參	一、九二三	六五、〇六二
綠豆	七四、五〇三	一八二、二六六
藥種		一七八、五八一
毛皮類	二七八、七〇一 <small>枚</small>	一四九、二〇八
		一三五、五六一

最近三年間の輸出入

	輸 入	輸 出	計
明治二十九年	一一、四九四、〇五九	一一、二七七、二八七	二二、七七一、三四六
全 三十年	一二、六一二、七八一	一三、八〇八、六一二	二六、三五八、六七一
全 三十一年	一五、〇四三、一二七	一七、四四八、二八〇	三二、四四一、三二五
全 三十二年			四八、三五七、六二三

明治三十一年船舶出入表

國名	噸	隻
英國 汽船	三〇九、六一二	三二二
英國 帆船	一三、〇四六	二四
日本 汽船	二〇一、九一二	二四四
支那 全	一三四、〇二四	一七〇
獨逸 汽船	八六、〇一二	一〇四
獨逸 帆船	一、七八八	四
瑞諾 全	六四、九四四	八六
露國 全	三、四五二	八
米國 帆船	四、九九四	八
和蘭 汽船	四、九三二	六
丁抹 全	二、〇三六	四
佛國 全	一、〇一八	二
計	八二七、七七〇	九七二

遼河の船舶

新民
 懷德 土名八家子
 奉化 土名買賣街
 通城子
 伊通州
 理表
 愛理 土名安河
 黑爾根
 二姓
 賓州
 北園林子
 五常
 双城
 雙城

○△ △ ○△ ○△ ○△ □△ □ □○ □○
 四三五 一五〇 四八〇 一〇八 五七〇 一〇〇〇 二〇〇〇 一五七〇 二五八〇 三〇〇〇 二七〇〇 三五〇〇
 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北
 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一
 一四二 一四三 一四四 一四五 一四六 一四七 一四八 一四九 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五四
 一五五 一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇 一六一 一六二 一六三 一六四 一六五 一六六 一六七

遼陽
 海城
 蓋平 土名蓋州
 昌圖 土名榆城子
 開原
 鐵嶺
 法庫門
 農安
 伯都訥 土名新城
 呼蘭
 察古塔
 拉林

○ □○△ □○△ □○△ ○△ ○△ ○△ ○△ ○△ △ ○△ ○△
 七 二二二 三一五 三三〇 二二〇 一五〇 二〇〇 三〇〇 四〇〇 一五〇 一五〇 一五〇
 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北 東北
 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一 一一
 一四二 一四三 一四四 一四五 一四六 一四七 一四八 一四九 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五四
 一五五 一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇 一六一 一六二 一六三 一六四 一六五 一六六 一六七

鳳凰城	不明	不明	東北	四〇、二五
岫巖	不明	不明	東北	四〇、〇〇
金州	不明	不明	東北	三九、〇七
復州	不明	不明	東北	二一、四七
義州	不明	不明	東北	四一、三五
寧遠	△ 四、〇〇〇	不明	東北	四九、三五
廣寧	不明	不明	東北	二一、一八
敦化	不明	不明	東北	二〇、四五
康平	○ 四、〇〇〇	大約	東北	四三、四〇
布特哈	不明	大約	東北	二八、二五
河爾賓	不明	大約	東北	四三、三一
海拉爾	不明	大約	東北	二八、二五
大連灣	不明	大約	東北	四三、三一
百萬里の設計	不明	大約	東北	二七、〇〇

人情風俗一般

世人皆な意らく滿洲は愛親覺羅氏發祥の地根本のある處滿洲語は茲に於て聞くへく滿洲の古俗は茲に於て見るべしと何を聞らんや滿洲の古俗は全く地を拂て去り滿洲の言語は三省に於して隻影を認むる能はざるなり余昨三十二年奉天より興京に入る道に福陵永陵あり則清太祖太宗の陵寢なり此地方は滿人の尤も多く散在する處なり興京の如きは滿人のみ居住せり然も一々滿語を話するを聞ざるなり然れども猶思らく吉林に於て寧古塔に於て三姓に於て齊々哈爾に於て滿語を使用せんと豈聞らんや今年復た三省の野に於して其然ざるを知る或西人は評して曰く漢人は滿人を擒にせりと實に適評と云ふへし髡髮と窄袖とは滿化せしめたり己れ自身は則早く業に既に擒となれり嗚呼是止を得ざるの勢ならんか何となれば東三省の人口は大約一千二百萬と稱するも余の觀る處を以てすれば一千五六百萬以上二千萬に達すへし而て是を小別すれば滿人八十萬にして自餘の東干、索倫、瓦爾喀、鄂魯春、瑪涅克爾、達瑚爾、費牙喀、滿洲を合して二十萬に過ぎす他の一千八九百萬は則漢人なり則ち二十を以て一に對するの比例なり特に

漢人は尤も同化力に強き人種なり強にして且多し滿人如何に勇なるも一を以て二十に敵す知らず識らすの間に同化せらるは尤も見易きの理ならずや
 愛親覺羅氏の國を建て中原を平定し内外蒙古を合せ伊犁を征し喀什喀爾を服し西藏を服する所以の者は太祖太宗及康熙乾隆の宏謀雄略に賴ると雖も滿人の驍勇不撓なるに類るに非ずんば焉る此の大業を成就するを得んや而て其驍勇なる所以は楛矢石弩山野を跋渉し窩集(森林)に出入し猛獸と格闘し飛禽と馳驅し巖石を寢とし河水に浴せし數百年來素養の致す所ならずんば非す而して其驍勇不撓の風俗今日猶ほ現存するかと問はゞ殆んど杳として見るべからず然も全く見るべからざるに非ず弓矢なり石弩なり長槍なり皆其形を現存せり而して彼等は時世の變遷武器の進歩を知らず三百年前の長技今日も猶ほ唯一の長技と思へるなり其長技猶可なり昔日其長を事實に練磨しつゝあるなり今日は則ち之を僅に席上に試みつゝあるなり其進歩を欲するも豈得んや太祖太宗康熙乾隆は嘗て之を昔日に憂ふ故に窩集(森林)の伐採を禁し彼等の試金石となせしなり彼等の練武場となせしなり後世子孫其意を知らず徒らに高加索の鐵蹄に委す哀むべ

ななり

婦女子に至りては少少の俸祿美田に安んじ昔日茅屋膝を納るれば則ち足る者今は高堂に起臥し苛且鹿皮僅に躰を被ふ者今は則錦繡昔者風霜に沐し雨露に浴せし者今は則ち白粉を敷し燕脂を凝し昔者山花と挿みし者今は金弁銀鈿と變し溪水を擔ひし肩反て他の肩に坐す柔綢ならざらんと欲するも豈夫得んや

滿清朝廷は數十萬の牛民を戮し數十年の歲月を要し其鬚髮を強ふるに關せず婦女子の風俗は一も關せずさりしなり然るに東三省に於て漢婦女子の多く稍滿化せるを見るなり彼等婦女子固より自ら好て縮足を爲す者ならんや唯四圍の情勢止を得ざるなり而して其東三省に移住せる者は多く山東河南及直隸の窮途に啼くの民なり貧困洗ふか如きの民なり其東に移らんとする少許の財を賣り破屋を販て以て路費を辨する者なり彼等の唯一の財産は山東車あるのみ(山東車は一輪車にして其左右に家具及婦女を坐せしめ後より之を推す)海を超へて遙々東に移るの狀喪家の狗の如く眞に憐むべきなり婦は夫を呼ひ子は親を逐ふ夫は後より推し弟は前より挽く數千百里の地日々車に坐するを得ず時に徒歩せり彼等忽ち不便を感ずるは彼

等の縮足なり數千百里の地踏々踏々既に其地に到れば四面の婦女又縮足する者甚多し故に移住後の少女は漸く縮足の風を絶す已に縮足を廢す頭髮衣服又是と相添す故に又頭髮衣服も亦稍滿洲に擬せり以上は漢婦女子をして滿化せせしめたり嗚呼髣髴と滿服とは存せり滿語と滿洲の驍勇不撓の俗とは見るべからず滿人は存せり滿人國を建る所以の精神は則求むべからず其山河は依然たり其主人は遂に何人ぞ噫

家屋の構造は南面して堂あり中庭を設く左右を東廂西廡となし室を設け前面を應接所となし其外に衡門を設く其外圍は煉瓦を積み棟梁も柱樑とは木材を用ふ室中に炕あり炕の構造は地上より一尺五六寸を高くし石を以て之を壘み其中を空にし其側に竈を設け朝夕炊飯熟菜の火氣炕下空洞の中に入り他の一方に烟突を設く而して炕は朝夕燒火の爲に熱し信宿を膠て冷ならず頼て以て寒を防ぐ貴賤貧富あり家屋の模様必しも一定ならざるも炕を設くるは皆賤貧富を通して皆同じく前面に門あり車馬を中庭に自由に出入せしむるは三省を通して一般の風習なり滿洲に在て大邸宅を有する者を燒鍋(燒鍋は燒酒屋なり)となす小なるも方七八十間以上大なるは方三百間許なる者あり斯る大酒屋は取て以

て地名となす譬へは新房燒鍋の如し次を窩棚となす窩棚とは殖民會社か開墾會社の如きものにて其の異なる点は一個人にて未墾の地に大家屋を構造し勞働者を招來して開墾に従事す後來一個の村落を成すも李家窩棚林家窩棚等の名は存せり客店の如きも大規模の家屋を有し大なる中庭を有し二三十輛より四五十輛の大車を納るゝに足る滿洲の車輛は一車に駕するに寡くも七八頭の牛馬騾驢を混用し多きは十二三頭に到る者あり其他各處に富豪の邸宅を見るに方二三百歩なる者甚多く且此等の大家屋は皆自衛の道を講し之を圍ひに土壁を以てす高さ七八尺若くは一丈二三尺各隅に樓あり門上に樓あり女牆を設く是皆馬賊の襲來に備ふるなり又貧家の構造は煉瓦に代ふるに泥土を固結して日光に曝し之を用ふる煉瓦と一般なり屋を蓋ふに瓦を以てせずして泥土を以てする者あり其形鐵道客車の如く其屋傾斜少なし以上の如く滿洲の家屋は寒を防ぐに專にして夏時殆ど勝ゆべからず暑氣は外よりし熱氣は坐下よりす加ふるに臭蟲甚多く其毒を感ずる者は殆ど勝ゆべからず又滿洲の客店には三種あり大客店小客店則是なり其大客店は上述するか如く規模甚大にして我國に於ては決して見るべからず而して店中

全く一婦人なし此の風俗は南方も亦多くは同一なり然とも盡く婦人なしとも限るなり
 満洲に於て此大店なる者は多く其近傍都會の巨商大賈の所有にして自己の貨物及他
 人の送達の便を計り又兼て一個の營利事業なり此大店には余等の乞食旅行者は全く宿
 泊するの資格なきなり而して此大店は夏季貨物運輸の閑なる時期は閉店を例とせり其
 小店は家屋の規模必ずしも一定ならず家族も同居する者あり然らざる者あり

滿洲都會の地則奉天、吉林、長春、阿勒楚喀、呼蘭、錦州、遼陽其他の大市街巨商大
 賈の相稱比する處日本の鳥居に似たる招牌屹立せる大標柱畫閣紅檐其の規模の大なる
 南方諸省も遙に及ばざる處人の耳目を驚すに足る

滿洲の常食は地方に由りて稍差違あり奉天以南は尤も多く高粱を食す高粱は我國に稱
 する處の黍なり其大さ小麥の半にして圓く其色紅し其竿は一丈二三尺に達す故に高粱
 の田畝を往來するは恰も林中を往來すると一般なり之を食するの方は鍋中に投して之
 を煮其熟するを待て箸もて其汁を去り更に甑中に盛り之を蒸す其硬さと生米を噛むか
 如く味の何に在るを知るへからず唯に口腹を充すのみ奉天以東の常食は粟を多しと云

す其形稻竿に似て丈三尺許に至り其穂は犬の尾の如く八九寸より一尺許に至る其色は
 黄にして其粒は甚小之を食するの法は黍と同じ此他玉蜀黍の粥あり其副食物は殆ど盡
 く豆腐と云ふへし然れど鹽を和し食ふのみ其他に葱あり蒜あり百戸内外の大邑に至れ
 は酒樓あり温飽食ふへし包子(肉饅頭)食ふへし豚肉羊肉魚肉あり口腹を鳴し腸胃を驚か
 すに足る此間の愉快と喜悅とは其境遇を經過せざる者は殆ど談すへからざるなり

東三省を通するの食物を米、大小麥、高粱、粟、玉蜀黍、蕎麥、豆、等なりとす又副
 食物には豆腐、葱、蒜、韭、白菜、菠蓮草、豆類、瓜類、等なり又肉類には牛、羊、
 豚、雞、魚肉には鯉、鱈、鮒、鮓、黃魚(鱈)其他種々の魚類あり米は南方或は遼陽附
 近の陸稻を輸送する者にて至富者或は官吏に非されは決して食する能はず又都會の
 酒樓には多く準備しあり客の求に應ず又各都會地には節會等に僅々一合二合を購ひ粥
 を熱し食するは恰も我國の祝日に赤飯及餅あるか如し村落に在りては一生涯米を見る
 ことなくして死する者比し皆是なり是殆ど我國人の豫想の外にあらん麥も亦貴く滿洲
 の常食に非ず是露領に輸出するの結果なり是唯に麥のみならず牛馬の骨も年々歳々騰

奉天以南の高梁奉天以東の粟を常食とせる所以は薪材に大關係あるなり以南の高梁を種るは一方には食となし他方には薪となさんか爲めなり奉天以南山なきに非ず而して山盡く秃す以東は則然らず薪材の供給は則東するに従て益多きなり然り薪材の關係のみに非ず地質の關係も亦之あるなるへし

滿軍旗人は則我徳川氏の三河以來の譜代の旗本と同一なりしなり故に彼等旗人滿清廷の恩遇を受くることも厚く常職と厚祿とを得しなり其結果は彼等旗人をして知らず識らすの間奢侈に感染し柔弱に流れしめ家屋を大にし飲食を美にし衣服を華麗にし白粉を点し臙脂を搨すに至るは自然の順序なるへし

滿洲に現在住居する人民の衣服に三様あり(東千以下の諸族は除外例なり)滿洲女子の服裝南部諸省女子の衣服及び男子の衣服是なり上衣下衣の別あるは滿漢男女を問はず皆同一なり襪子(足及褲子)を穿ち更に套褲(つぽ)を穿つ以上を下衣となす此下衣も亦滿漢男女の區別あるなし(南方則長江一帶女子の套褲子形稍異なり)汗梯兒(襪)を穿ち膝に至るの褂子(着)を穿つは漢婦女の衣

なり襪衣の上に長褂子(長上著貴族なれば其丈長く全足趾を覆す其鞋も亦同一にし高きを好し)を穿ち馬褂

子(襪)或は坎肩兒を穿つは滿婦女子一般の服裝なり男子には固より滿漢の區別あるなし

し貴賤貧富あるのみ大襖を穿ち馬褂子を加ふるは一般士人の服裝なり農工及勞働者に

至りては短褂子を被むるのみ毡帽子(毛氈の山形の縁なき帽子なり往々に車夫等の戴けるを見る)は是又一般の常用する所

なり又一種の皮靴なる者あり一枚の皮を折曲け或は縮めて之を造る内に烏拉草(是は線

として中約一分長さ一尺三寸より二尺に至る我越後にては方言「く」或は「龍の毛」を充て、後穿つ是

と稱する者に似たり以て袋を造る山中及沼澤に多し果して同一物なるや否やを知らず)を充て、後穿つ是

寒を防ぎ一には塵埃を豫防せんか爲なり

滿洲車輛の制に二様あり(南部諸省の車は同一なり)一を客車となし他を貨車となす客車の穀十數本

あるは我國のものと同じきも其制甚た堅牢にして彈機なく軸は輪と共に廻轉せり車土

に穹廬形の小屋を構ひ前面に簾を垂れ窓をして其中に坐せしむ之に駕するに少くも二

馬を以てし多きは三四頭に至る貨車は其制殆ど大古の物と云はんか堅牢は則無比と云

ふべしと雖も實に單純を極めたり穀の形は宛も片假名の「サ」字形にして周圍大約を一

尺四五寸許の木材に二本の材を交叉し其外圍に輪を付し軸は輪と共に廻轉せり其搭載

力は十五六擔より五十擔に至る(一擔は十石六貫目餘)之に駕するに少くも七頭多きは十二頭の牛馬騾驢を混用し「オー」「ユエー」「ライ」等の五六語は彼牛馬をして斯くまで人語を解するかと驚かしむる程御者の命令に服従し御者をして鞭を用ひざらしむ
 猜疑心の旺盛なる支那二十二省中滿洲より甚しきはなし其途上相遇も猶且互に姓名及從來する處を問ふ況んや其外來の客に接するや各々人々皆警察權を持つるが如く姓名より何省何府縣從來する處如何なる用を帯ひて何の地に往く伴隨の有無前夜の宿泊する處頂より足に到るまで熟視し人相の如何等注意周到然れども其懸絶せる南部の諸省にして言語の盡く通せざる等は彼等をして反て安して其賊に非ざるを信せしむる者の如し特に信書を携ふるか或は信書を送致せし領收書を携帶する等は一層彼等に信を置く者の如し特に其讀書人なる事を知れば反て彼等の尊敬を受け呼て以て先生となす先生は則ち孔孟聖賢の道を學ぶ者焉を不正不良の事あらんや聖賢の道に於て彼等支那人は一毫の疑點も存せざるなり故に彼支那人を御するの法威以て之に臨み恩以て之を撫するは將に執るべきの順序なるべきも治者の胸中一點聖賢の餘意を存するに非ずんば

焉そ彼等支那人を長久に駕御するを得んや

斯の如く猜疑心の甚しき所以の者は滿洲一帶には馬賊紅鬍子及打棍子等諸種の盜賊徘徊するに由れるあり馬賊は山中に巢窟を有し(長白山の朝見山は其一なり又蒙古の四盟旗中にも有名の賊窟一雙成あり)隊伍をなし一村村落は大富豪を脅し或は官金を強奪し商隊を掠む聞く村落富豪皆一定の租税を馬賊に納て其掠奪を免ると商隊も亦一種の通過税を彼等馬賊に致すと生も亦其實例を見たり琿春寧古塔の間瑪爾湖窩集の老松嶺下に一孤屋あり一車其家に宿泊する者の如し余も亦宿泊せんと欲す御者の宿せざるを聞き余も亦稍其情を解し其車に便坐し去るに臨み彼客店の主人は棉花の必要を稱し自ら其少量を自己の物品を持ち去るかの如くせるも彼御夫は一言の不服を唱へざるのみならず其のなすかまゝに任せたり是則ち一種の通過税なりしなり後其賊窟なることを御者に聞く支那人の多くの争論は皆僅少なる一二文の利の爲に争ふ者なり故に通常の場合少量の棉花を雖も必ず手をたも觸るゝ能はざるなり

紅鬍子の語を譯すれば那語の赤髯なり此語の從來する處を研究すれば露人を指稱せる

物なり薩哈連則樺太の地は露國有罪者配流の地なり配流者則韃靼海峽を超へ烏蘇里の地に歸來するも一定の職業なく遂に滿洲馬賊の羣に投する者あり或は自ら其徒を集むる者あり遂に紅鬍子の名を來す所以なり以上の二盜は其組織大にして廣く余等膝栗毛流の乞食旅行者とは相關せざるなり更に一種の賊あり打棍子となす或は草中に伏し或は高粱田畝の間にあり以て膝栗毛流者の來るを待つ或は客に扮する者あり或は御者に擬する者あり新殖民地に無賴漢の多きは免れざるの數ならん故に其客店に在りては就眠の後戸を鎖し外より入る能はざるのみならず内より出る能はざるなり伴侶なき孤客を嫌惡するは則其結果なり

喫烟の風は滿洲の到る處に盛に行はれ彼等は喫烟を以て殆ど飲食物に次ぐの必要品となし決して贅澤品とは思はざるなり是氣候の寒冽なるに原因するか肉食に原因するか或は烟草を産すること多きの結果ならんか滿洲は新殖民地にして人心娛樂の要に供する者甚寡なく好尚の程度甚だ低し唯喫烟は僅に彼等の娛樂心を充す所以ならん喫烟の法は烟草を執て火上に點し囊中に盛て粉末となし大なる烟管中に裝して火を點

す客の來るおれは他の有無に關せず必ず先づ之を勸む若し喫せざる者おれは問ふに財理なるかを以てす是財理なる一種の禁烟禁酒の會おれはなり總て男女を問はず十六七歳以上に到れば殆ど喫烟せざる者なし特に十歳内外の女子にして長き烟管を携ふるは尤も外人の注目を受けり

喫阿片の風も亦盛に行はれ戸々必ず喫阿片の具を備ふ譬へは十七歳より幾許の阿片を喫して今日に至ると云ふ事は世計豊富にして些の不自由を感せざることを誇示吹聴する者にて他をして羨慕の念に勝らしむ余も亦屢喫阿片を勸めらる故に其身心を蠱毒すること徐説するも彼等は容易に心服せざるなり其林則徐の例を引き喝破するに至りては彼等も亦首肯せざるを得ざるなり尤も怪む地方官は人民に告諭し罌粟（阿片の原料）を種ゆることを獎勵す是租税の利益おれはなり嗚呼我國も亦此種の獎勵なきか賭博の風の盛なること清國廿二行省中廣東省を除くの外滿洲を以て第一となす滿洲中又吉林、三姓、寧古塔を以て最盛の地となす公然賭場を開き盛に輸贏を決す其他の諸地と雖も賭場なきに非ず唯甚しからざるなり是其地方官吏の禁厲するに頼る然れども

市街内に禁煙すれば野外に於ては特に夜中は各地の宿店皆門を鎖し然る後に輪贏に従事するは同一轍に出るか如く全く輪贏を以て一の職業となし各地に往來する者あり是又滿洲の新殖民地にして無頼の徒多きか爲なり賭場わるの處必ず喫阿片館と妓樓とは之に附隨せり

滿洲現在住民の多くは則山東人なり次を南部盛省則遼東及直隸河南人の黄河に密接する地方より移住せる者彼等困難に遭遇し貧窮と戦ひ飢寒と争ひ僅に今日ある者孳々汲々日も亦足せざるか如く其荒蕪を開墾し其田野を耕耘し雞を飼て起き星を戴て歸る粗衣危食自ら安し目の以て憊むるなく耳の以て悅はしむるなし彼等此間に在て晏然たり彼等は高粱小粟子口腹を飽かしむれば足り襤褸僅に身を被へは則ち足る其屋以て雨露を凌げは足る故に房屋の如きも父子夫婦兄弟皆同處し殆ど隔壁を設けざる者あり其相接する之を南部諸省に比すれば質朴敦厚にして殘忍酷薄の度甚たしからず特に彈奉寧古塔間寧古塔三姓間に於て大古の遺風を存す彼等は旅客の宿泊を自由ならしめ飲食を自由ならしめ一錢一厘の錢を要せざるのみならず如何に與へんとするも彼等は手をた

も觸ざるなり要するに滿洲の風俗は之を南方に比すれば殘忍酷薄の度甚た薄く質朴敦厚なり衣服飲食に於て奢侈ならざるなり家屋邸宅に於て壯大なり無頼漢盜賊甚多し賭博は盛に行はる是新移民地に於て免れざるの數ならん其冠婚葬祭等に於ては異なるなきも死者の骨を故山に歸葬するは今猶盛に行はれつゝあり

農 耕

土地廣大なれば其山脈江河原野沼澤亦大ならざるを得ざるは自然の數なり其原野既に大なれば其耕耘の法も亦隨て大ならざるを得ず余嘗て河南の野を過さるは實に清國二十二省中に於て揚子江黄河の中間に於ける大平野なり又嘗て福建の山野を跋渉す山峯の多き溪谷の狹隘なる是又廿二省中第一位に居らん然も河南の大平野となく福建の溪谷となく牛馬の耕耘を成し得るの地は盡く牛馬耕耘なり特に河南の大平野に至ては規模の見るべきものあり

滿洲の平野も亦甚廣大なるものあり松花江平原則ち呼蘭、北開林子、哈爾濱、阿勒楚喀、等松花江南北に跨るもの約五千方里東遼河平原則ち伊通河穆魯河水域より西通江

子に至る約四千方里遼河平原則ち奉天以北以南西新民に至り南營口に至る約三千五百方里等の大平野を有す故に其耕耘法も亦大ならざるを得ざるなり

滿洲に在て其耕耘は牛馬騾驢を混用す其法鋤犁に牛馬を二頭三頭或四頭を駕し之を挽かしむ一夫後より其の把柄を操り或は淺或は深或は右し或は左し或は進み或は止り或は緩或は急一農夫の口より出る「オー」「デー」「エイ」「レット」等の五六語は彼れ農夫も亦牛馬騾驢の一跡なるかの如く彼牲畜をして農夫の命令に従順し一左一右唯其意のままならしむ又其土塊を容粹ならしむるか爲に周圍三寸許の小木を揉めて柵の如くし其大四尺餘なる者に牛馬を駕し一たび耕耘せし地止に挽く終て畦を造り播種も亦牛馬を用ゆ唯粟は然らず播種の後土を掩ふ亦周圍二尺許の長さ四尺許の圓材を車の如く轉轆ならしめ之に牛馬を駕し畦上に挽く是一般耕耘の法なり其間人力を用ゆる實に僅少なり粟麥既に長し雜草も亦長す此に於てか耘さらざるを得ず鋤犁の稍小なる鼻梁を有せる物を牛馬に駕し畦間に挽く前法の如し鋤犁の及ざる小部分は僅に人力を以て鋤を加ふ

蓬草人を没するの處始めて荒蕪を開墾するも略前法と同じく唯牛馬を用ふる多きのみ其最も多きは七頭に至る者あり

耕耘播種の法以上の如く大且簡なるのみならず嘗て糞土肥料を用ふるを見ず若夫糞土を用ふる者は都會に接近し黃瓜、白菜、葱、韭、茄子等を耕種する菜園にのみ其他は決して糞土を用ひず然も其莖麥粟梁の長する我日本に於て見る能はざる所なり如何に其土の沃壤なるかを見るべきなり

以上の如く其原野既に廣大其耕耘も亦規模甚大なり故に其畦畝も亦甚長大ならざるを得ず其畦畝の五六百歩なる者は往々見る所なり故に其兩極端に在る者は誰たるを辨知する能はざるなり

漢人族の性質たる古に拘み今の長を取るに吝なり然も其利のある處を知れば之に赴くこと水の低につくか如し聞く米國の耕耘法は最良の利器を用ひ其規模甚廣大なりと然も如何なる利器と雖も其土地狹隘なれば之を用ゆるに由なし唯夫滿洲なるかな以て大農園となすべし

滿洲の既墾せる大平原

- 五千方里 松花江平原
- 四千方里 東遼河平原
- 三千五千方里 遼河平原
- 一千方里 齊々哈爾の南北嫩江以西
- 七千方里 墨爾根以南嫩江東西
- 五百方里 吉林土們平原
- 五百方里 牧丹江平原 寧古塔附近一帯

以上の平原あるを見は滿洲の野か如何に大なるかを見るに足る然も是唯滿洲平原の幾部分のみ特に注目すべきは牧丹江吉林土們の平原の外皆相連續せり余は五月廿九日三姓を發し七月廿二日營口に歸來す其間口を費す五十五日一山嶺をも上下せざるなり又松花江以西嫩江の東西遼河以北興安嶺以東內蒙古の地は滿洲の懷裏に介在して一萬五六千方里の大平原を有せり又大ならずや

漁獵

北清地方に遊ふ者は鰻よりも鮑よりも總ての日本より輸入する海産物よりも鯉及其他の乾魚の多きを看るなるへし又西比利亞に遊ふ者は其黑龍江の魚族に富めるに驚くなるへし余初め寧古塔より牧丹江岸を下り三姓に至るの間尤も魚鱸の多きに驚く後又小舟に駕し嫩尼江を下る雁と鴨とは江を覆ひ雛兒を覆育し江中に遊優するの風景は殆ど仙境の如く又其兩岸沼澤のある處木材を建て運ねて柵の如くす初めは其何たるを解せず之を舟人に問へは打魚なりと打魚とは捕魚場なり其法沼澤の地を擇ひ其口の餘り廣き處は堤防を築き適宜の廣さとし其口に木材を立て運ね以て大水の到るを待つ水到れば魚族其中に滿ち大水の將に退減せんとするを窺ひ柳條を以て編みたる簞を木柵に托し其口を塞き水の落つるを待ち之を捕ふ誠に寛緩の法方なれども一回の水量増減に於て數萬尾を捕ふるを得ると云ふ又平時は江中に地引網を施して以て之を捕ふ其魚族中には鮎尤も多きも彼等漁夫は之を捕んともせず盡く江中に放つ彼等の目的とする處の物は鯉と鱈と及鮠魚なり之を鹽漬となし通江子及法庫門に輸送す鯿魚は三姓呼蘭

塙に賣却し經費を辨すと云ふ

又支那にては滿洲固有の土着人則瓦爾喀人に貢貂部落と命名せり是れ瓦爾喀人が多く貂皮を貢獻するか故なり又達瑚爾、鄂魯春、索倫、瑪涅克爾に冠するに打牲の名稱を以てす是れ以上の土人が多く獸類を獵するに由てなり

牧 蓄

滿洲に於て牧畜の事を論せんと欲せば勢ひ内蒙古に波及せざるを得ず豚の飼養を除くの外牧畜の業は殆ど蒙古人の専有にして滿洲に在る山東直隸及河南の移住民は伐木開土の業に従事し日も亦足さるの勢ひにして殆ど他を顧るの暇なきなり然も滿洲六萬三千餘方里の土牧畜に従事すべきの地なきに非ざるなり唯になきのみならず餘地甚多きなり好適地甚多きなり余が旅行中尤も好適地として思惟せしは三姓より白楊木に至るの二百餘清里松花江の兩岸青草繁茂小溪流も亦多く尤牧場に適せり又呼蘭の北小廟子より齊々哈爾に至る五百餘清里間は實に廣大なる大草野にして幾百萬頭をも飼養し得べきなり余偶此間を經過し布打城に於て蒙古人の遊牧する一馬群を見る約千頭許なり

此地芳草に富めるも水に乏し故に一定の地に井を穿ち汲みて以て飲用せしむ飲みをばれば則又馬群を驅て其赴く處に従ふ又興安嶺の西海拉爾の地は古來より良馬を産するを以て名あり唐の末遼遼の騾起するは實に此良馬の力に頼れりと以上の地は唯是滿洲の一部分にして談るに足ざるなり

黑龍江省の西南吉林省の西北興安嶺の東、西遼河の北に科爾沁、札賚特、杜爾伯特、郭爾羅斯等の十旗あり地方約一萬四五千方里滿洲と密接の關係を有し長春に産する騾は則以上各地の産にして一千八百九十年露領に輸出せる馬のみにて二萬頭に上れりと云ふ然も吉林より琿春を經過し烏港に輸出する牛羊豚其數明ならざるも三四萬頭以下に下さるなり又年々山海關を歴て北京に入る者少くも三四萬頭を下らざる也試に滿洲の人口を二千萬とし一家の人口を十人とすれば二百萬戸なり戸々二頭を飼養する者とすれば實に四百萬頭を有す然も戸々を平均するも四頭以下を下らざるへし支那の俗たる市街地を除くの外如何なる貧民と雖も豚豕の飼養せざるの家はなき也市街と雖も多少の餘地を有する者は必ず飼養せり又村落に在りては少きも三四頭多きは十餘頭に至る

牧畜に要する地質、風向、晴雨、山川、草の種類等に至りては固専門の技術を要するも
の余の知らざる所なるも今其大略を叙して大方の教を待たん

三姓より呼蘭に至る南北に小白山及東興安嶺あり相距る三四十清里若くは六七十清
里松花江其中央を西より東に貫き小溪流兩山脈より南北流す土地多く水氣を帯ふ
小廟子より齊々哈爾に至る茫々たる大高原にして東方三百清里を隔て、興安嶺ある
も固より望み得へきに非す一の江流あるなく一の沼澤あるなし其西方に一瑚裕爾河
及同名の沼澤あるも殆ど此大高原と相渉らず其一小部分のみ其土質は一般に赤土に
して乾燥せり

雨量は先寡少と云ふへし其季節は六七八の三個月なり滿洲に在て一たび北風に變す
れば必ず降雨となる

風向は殆ど一定にして三四月頃より五六月頃まで南風にして道路沙塵を捲き行歩す
る能はざるに至る

草は長形の麥及び杜若の如きもの多く圓形なる者寡し

製造業

滿洲の地は六萬三千餘方里と二千萬の人口とを有するに關せず人文未だ開けず人民生
活の度未だ最下層に在り漸く荒蕪開墾の時期なるを以て其製造工業の如き僅に只日常
の需用に應ずるに過す若夫れ蒸汽力を用ふるか如きは寂々寥々只二三の官業あるのみ
滿洲中製造業の尤も盛なる者を油房とす油房とは植物中より油を搾取する房屋の義
則油屋なり其尤も大なる者は則營口にして廿七戸の油房ありと聞けり其數量の若干な
るかは知る能はざるも一個の油房は二百臺の搾油機を有する者あり其器機は騾驢牛馬
を用ひて之を壓搾す其油は之を南方及滿洲内地に輸し其糟は之を日本及南方にも輸せ
り内地の各都會にも油房なきはなし然も其數は少く其量は寡きのみ内地に在て尤も大
なる者を燒鍋とす燒鍋とは燒酒を蒸溜する房屋の義なり滿洲の内地に遊ぶ者は各地
に殆ど城壁の如き小なるも方百歩許大なるは方三百歩許の大邸宅を見るなるへし是れ
則燒鍋なり燒鍋を開設する者は固地方の大豪農若くは大富豪なれば後遂に一部落をな
し遂に執て以て一部落の名となす則新房燒鍋三房燒鍋の類なり而して此燒酒は小兒と

一部の婦女子を除く外は日々二回の食事前に最少量なるも猶且二兩則ち廿夕を用ゆ故に一日の量は則四兩なり一年には九十斤なり之を滿洲二千萬人中の四分の一之を飲用する者とすれば一年は實に四億五千萬斤とす假に二斤半を以て一升とすれば實に一百八十萬石を得一石に十三圓の税を賦課すれば二千三百四十萬圓を得へし實に大ならずや次を食鹽となす是亦實に滿洲二千萬人の必需品なれ其數量も亦甚多く一人一日の量を一兩とすれば一年の量は二十二斤半にして二千萬人一年の量は四億四千二百萬斤なりとす然も清國北部一帯の製鹽業は乾田法則ち天日製にして人力を用ふる甚寡し滿洲中に在りて尤も人工を費し妙技を凝し稍工藝に渉る者を婦人の首飾及び手飾となす是實に婦人唯一の嗜好品にして金銀及び七寶を以て之を造る奉天のみにも其數一百以上に上るへし特に奉天は其製造のみを専門とする一街あり銀店則兩替店も亦其製造に従事せり各地は一般に銀店其業に従事す吉林も亦其業甚盛なり其他製革あり製皮あり磚瓦、火繩銃、馬鞍、農具、鍋、大小刀、弓矢あり齊々哈爾、伯都訥に於て江石と稱する瑪瑙石を以て烟管の嘴子を造るを以て有名なりとす南部諸省も亦之を愛用す

奉天府東門外郭内に鑄銀局あり三個の烟突矗立盛に鑄貨に従事せり其規模稍大にして觀るべきものありしなり其種類は

- 一 圓 其文中央に光緒元寶と書し其縁に奉天省造庫平七錢二分と刻し裏面に龍を刻せり
- 一 五十錢 其文皆同じ唯庫平三錢六分を異なりとす
- 一 二十錢 庫平一錢四分
- 一 十錢 庫平七分二厘
- 一 五錢 庫平三分六厘

以上五種の銀貨を鑄造し之に一定の價額を付し銅錢則ち一厘錢と交換するに一圓は六吊六百文五十錢は三吊三百文二十錢は一吊二百文十錢は六百六十文五錢は三百三十文と交換す然も營口は南部諸省と同しく時價を以てす

吉林にも機器局鑄銀局及火藥製造局あり城東五清里の地に松花江を挾て相對峙す火藥局は松花江南岸丘陵の上に在り東西四百餘步南北百步に滿たす廻らすに牆壁を以てす一大烟突と五六個の烟突とは丘上に矗立し遠望尤も壯觀なり此局は光緒十一年末